

---

# LEGEND OF THE SEVEN

トモカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

LEGEND OF THE SEVEN

### 【Nコード】

N3148X

### 【作者名】

トモカ

### 【あらすじ】

7人が異世界からやってくる。辿りついたのは魔法世界、ハルゲギニア。

目の前にいるのは桃色の髪の魔法少女。

召喚されたのは才人君だけではない…？

他の世界から召喚された6人が魔法の世界の運命を揺り動かす。

その6人は世界を滅ぼす者なのか、それとも、世界を変える者なのか。

## 死神兄妹の受難

三日月に照らされた夜の住宅街を大小二つの影が跳んでいく。

季節は冬。透き通り、突き刺すような空気がさらに三日月を研いでいる。

僅かばかりの月明かりに照らされた二人は、お互いに上下伴に黒い袴を履いている。

大きいほうの影は橙色の髪に茶色の瞳という日本ではあまり見ないような色をしている。月に照らされたその顔は凜々しさと力強さ、そして優しさを備えた男の顔をしている。

背中には柄も唾もない、持ち手を布で巻いただけの武骨な身の丈程の大刀を背負っている。

年の頃は、まだ何処と無く世間の垢に塗れていない頃。

名前は黒崎一護という。

「夏梨、付いてきてるか？」

跳んでいく速度を緩めることなく、顔だけを後ろに向けて付いてくる小さな影へと話しかける。

「大丈夫、一兄」

そう答える小さな影の方は、黒い髪に黒い瞳、何となくはねっかえりのような感じ、強い意地を見せる目をしている。何処と無くあとけなさを残した、まだ女の子と呼んで差し支えない歳の子が付いてきている。腰には小さな背丈にあった、刀を携えている。

一護を「兄」と呼ぶ、この少女。名前は黒崎夏梨。一護の実の妹である。

「早く帰らねーと遊子に怒られそうだ」  
「夜食の用意してくれてるかな」

そんな軽口を叩きながら、家路を急ぐ二人は只の人間ではない。世界に蔓延る悪霊を切り捨て、彷徨える正しき魂をあの世へと導く神、死神なのである。

神話の御世では創造神に次ぐ神格を持つ、死神。

多くは髑髏と大鎌がイメージだろうが、それは歌舞伎者が生み出した幻想に過ぎない。実際の死神はこんなにも人間臭くて、人の思いを理解できる者達なのだ。

そんな二人も生まれたときから死神だったわけではない。

最初はただ、自分たちの生きている世界にふらり、ふらりと漂う霊が見えるだけ、ということを除けば友達と遊んで、偶には真面目に勉強するという、何処にでもいる高校生と小学生だった。

だが因果の交差は一護を死神として迎え入れた。

今では数々の敵を打ち倒してきた立派な戦士として、仲間達からも一目置かれる存在へとなっている。今や次の死神たちを纏め上げる頭、護廷十三隊、への次期総隊長として候補が上がるほどの存在になっている。

兄の成長と想いを受けた妹は、その兄を守るべく修行に励んだ。

その結果は今の姿にも表れている。体格や経験の差からその背は遠いが、いずれ同様の力を手に入れるだろうというのが、彼女の師の見立て。

尤も二人ともまだ高校生と中学生だ。これから先の人生の方が圧倒的に長いし、まだ死ぬ気もない。まだ人生は謳歌したい。

二人の前に「クロサキ医院」という看板を掲げた家が見えている。一家の大黒柱が街の診療所を開設しているこの家こそ、彼らの生家であり、暮らしている家でもある。

「もうすぐだな」「腹、減った」

そんな夜食を待望する兄と妹の前に、上から夜間に似合わない、ハイテンションな声が掛かってくる。住宅街の屋根の上、その男は颯爽と降り立つ。

「スピリイイツツ、アー、オオオルウェイズ、ウイズ、ユウウウ  
！！」

確実に騒音問題で訴えられそうな程の大声を上げて、降りてきた、いや、落ちてきたのは髭に丸サングラス、ドレットヘア、背にはマントと何とも可笑しな格好をした男だった。

「ボハハハハ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「久しぶりだな！マイー番弟子！家に行けば二人ともい無いということからな、探し回ったのだぞ！」

突如、現れたこの男の名はドン・観音寺。霊の見える、所謂霊能力者という存在だ。力としては、はつきり言って二人の足元にも及ばない。及ばないのだが、嘗ての出来事から一護のことを、一番弟子と呼んで憚らない。一護にとっては迷惑千万なのだが、観音寺自身は気がついていない。

「それにそのガールは、夏梨ではないか！キミもボーイと同じく死神になったのかね！」

「あ、まあ・・・」

ドン・観音寺の言葉に若干イライラしながら、夏梨は答える。決して嫌いではないのだが、クールぶってローテンションで生きている二人にはどうも反りが合わない。

「ならば本格的に参入しようではないか！キミは二番弟子だ！」

空気を読まないのが、ある意味、この男の素晴らしいところだ。  
カチン。

「うるさい！」

観音寺の言葉に二人揃ってキレる。裏拳を彼の顔に叩き込んで、サングラスに罅を入れる。高位の死神の左右両方からの鉄拳制裁だ。普通の人間が喰らったら、サングラスどころか頭蓋骨が真っ二つである。少なからず霊力のある観音寺だからこそ、この程度で済んでいるのである。

「アウ！何をするんだね！ボーイ、アンド、ガール！」

「いや、何かムカついた」

「それだけかね！久しぶりの師匠との再会だぞ！もっと喜びたまえ！」

詰め寄る観音寺と冷静に切り返す一護。死神は普通の人間には見えないので何も知らない人間が見れば観音寺が一人ではしゃいでいるようにしか見えない。

そんなときだった。夏梨が今の異常に気が付いたのは。

「一兄」

「ん、何だ？夏梨」

一護の服の裾を引っ張って、状況を知らせる。一護もその異変に気がついた。

喚いている観音寺の後ろに、光る鏡のようなものが浮かんでいる

のだ。しかも、当の本人は気がついていない。若しかしたら、有害なものかもしれない。兎に角、二人はこれを見たことがない。得体の知れないものに対して、警戒を取るのは当然。すつと戦士の本能として刀の柄へと手を伸ばす。

「二人とも、酷いじゃないか！いくらなんでも、刀を振るうのは勘弁してくれ！」

「黙ってる」

真剣な顔になって、二人は光る鏡を見据える。

「何だと思う、一兄？」

「解らん、見たことないもんだ」

「むづ、どうしたというのだね？」

くるつと振り返ろうとした観音寺の体が、その光る鏡に触れかける。

「危ねえ、観音寺！」

「くー！」

咄嗟に駆け出す、二人。観音寺を遠ざけ自分たちがその鏡の前に立つ。立ったのだが、僅かばかりに触れた夏梨の服の袂が鏡の中へと消える。

「な！」「え！」

袂は鏡を突き抜けることなく消えさり、凄い力で夏梨を引き込む。その状況に驚き、懸命に引つ張り挙げる一護と夏梨の足の抵抗も虚しく、鏡はは既に夏梨の左半身を飲み込んでいた。

「何だ、コレ？ 抜けねえ！」

「ふぬぬぬ！」

真つ赤になつて抵抗する兄妹。それを見ていた観音寺が立ち上がる。

「なにやら弟子の一大事のようにだ！ このドン・観音寺、微力ながら力を貸そう！」

胸に手を当て、大仰な仕草で喋る。見る人が見れば間違いなく、頭の痛い人だ。

事実、霊など見えない人の方がよっぽど多い。もう一人、一護と夏梨の間には兄妹がいるが、その妹は全く霊を見ることも、感じることも出来ない。死神も同様。大抵の人は世界の裏で、このような事が起こっているなど露知らず、一生を終えていくのである。

「助かるぜ、観音寺！」

自分が弟子かどうかはこの緊急事態、心底どうでもいい。今の状況がどうにかなるなら、観音寺だろうが無力な中年親父でも力になる。誰でもいい。

だが、今すぐに手が貸せるのはこいつしかない。世話になるのは癪だが、恩人には違いないので終わったら、多少なりとも付き合つてや……

「ム！」

つるりと何も無い屋根の上で盛大にこける。

その観音寺の手が、一護の体を押し、一護までも鏡の中へと叩き



込んでしまっ。

「オイ、コラ！」

「ム、失敗してしまった！」

サングラスの向こうの目は見えない。もし、笑っているなら殴り飛ばす。そう兄妹は心に誓って観音寺の顔を見上げると、泣いていた。自分の力不足、失敗を嘆いているのだろう。そう思ったら、ちよっただけ頑張ってくれと思う。もう二人とも三分の二は吸い込まれている。段々と吸い込む力が鏡の方が強くなり、両の足が飲み込まれるところまで来ている。

「マイ弟子たちよ、頑張れ！」

（まさかの励まし！？）

観音寺から来たのは何の根拠もない精神論の励まし。手を貸してくれるとか、そんなことは一切ないようだ。愕然というか、開いた口が塞がらない。

「何だと、テメー！」

「一兄、もう無理！」

耐えていたが、ついに両の足が消えてしまった。これではもう踏ん張りが利かない。いよいよ切羽詰ってきた。普段から冷静で沸点の低く、落ち着いている二人の顔にも焦りと怒りが見えてくる。勿論、怒りの矛先は事態を悪化させた観音寺だ。

「せめてもの師匠からの手向けだ。これを持って行き給え」

（ダメだ、完全に酔ってやがる…）

そういつて観音寺が手渡したのは、ボロくさいライオンの縫いぐるみ。二頭身の良くある市販品だ。鏡の淵を掴んでいた一護の指を若干強引に引き剥がして、ぬいぐるみの体を握らせる。

「何してんだ、テメー！」

「そんな、怒らなくてもいいだろう！喋る縫いぐるみだぞ、チヨールアではないか！」

そんな観音寺のハイテンションな声がスイッチだったのか、ぼろい縫いぐるみに魂が入ったかのように動き始めた。

「何やってんだ、一護？」

理解できているのか、いないのか。ぬいぐるみは呑気な声で、一護に話しかける。右手で縫いぐるみ、左手で淵を掴んでいる危機一髪の状態でこんな呑気な声は腹立たしいだけだ。夏梨は幸い頭だけが出ている状態。一護にしがみ付いて何とか持っているのだ。

「つかコレ、コンじゃねーか！お前、また俺の部屋勝手に入ったな！」

この喋るぬいぐるみ、名前をコンという。何とも不思議な仕組みで動いているのだが、それを説明している時間も余裕も今は無い。

「ははーん、一護。お前、困ってんだな。何なら助けてやってもいいぜ」

随分と上から目線の物言いだ、今のコンは状況を理解していないようだ。全身を完全に一護の手に驚？みにされた状態。

待っているのは一護・夏梨と一緒に助かるか、一緒に吸い込まれ

るかの二択。

「そうか。じゃ、お前も運命共同体だ」

「え、何で？」

「頑張りたまえ、マイ弟子たちよ！これも修練だ。キミ達の成長を期待している！」

「覚えてろよ！観音寺！」

そう言つて一護と夏梨、そして喋るぬいぐるみ、コンは光る鏡と吸い込まれてしまった。

後には何の痕跡も残っていない。埃一つ、髪の毛一本、落ちていない。

「フ」

誰も居なくなった屋根の上で、観音寺は不敵に笑う。

「スピリイイツツ、アー、オールウェイズ、ウィズ、ユウウウウ  
！」

「うるせー！今何時だと思つてんだ！」

大音声で自分の合言葉を叫んだ瞬間、家の住人に烈火のごとく怒られてしまった。

## 退魔師の遁走

「ハア、ハア」

月明かりも届かないイギリスはロンドン郊外の深い森を一人の少年が何かを追われるかのように奔っている。既に組織を裏切った彼は、もう戻ることは出来ない。だからといって行く宛てが在る訳でもない。それでも、彼は走る。自らの運命に決着をつけるため。

灯すらない状態で森の中を奔るといのは、思いのほか辛い。

それは鍛え抜かれた軍人でも同じ。ましてや今だ成長段階である少年には更に負担が多い。

「疲れた…」

足を止めるのは危険だが、疲労した状態でこれ以上の行動は危険だと判断し、手頃な木の下に座り込む。ちょうど根がいい具合に地上に露出していて、腰掛けにはピッタリだ。

すらりとして余計な脂肪も筋肉もない体躯、顔もまだあどけない。だが、髪だけは老人のように白い。それだけでもおかしいのに、顔には五芳星を逆さにした刺青らしき模様がある。

「こんなとき、師匠ならどうするかな…」

年頃にしては細い体は、赤く縁を取られた黒衣を纏っている。シンプルなデザインだが、ボタンは純銀であったり、刺繍は銀系であったりと色々と高級な素材が使われている。

彼は行方知れずになってしまった、赤毛の師匠のことを思い出す。

(アレン、俺はな…)

顔半分を仮面で覆った師匠は優しく…

(とつとと行け！っていつてんだ！)

想像の中で少年の脳天に一片の迷いもなく、ハンマーを振り下ろす。そこまで想像して身震いがした。決して冬の森の寒さではない。師匠が怖くなったのだ。

少年、アレン・ウォーカーはヴァチカン教会の対AKUMA部隊、エクソシストであった。

あつたと過去形なのは、たった今、好きな人も、世話になった人も、皆を裏切つて遁走してきたからだ。裏切つたのには彼の運命が関係しているのだが、語るにはあまりにも重い。

「序でに師匠の武器とかパチつたけど、大丈夫だよね…？」

腰にはキラリと光る両手大の銃がある。本来なら彼の師匠、同じくエクソシストであるクロス・マリアンにしか使えないのだが、何故かしつくりと馴染むのだ。「使える」と直感で判断した彼は師匠が残したモノを色々と持つてきたのだ。

厚く膨れた財布には見たことのない金貨や銀貨が入っている。小さな保管箱には薬の原料となるだろう薬草の種を根限り詰め込んでおいた。そして、師匠が持っていた仮面のスぺア。

自らの意思で裏切っておきながら、心配する。決して非情から裏切った訳ではない彼には、教会の重役であった師匠の品々を盗難するということは、正直言つて、あまり気が進まなかったが、これも自らの運命と言ひ聞かせ、奪取したのだ。

その他にも師匠の所以以外にも、色々とギツて来たものはあるが、多分役に立つだろう。

「タイムキャンピー！」

大声でなく、それでいてよく通る声で名前を呼ぶ。その声に答えるように空から小さな星が一つ降ってきた。鳥でもなく、蝙蝠でもなく、落ちてきたのは金色の羽根の生えたボールだった。

ボールは呼ばれた事が嬉しいのか、アレンの周りをクルクルと飛び回る。

「できるだけ遠くへ行こう…」

宛てのない少年の旅が始まる。

「箱舟」

短く噛み切るような言い方で起動コールを送る。目の前には白く輝く水晶の様な墓標が立ち上がった。それに感嘆することもなく、彼は水晶へと手を伸ばす。ずっと彼の体は水晶を付きぬけ、消えてしまった。

完全に消えてしまったことを確認すると、水晶は役目を終えたかのように瓦解し、粉雪のように落ち葉の上へと降り注いで、後には何も残らなかった。

だが、これが彼の意図していた門であったかどうかは誰も知らない。

彼だけが知っている、彼だけの行き先。

そうして彼は異世界へと足を踏み入れる。

思い人の声も届かない、世界へと。

## 鋼兄弟の慈善事業

大通りの昼下がりに。

人や車が行き交い、商店は軒先を並べて元気の良い声を人々に声を掛け捲る。男のだみ声もあれば、澄んだ女性の声もある。兎に角、商人は売らねば生きられないのだが、皆、必死になって声を掛ける。

そんな時。

ガシャーン

ガラスが盛大に割れる音。次に聞こえてきたのは悲鳴。

交通事故だ。どうも車がハンドル操作を誤って、店に突っ込んだらしい。昼下がりの街に嫌な空気が流れ始める。

「だ、だ、大丈夫かい？」

店の中でのんびりと新聞を読んでいたハゲ頭の店主は、幸いなことに壊れずにすんだガラス戸から飛び出してくる。店の中は商品が飛び交い、泥棒に荒らされたかのよう。気は動転しているが、兎に角、怪我しているなら店の修復よりも運転手の方だ。自分に怪我が無かったのは僥倖としか言いようが無い。

「だ、大丈夫です」

「そうか、なら良かったよ・・・」

方々の体でフロントが拉げた車から這い出てきた若者を見て、店主はほっと一息つく。身なりは良いらしく政治家が着るような服を着ているが、それもガラスの破片で切り裂かれている。頬に一筋の

紅い血が流れているが、死ぬような怪我は無いようだ。

「にしても…」

ハゲ頭の店主は自分の店の惨状を見て、愕然とする。紆余曲折あってようやくこの場所に店を構えて5年余り。小さな雑貨屋ではあるが、今日車が突っ込んだために、窓は割れ、壁には大穴が開いている。幾らぐらいかかるのか、頭を抱えた。

「あ、あ、申し訳ありません！」

落ち着きを取り戻したらしい若者が、必死に頭を下げる。頭を下げて車や店が元通りになるわけではないが、それでも下げねばならない。

「いや、いいよ。頭を上げてくれ」

「いや、しかし、これでは…」

そう商売にならない。いくらかの蓄えはあるだろうが、生活が苦しくなつては意味が無い。

しばらくの間、押し問答が続くが、幾ら続けても意味が無い。

「お困りのようですね！」

そこへまだ若く瑞々しい少年の声が届いた。

二人が揃って顔を声の方へ向けると、そこには金髪と赤いコートという随分と派手な感じの少年がカッコいいポーズを決めて立っていた。後ろには彼を盛り上げているのか、全身を鎧で覆った大男がポーズを決めていた。



(随分と、変な二人だな…)

最初に思ったのはコレだった。いきなり現れた変な二人組。その程度の認識だった。

つかつかと二人が近づいてきて、もう一度。

「お困りのようですね？」

「あ、あ、まあ、店が壊れちゃって…」

少年のテンションに押されて、しどろもどろになりながらも今の事情を説明する。

ふんふんと頷きながら聞いていたが、少年は立ち上がると、白い手袋に包まれた両手を勢い良く合わせる。パアンと心地よい音がして、両手を離し、今度は手のひらを店の方へと向ける。

「うわっ！」

目も眩む光が瞬間、走ったかと思うと。

「す、すげえ…」

店がなんと元通りになっていたのだ。流石に事故前と同じとまでは行かず、中の商品は散乱した状態であるが、それでも元々の大枠が戻ったというのは嬉しい限りだ。

「おや、こちらの車も壊れていますね？」

そついうと少年はもう一度、同じ動作を繰り返す。後にあつたのは完璧にガラスが元通りになり、拉げたバンパーも新品同様になっ

ていた若者の車だった。若干、ディテールに趣味の悪さが出ているが。それを見ていた事故の野次馬達が、こぞって金髪の少年の下へとやってくる。

「直してもらえませんか？」と取っ手の取れたバックを持った老婦人、

「こつちも直してくれ！」と欠けたかなづちを持ったガタイのいい大工、

「これはダメ？」と車軸の折れた電車の玩具をもった子供。

それら全てを前にして少年と鎧は一言。

「一列に並べ！全部、お安い御用だ！」

「はい、こつちに並んで」

次から次へとやってくる壊れた物を持つてくる町の人。

それを全く疲れた様子も見せず、一瞬で直していく少年と鎧。

「修理代など頂きません！全て元通りです！」

一回喋るごとにポーズを決める少年。何でも直してくれくれる彼は直ぐに街のヒーローとして祭り上げられた。

「せめてお名前だけでも、お伺いしたいわ？」

最初にバックを直してもらった老婦人が優しく、少年に語り掛ける。

「なーに、名乗るほどの者じゃありません！」

もう一度、びしつと決めて、別のポーズを取る、

「貴方の街の国家錬金術師、エドワード。エドワード・エルリックでございます！」

「そして、僕は弟のアルフォンスです」

少年と鎧の名乗り、街の人は歓喜に沸く。

「あの噂の！」「エルリック兄弟かよ！」

「エルリック兄弟つていやあ、最年少の国家資格者だよな！」

「俺ら、軍つてだけで誤解してたぜ、いい奴も居るんだな！」

この世界には物質を理解、分解、再構成する科学技術、錬金術が存在する。

物質の形や中身が解れば、モノを元通りに戻すことも簡単だし、例えば土を金に変えたり、また金属の形状を変えたりすることも可能な技術だ。勿論、人間も物質の塊であるから、傷を治したりということも可能だ。その利便性と比例して習得するのは難しく、彼の生きるこの国でも、まだ完全に浸透してはいない。

しかし、科学技術は往々にして軍事転用されるのが常だ。

故にこの国、アメストリスでは国家資格が設けられ、莫大な研究資金と引き換えに軍属となる事がある。それがエドの持つ国家錬金術師という称号なのだ。故に「軍の狗」と罵られる。軍や戦争を嫌っていた師匠には、このことがばれた時にはこっぴどく叱られた。だからこそ「ありがとう」などと言われることは、まず無い。

「では、皆さん！壊れたものがありましたら、またいつでも！」

そう言うと颯爽と歩き去った。

ちよつと大通りから離れた路地裏。

そこには先ほど、大活躍だった兄弟が居た。

「いやー、結構疲れたな」

「そうだね、兄さん」

アルの鎧に緩く拳を入れると空の筒と同じ反響音がする。エドの右手からも金属が触れ合ったときと同じ、甲高い音が響いた。

アルの鎧の中には肉体が存在しない。全くの空虚な鎧なのだ。同じようにエドの右手、そして左足は生身の手足ではない。

人工義肢、機械鎧 オートメール。

個人の神経を繋ぐことで普通の義足などよりも、さらに人間に近づき動きが出来る鋼の腕。

この手足が彼の国家錬金術師としての二つ名「鋼」の由来でもある。

アルが鎧なもの、エドの手足が機械鎧なもの深い理由がある。だが、それは二人の口から喋るべきものであり、人が軽々しく聞いていいモノではない。理由を知っているのは幼馴染で、義肢工のウィンリイ・ロックベルと彼女の祖母のピナコ。彼を国家錬金術師にスカウトした直属の上司であるロイ・マスタング国軍大佐、そして、彼の副官であるリザ・ホークアイ中尉くらいである。

「にしても、これで随分と有名になったんじゃないか？」

「そうだね、これで傷の男が釣れるといいんだけど…」

彼らがやっていたのは、決して慈善のためだけではない。

自らを狙っている連続殺人犯、コードネーム「傷の男」を探す為だ。もう何人も国家錬金術師だけを狙って殺している「傷の男」は

当然のようにエドも狙っている。  
更なる被害を抑えるためにも、自分を餌に一騎打ちを仕掛けよう  
としているのだ。

ふと、そんな時。

「ねえ、兄さん。あれ何かな？」

アルが路地裏の行き止まりに浮かぶ、鏡のようなものを見つけた。  
サイズは2M近いアルでも十分に通れそうなくらいの高さと幅。  
突如として現れた謎の物体を警戒する。

「何かわかるか？」「いや、さっぱり……」

とりあえず近くに落ちていた小石を投げつける。路地の壁にぶつ  
かることなく、すっと消えてしまった。これには色々と思議な生  
物や事象を見てきた彼らも驚いた。

「ふーん」

顎に手をやり、何事か思案していたエドは近くの壁を錬成し手槍  
を作る。アルも習って手槍を錬成。

「せー」「の！」

二人、息のあったタイミングで投げるが、それも消えてしまった。

「とりあえず大佐に連絡するか」「そうだね、他の国の侵略兵器か  
もしれないし」

そう言って大通りへ向かおう踵を返し彼らの前にも、同じものがあつた。咄嗟の出来事に対応できず、エドもアルもすっと消えてしまふ。

「何だ、コレ！」

鋼と鏡、兄弟の言葉が短く路地裏に解けていった。

## 魔法先生の帰郷

東京、新東京国際空港。

関東一円では一番大きな滑走路を持ち、年間の離発着数は日本最高のこの空港の国際線ターミナルにある二人が来ていた。

「ほら、ネギ。里帰りなんだからしつかりね」  
「分かってますよ、アスナさん」

一見すれば少しばかり歳の離れた姉と弟といった調子。  
アスナと呼ばれた少女、神楽坂明日菜の方は、弟の服の乱れをてきぱきと直している。

現にアスナも、手の掛かる弟を見守る優しい姉のような空気がある。逆にネギという十歳くらいの少年の方も、世話を焼いてもらって嬉しい表情を浮かべている。実際の血縁関係から言えば、ネギの母の妹がアスナであるから厳密に言えば叔母と甥の関係である。

この少年、本名をネギ・スプリングフィールドという。  
生まれはイギリスの北部、ウェールズ。見事な赤毛と鼻に掛かった眼鏡が印象的だ。

歳の頃は、あどけない外見どおり、まだ十歳。だが、これでも一つのクラスを受け持つ先生なのだ。だが外見に騙されてはいけない。知識や力のほうは確かに、先生を務めるだけの力がある。宋判断されたからこそ、こうやって生徒を持って教えているのである。

「大丈夫っすよ、オレッチが付いてますから！」

そういつてネギのフード付きコートの中からひょっこりと小さな白い生き物が現れた。

ネギのペット、白いオコジョのカモミール。アルベール。ネギか

らは「カモくん」と呼ばれ、結構強い信頼で結ばれている。

「アンタがいる方がよっぽど不安よ……」

「ああ、ヒドイっすよ!」

オコジヨとネギもアスナも普通に会話している。なぜ、オコジヨが喋るのか。それは、ネギの秘密に関係がある。

それは「魔法使い」であるということ。

一般社会には決して出ることなく、秘匿され続ける魔法社会。彼の父と母はその魔法使いたちの世界において、名の知れた人たちだった。そんな両親を見習って彼もまた、立派な魔法使いになるべく修行中の身だ。

そんな修行も冬休みに入り、ひと段落。一度、故郷のウエールズへと帰るべく、ここへやってきたのだ。傍らには大きなスーツケースが二つもある。そして、何よりも特徴的な先が大きく湾曲した木製の杖もある。

この杖はネギが父親から貰った、唯一に近いプレゼントだ。

「じゃ、帰りますね、アスナさん。冬休みも頑張ってくださいね。

一応、受験ですから」

「う……」

それだけ言っただけでネギは荷物を軽々と担ぎ、また両の手で引張る。いくら魔法使いといえども体格はまだ十歳のそれだ、いくつもの大きな荷物を抱えている様は、ほほえましいのを通り超えて、ちょっと可愛そうに見える。

「お姉さんに宜しくね〜!」

ぶんぶんと勢い良く手を振って、アスナは手間の掛かる弟を送り



出した。ゆっくりと小さくなる背が見えなくなるまで手を振っていた。

「じゃ、カモくん。とりあえずケースに入って」  
「了解す」

一応、ここは空港。ペットの持ち込みは制限されている。もし海外へ行こうというなら喋るとは言え、一応オコジョのカモミールはケージの中に仕舞わねばならない。

「ん、なあ兄貴。アレ、何すか？」  
「どうしたの、カモくん？」

そうやって振り向いた先にはふよふよ浮かぶと白色の鏡があった。しかも、どうやら自分たちにしか、見えていないようだ。毎日3万近い人が、ターミナルでは行き交っているのに、この白い鏡に気がついた人は誰もいない。無関心とか、厄介ごとを避けようというよりも  
そもそも気がついていないようだ。

(兄貴、注意したほうがいいですけど)  
(うん、分かってる)

ネギは自分の身の価値をしっかり分かっている。うぬぼれでも、大仰に言っているのでもなく、自分がどんな人材で、人物なのか客観的に判断している。だからこそ、接触してくる敵も味方も多い。

今、目の前にあるものが敵の手の者によるモノ、としてもオカシクナイのだ。

周囲の目に触れないように、慎重に動く。

「とりあえず、探知してみますぜ」

「お願い、カモくん」

カモは先だけが黒い尻尾を逆立てて、鏡の正体確かめる。  
結果は、

「ダメっすね、兄貴。でも、敵性はどうもないみたいっすよ」  
「そっか…」

ぼそりとネギが呟いた瞬間、まるでカバが口を開けるかのように、鏡が大きく広がった。

「え？」「うわ！」

ピカッと光ったと思うと、そこにネギとカモ、そして二人の荷物は消え去っていた。

はらりと一枚、ネギが乗るはずだった、ヒーロー行きの航空券だけを残して。

## 紅蓮少女の邂逅

「悠二」

紅蓮に包まれた世界で、燃え盛る炎と同じ色の瞳と髪を持つ少女は思い人の名を呼ぶ。

力強く、それでいて切ない声で。彼女の傍には彼女の今の気持ちを表すかのように、小さく煌く火の粉が無数に舞い散る。手には鋭く磨かれた剥き身の太刀が握られている。

勇ましく立つ少女の姿はまさしく、勇者と呼ぶに相応しい。

「シャナ」

紅蓮の少女に呼ばれた少年はどこまでも優しい声で、少女に語りかける。その姿は人の様でいて、人の様でない。後頭部からは蛇のような尻尾が生え、手には到底、人身には余る柄の短い大剣が握られている。纏うのは黒い、輝かない炎と緋色の鎧。まるで御伽噺に出てくるような魔王の姿である。

「僕は君を守る。そのために強くなったんだ」

力強い意思に満ちた声で悠二がシャナに語りかける。

でも、その思いと目的は受け入れられない。恋した姿と違って、何も変わらない。彼の想いの最悪の形での結実。シャナがそれを望んだかどうかは、誰にも分からない。

でも、この実は摘まねばならない。

それが彼女が、己に課した使命と義務だから。

「私はそれを受け入れられない。だから、私は貴方と戦う」

「そう言ってくれると思った。だから、僕は君と戦う」

紅蓮と黒。二人が剣を構える。

静寂が二人の間を包む。

「はああ！」

紅蓮の炎と翼をその背に現し、シャナが飛ぶ。

必殺の突きの構え。

「…」

悠二はその突きに備えるべく、大剣を楯のように構える。

そんな時に紅蓮の世界を引き裂いて、白い水晶のような物体が表れる。

(自在法？それとも、新しい敵？)

ドコーン！

階下から爆音が響く。その爆音を合図にしたように、中から黒い物体が転がり出てきた。ゴロゴロと転がって、近くの壁の残りにぶつかる。

「いたた・・・」

突然の闖入者に二人も驚きを隠せない。原理的に誰の侵入も受け入れることのない、この世界に突然として現れたのだ。自分の仲間、若しくは敵である。

今の位置を動かさず、二人は物体、転がりてた人を確かめる。

老人のような白髪頭だが、顔はまだ少年のようである。まるで法

衣のようなフード付きの服を着ていて、腰には白色の銃。左手にだけ分厚い革の手袋をしている。

「お前、誰？」

「んー、箱舟の操作、間違っただかな？」

服に付いた埃を払いながら、何事か考え込む。「箱舟」という聞きなれない単語が聞こえてきたが、この少年の自在法か何かだろうか。シヤナなどいないかのような感じで考え込んでいる。

「お前、誰？」

今度は幾分、強い感じで。首筋に切先を当てる。

それでようやく気がついたらしい。気がついたのだが、シヤナの剣呑な雰囲気に対して、何とも呑気に周りを観察して、切先を突き立てる小さな少女をじっと見つめている。

「えっと、君は誰？」

「お前こそ誰？敵、味方、どっち？」

質問に質問で返され、さらに質問で返す。

「僕はアレン・ウォーカーって言います。君は？」

「そう、じゃアレン。邪魔だからどこかへ行つて」

シヤナに見れば精々の親切心で言った言葉である。目の前には最愛の思い人にして、最悪の敵がいる。言いたい事だけというと、アレンに背を向けた。

「若しかしなくても、僕、お邪魔だったかな？」

「…」

「ねえ、赤い君？」

「…」

「あっちの黒いの誰？」

「…」

少年のような無邪気さ、アレンの本性を知るものなら完全に演技の、で聞いてくる。段々とイライラしてきたシヤナはアレンの方を向いて、

「うるさい、うるさい、うるさ…」

「だから、僕の質問に答えてください」

くるりと振り向いて、質問を全部剣幕で封殺しようとしたシヤナは今度は自分の眉間に銃が突きつけられていることに気がついた。ともすれば女の子にも見えるかもしれないアレンの顔には静かな怒りが張り付いている。

「シヤナ！」

敵となっても思いは変わらない。思い人の危機に黒の魔王は駆け出す。

（まずい！）

幾度も危機を乗り越えたアレンの直感が脳内にブザーを響かせる。ぐいっとシヤナの襟首を強引に掴むと、

「箱舟！」

箱舟を再起動させる。彼が現れたときと同じ、白い水晶のような物体が白い髪の少年の前に現れる。紅蓮の世界を引き裂いて現れた水晶に、勢い良く飛び込む。紅蓮の髪と瞳を持つ、少女を荷物のように引つつかんだまま。

「シャナ！」

ずっとシャナの細い足が全部消えると同時に水晶は崩れ去った。紅蓮の世界に白い水晶が、欠片となって降り注ぎ、地に付いた欠片は雪のように消えていった。

W E L C O M T O N E W A N O T H E R W O R L D (前書き)

皆様、このような私の拙作をお読みいただき、真にありがとうございます。

本編より、いよいよ舞台をハルゲギニアへと移し、6人と+1人が活躍します。

テーマソングはL・Arc en Cielの「Link」、  
そして6人のチームとして主題歌にKELUNの「Chu-Bur  
a」です。



## W E L C O M T O N E W A N O T H E R W O R L D

よく晴れた草原を風が弄る。

遠くに見える丘陵の木々が太陽の日差しを、その身に浴び、吹き抜けた風が木の葉を少し散らす。

ここはトリステイン王国。ハルゲギニアという大陸にある、長く続く伝統と、素晴らしい格式を持つ王国である。国土の殆どが平地であり、大海に注ぐ川も多い。周辺国からは「水の国」と呼ばれているほどだ。

この国を始めとして、この「世界」には「魔法」が存在する。

血の成せる人の力として、「魔法」を使える「存在」、いわゆる御伽噺の「魔法使い」たちが、この世界では支配層として王族・貴族階級を成して君臨し、そこから溢れた一般市民、平民を思うが俣に支配する世界である。

そんな貴族である魔法使い、メイジも生まれたときから魔法が使えるわけではない。成長とともに技術を習得していく。技術を教え、さらに次世代へと継承していく。拙い貴族の子女を一人前にするために置かれているのが学校、つまりは「教育」という方法である。ここトリステイン王国にもその魔法使い達の学校の一つである、「王立トリステイン魔法学校」が存在する。

現在、そのトリステイン魔法学校では、毎年の恒例行事にもなっている、2年次への進級試験を兼ねた「春の使い魔召喚の儀式」が行われていた。

午後から行われているこの儀式。本来であれば、一人あたり2分もあれば、全行程が終わってしまう結構簡単な儀式なのであるが、たった一人、たった一人の女生徒だけは30分近く掛かっているのに、今だ終わらずにいた。

「あーもう！どうしてよ！」

繰り返し、使い魔召喚の呪文、口語で唱えられる「サモン・サーヴァント」を唱えていたが、結果は全て爆発。

今回もドカーンと爆発。爆風が吹き荒れ、轟音が草原を駆け抜ける。駆け抜ける度に、先に成功させていたクラスメイトの使い魔たちがギャアギャアと騒ぐ。

「いいかげんにしろよ、ルイズ！」

「さつきから爆発ばかりじゃない！」

いい加減、彼女の失敗で起こる爆発に辟易、騒ぐ使い魔を達をなだめるのにも疲れてきたクラスメイトからは野次が飛んでくる。

「うるさいわね、見てなさいよ！」

ルイズと呼ばれた少女、爆発に巻き込まれて若干、顔や髪の毛、服も煤けているが、ピンクブロンドの若干ウェーブの掛かった髪に、くりくりとした鳶色の目。中々に可愛らしい顔である。

しかし、その顔も煤けている上に、眉間に皺を寄せていては可愛らしさも半減である。

「兎に角、見てなさい」

再び、意気込んで唱える。しかし、結果は見えていた。ドカーンとまた爆発。これで既に31回目だ。ルイズの顔にも怒り以外に、焦りの色が見えてきた。

今までルイズは碌に魔法が使えていない。座学の方は満点に近い点を取っているが、実技は全て爆発、失敗という結果になっていた。

今日こそは誰もが羨む使い魔を召喚して、見返してやろうと思っていたのだが、結果がこれでは見返すどころか、もったからかいのネタを同級生に提供するだけである。

31回目の失敗を見て、今年度の「召喚儀式」の担当教師である、ジャン・コルベールが、

「ミス・ヴァリエール。非常に残念ですが、続きは明日にしましよ  
う…」

近づいてきて、ルイズに酷く残念そうな声で語りかける。

彼はルイズの人知れぬ努力を知っている人間だ。誰よりも努力しているのに、必死に勉強しているのに、報われない。少し悲しい学生であることを。

「お願いです。最後までやらせてください！」

振り向いたルイズの顔は、今にも泣きそうだった。煤けた顔もこんな感じだと、コルベールは困ってしまう。ふうつと息をついて、

「分かりました。これが最後ですよ」

「ありがとうございます！」

それだけ言っつて、下がった。最後まで見届ける。担当教師としては一人も落第者は出したくない。ましてや努力している生徒を落せるほど、彼は冷酷な人間ではなかった。

「早くしろよ」

「精々、頑張れ」

一片の温かみも無い応援や野次が飛んでくるが、一瞬にして集中

したルイズの耳には届かない。  
そして、

「世界のどこかにいる、私の下僕よっ！！」

力強い声で「サモン・サーヴァント」を唱え始める。

「強く、美しく、そして生命力に満ち溢れた使い魔よ！私は心より求め、訴えるわ。……………我が導きに応えなさい！」

そう言っつて、杖を振り下ろした。

ドコーン！

起きたのは今までよりも一際、大きな爆発。辺りにはその爆発に比例するだけの爆風が吹き荒れ、ルイズの周囲の草を何本も吹き飛ばす。爆音が結末を見届けようとしていた、生徒やコルベールの耳を使い物にならなくする。舞い上がった土埃が完全に視界を奪う。

やがて風も落ち着き、土埃も収まる。ルイズにも、他の生徒やコルベールにも爆心地の中心が見えてきた。全員揃って、爆心地に視線を集中させる。

「はい？」

全員が目点を点にする。

無理も無い。土埃が晴れたそこには、人間が倒れていたのだから。更にはその人間を囲むように、3枚の光の壁のような物体と、堅そうな鉄の壁が一枚、張られていた。

人間が現れたことにも驚きだが、周囲の壁も不思議だ。

「ゼロのルイズが召喚に成功したぞ！」  
「でも、誰だアレ？そして、何だアレ？」

周囲の喧騒に答えるかのように、壁の向こうから、声が聞こえてくる。

「大丈夫、一兄？」

「助かったぜ、いきなり爆発するんだもんな」

「コラ、一護！説明しやがれ！」

「カモくん、いる？」

「オレっちは無事っすよ！荷物も欠けてないっす」

「ふう、助かりました…」

「何故、あのような事をしたのだ。そして、お主は何者だ？」

「いい加減、離しなさいよ、アレン・ウォーカー！」

「あれ、アル？何で俺の腕に？」

「何でかな、兄さん。でも、とりあえず魂だけは無事みたいだよ」

壁が喋っているわけではない。壁の向こうに何かが居るらしい。若しかしたら、人語を解して、おまけに喋ってくれる凄い魔獣なのかもしれない。

ルイズはワクワクしてきた。これで見返せる。この見慣れない服を平民はきつと近くを通りかかっただけの一般人に過ぎないのだから。この世界の貴族しか持っていない特有の思考回路でそう思った。

光の壁が消え、鉄の壁が崩れる。

その向こうにいたのは、

「へ、い、み、ん……？」

見慣れぬ服を着た6人の平民。

これを見たルイズは愕然とした。あれだけ大見得切っておいて、

結果は平民が7人。これでは結局、見返すどころか、さらにバカにされるだけだ。

案の定、

「ルイズが平民を召喚したぞ！」

なんて声が聞こえてくる。

ルイズは7人の平民をまじまじと見詰める。

とりあえず、倒れているのは表情にどこか抜けた感じがある以外は、取り立てて特徴のない少年。

一番右から、御揃いの黒い服を着た、オレンジ髪青年と短い黒い髪の女の子。

次は赤い髪とローブを着込んだ、自分よりもいくつか小さいだろう子供。

鉄の壁の向こうから現れたのは、見事な金髪と良く目立つ赤いコートを着た少年。

最後は長い黒髪を蓄えた少女を右脇に抱える、白髪の黒い法衣をきた少年。

「つか、ココ何処？」

6人とも揃って、辺りを見回している。全員が見たことのない服を着ているが、見た感じでは貴族の一番分かりやすい象徴とも言えるマントを着ていない。ならば平民である。とかなり短絡な思考で決めていたのだ。

「一兄、あれ！」

「ん？」

一番、右端に居た黒髪の女の子が、ルイズが「抜けた感じ」と称

した少年に気がついたらしい。後ろに居た少年の手を引っ張り、駆け寄る。

「見た感じ、怪我ねーし、気絶してるだけだな。おーい、起きろ」

少女に「一兄」と呼ばれた青年は気絶している少年の頭をポカポカとノックでもするかのような気軽さで叩く。

「ちょっと退いてなさい！」

流石にそれを見かねたルイズが少年を優しく揺り動かす。段々と少年の意識がハッキリしてきたのか、ゆっくりとゆっくりと瞼が開く。

「あんた達、誰？」

ルイズの質問が青空に響いた。

## STARTER'S

ぼけつとした頭で、どこか抜けた少年、平賀才人は考える。

周りを見渡せば、マントに明らかに黒い髪色がない少年少女たち。今まで東京の大通りに居たのに、気が付いたら、広い草原に寝転がっていた。遠くには世界史の授業で少しだけ習った、中世ヨーロッパのようなデザインの大きな建物が見える。

目の前に居るのは、多少煤けているが、随分と可愛らしい、少なくとも才人が今までであった中では一番可愛い女の子が座っていた。この子もマントを身に着けて、右手には杖のような物を持っている。

何だか魔法使いみたいだ。

「流石、ゼロのルイズ！平民を7人も呼び出しやがった！」

「うるさいわね！ちよと間違っただけよ！」

ルイズが上品な声で怒鳴るたびに、周りの同じ格好をした人垣がどつと笑う。

「うーん、どうしたものでしょうか？」

才人に近づいてきた、頭の可哀相な大人、多分、会話から判断するとこの子達の先生らしい、男の格好をまじまじと観察する。

なんじゃ、この格好？

大きな木の杖を持ち、真っ黒なローブに身を包んでいる。

本当に魔法使いみたいだ。

大丈夫か、こいつら。

歳は多分、ルイズと呼ばれたこの子は自分とそんなに変わらない歳だろう。でも、先生の歳は同考えても自分の父親とそんなに変わ



らないと思う。そんな歳で魔法使いのコスプレをしていたら、只のイタい人だ。

本当に何なんだ、こいつら？

才人は何事か口論しているルイズと先生から目を離し、自分の後ろを見渡す。

そこにはまた、ルイズたちと違った格好をした人たちがいた。

黒い侍みたいな格好をしたオレンジ頭の青年と黒い髪の少女。

オレンジ頭はデカイ刀を背に背負い、女の子の方は腰に日本刀らしき鞘を差している。

目立つ赤いコートを着た金髪の少年と、赤毛のローブを着た子供。心配そうに声を掛ける子供を、少年が優しく制している。特別なところは全く無い。

顔は若いのに白髪頭の少年と、その少年に抱えられた長い髪の女の子。

少年は黒い法衣を着ているのに、女の子の方は緑色のセーラー服だ。誘拐かもしれない。

どう考えても、普段の生活で自分が目にするには無いだろう格好をしている。

才人は急に怖くなった。どう考えても今の状況は普通じゃない。

あの鏡みたいはモノは、このヘンテコな宗教団体へとやってくる罠だったのだろうか。

何せ、12の瞳が全部、自分の方を興味深げに見ているのだ。

調子に乗りやすく、大勢の視線を集めたがる才人でもこれだけ注視されては、流石に辛い。

「ミスタ・コルベール！もう一度、召喚をやり直させてください！」

「ミス・ヴァリエール。それはできない」  
「何故ですか!？」

混乱している才人を他所に口論は続く。

「この『召喚の儀式』は神聖なものだ。やり直しはできない。古今東西、人を使い魔にした例はないが、規則にしたがって彼ら7人には君の使い魔になって貰わなくては……」

「でも!」

「ミス・ヴァリエール!」

コルベールが優しく、しかし、厳しい声でこれ以上の反論を辞めさせる。

「もう、30分以上も掛かっている上に、もう直ぐ時間も終わる。えり好みしている場合ではないでしょう?」

「うう……」

ようやく観念したらしいルイズが、才人へと顔を寄せてくる。

「あんだ達、名前は?」

「名前つて…、俺は平賀才人……」

まだ完全に覚醒していない頭で答える。殆ど脊髄反射のようなものだ。名前を聞かれたから、答えた。それ以上でもそれ以下でもない。

「あ、僕はアレン・ウォーカーです」 黒い法衣の少年がニコニコと答える。

「シヤナ」 長い髪の女の子が無然とした表情で答える。

「エドワード・エルリック。国家錬金術師だ」 金髪、赤コートの少年が嫌そうに答える。

「ネギ・スプリングフィールドです」 赤い髪の子供が礼儀正しく答える。

「……」 「……」 一番、右端に居た二人は答えない。

それを見たルイズが烈火の如く、怒り始める。

「貴族の私が、名前を聞いているのよ！答えなさい！」

「……何、お前、私達が見えるの？」

女の子の方が訳の分からないことを言う。見えるって、バリバリ侍みたいな格好をした二人が見えている。それは先に名乗った4人も同じだったらしい。

「あ、あの、どういふことが知りませんが、見えますよ。しつかりと……」

ネギがどこまでも礼儀正しく、オレンジ頭の方の袖を引っ張って返答を促す。そのことに驚いているのか、呆れているのか、どちらかは分からないが、

「おいおい、マジか。夏梨、どうもこいつら、俺らのこと見えてるみたいだ」

「だね、一兄」

ハアと重いため息をつく。何だこの二人。見えることとため息がどんな繋がりがあるんだろうか。

「黒崎一護だ。んで、こつちが……」

「黒崎夏梨」

ようやく全員の名前が分かった。にしても日本人っぽい名前だったり、外国人っぽい名前だったり、国籍はバラエティに富んでいるな、などというどうでもいい事を才人は考えていた。

全員の名前を聞き終えたルイズは何度も復唱している。覚えるのに必死なようだ。

少し間があつて、

「よし、覚えたわ！じゃ、後ろの6人、屈んで。契約するから」

「……………は、契約？」「……………」

6人とも中身がつかめていないらしい。頭の上にはてなを浮かべ  
る。

そんな7人を無視してルイズはこう続けた。

「か、感謝しなさいよ。普通、平民が貴族にこんな事されるなんて一生無いんだからね」

「へ？」

6人の言葉を無視して、ルイズは才人に近づいた。そして目を瞑る。

「はい？」

才人がマヌケな声を上げる。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブランド・ラ・ヴァリエール。5つの力を司るペンタゴン。この者らに祝福を与え、我が使い魔と成せ」

そういつとルイズの唇がゆっくりと才人の唇に近づいてきた。

「え、えっと？」

才人は訳が分からず、首を左右に振る。何となく防御反応のようなものだ。

「ああ、もう！じつとしなさい！」

「うわ！」

暴れる才人の顔を強引に両手で固定し、さらに唇を近づける。

その姿に何となく、危機感を覚えた一護はボソリと呟く。何が起るかは知らないが、幾度と無く戦闘を乗り越えてきた危機察知能力が、コレまでにないくらいの大音量でブザーを鳴り響かせる。

「何か、まずいな」

「そうですね」「だな」

一護の言葉に賛同を示したのはアレンとエド。他の三人は何が何だが、分かっているらしい。

「逃げるぞ！」

結末を見るよりも命だ。三人は傍に居た夏梨、ネギ、シャナを抱えて三方向へ脱兎のごとく翔ける。アレンと一護は序でに散らかっていたネギの荷物を両手に持つ。

「ん…」

そんな6人の後ろで、ルイズと才人はキスをしていた。キスを終えて、唇を離すと突然、才人の体が熱くなり、左手が禿るのではと思うくらいに痛み、なにやら古そうな文字が刻まれている。

「何だ、コレ！お前、何しやがった！」

「使い魔のルーンが刻まれているだけよ、直ぐに終わるわ」  
「刻むな、んなモン！」

痛みに耐えつつ、ルイズに必死に食い下がる才人。その後ろで逃げた6人も同じ症状に苦しんでいた。

「痛てえ！」「痛い！」「何ですか、コレ！」

「何だ、コレ！」「え、僕、痛くないですよ」「何で？」

痛い、痛いと転げ回る5人を他所に一人、白髪頭のアレンは涼しい顔をして皆の様子を見舞っていた。打つ手も無く、オロオロと困っている。

「先生、何ですか。まだ一人しか契約していいなのに、全員にルーンが……」

「ふむ……？」

怪訝そうにコルベールが才人の左手を取って、刻まれたルーンを確認する。その間に、どうにも逃げられない事を悟ったのか、6人が戻ってくる。

「そちらの皆さんも……」

全員が苦い顔で左手を差し出す。アレンだけは分厚い革の手袋に包まれていたが、取る素振は全く見せない。

「あ、ええつと手袋を取って貰えるかね、えつと、ミスタ…」

「アレン・ウォーカーです」

「申し訳ないが、ミスタ・ウォーカー。お願いできないか」

すつと革の手袋を取る。その左手は普通の肌色とは違う、青い色をしていた。手の甲には白い十字架が煌いている。その十字架の上に、力を足すかのように、他の6人と同じルーンが刻まれていた。

「ふむ…、見たことのないルーンだ」

さらさらとルーンをスケッチしているコルベールを見ながら、才人は考えていた。

突然、キスされて、まあ彼女いない歴16年で始めての経験だったから、それなりに嬉しかったが、いきなり変な文字は左手に浮かび上がってくるし、それは思いつきり痛いし、良かったのか、悪かったのか、今ひとつ分からない。

全く、本当にファンタジーみたいだ。

ぶつぶつと呟きながら考えていたら、先ほどのコルベールの号令で、周りにいた生徒達が皆、宙に浮いた。

「はい？」

才人は目が点になる。あんどりと口を開けて、その様子を見ていた。

「え、何、アレ？何で浮いてるの？」

周りは障害物など何も無い青々とした草原だ。当然、人を吊るすようなクレーンやワイヤーもない。幾らなんでもありえない。一人くらいなら説明も付きそうだが、全員である。50人近い人数が一斉に何も無い空中に浮かび上がったのだ。

目の前の光景に才人は自分の目を疑った。

そうして、浮いた生徒達は一斉に遠くに見えた石造りの建物へ向かっていく。どうやらアレは学校のようなようである。

「ルイズ、お前は歩いて来いよ！」

「アイツ、『フライ』どころか『レビテーション』すらまともに使えないんだぜ」

「その、平民達、あんたにお似合いよー」

飛び去っていく生徒達が口々に笑いあう。

残されたのはルイズと才人、そして一護に夏梨、アレンにエドとネギ、そしてシャナの8人だけになってしまった。

今の到底、才人の持っている常識では説明できない現象を目の当たりにして才人は口を開いた。

「あんた達は一体、何なんだ！俺の体に何をした！」

「まま、えーと、才人だったけ？落ち着けよ」

才人の怒りを込めた言葉を一護がなだめる。その質問の行き先だったルイズはため息をついた。

「そりゃ、飛ぶわよ。メイジだもの。というか、『フライ』も知らないなんて、一体どこの田舎から着たのよ？」

「田舎？田舎はここだろうが！東京はこんなド田舎じゃねえぞ！」

「トーキョー？なにそれ。どこの国？」

「日本だけど」



「なにそれ。そんな国、聞いたことない」

そこへアレンとシヤナ、更にはエドが入ってきた。

「俺はアメストリスのサウスシティから来たんだけど」

「アメストリス？どこよ、そこ？」

頭を掻きながら聞くエドとつっぱねるルイズ。

「僕はイギリスのロンドンという所ですが…」

「だーからー！どこのよ、そこ！」

頬を掻きながら考え込むかのような仕草で聞くアレンと突っぱねるルイズ。

「私は御崎市からよ」

「知らないっていつてるでしょ！」

腕を組んで無然と聞くシヤナと突っぱねるルイズ。

「もう、何度も説明させないでよ！ここはトリスティンよ！そしてココは由緒正しきトリスティン魔法学院よ！」

それで分かるでしょ？と言わんばかりの態度でルイズは言う。

だが、さっきまでの混乱が引き、頭の上っていた血が降りてくると段々と冷静に考える余裕が出てきた。ルイズの言葉に看過できない言葉が混じっていたことに気がつく。

「魔法学院？」

「そうだけど、それがどうかした？」

「じゃ、飛んでたのは魔法だったのか？」  
「だから、当然でしょ。メイジだもの」

ルイズの言葉に啞然とする。  
とりあえず、今までの情報を整理して疑問を呈する。

「じゃあ、あんたは魔法使いなの？」

「そうよ。私の使い魔じゃなきゃ本来は、あんた達なんか口がきける身分じゃないんだからね」

「じゃあ、あんたらはさつき俺達のことを平民と呼んでたけど、あんたは貴族なのか？」

「そうよ。私は由緒正しい旧い（ふるい）家柄を誇る貴族のヴァリエール家の三女儿ルイズよ。そんな私がなんであんたらなんかを使い魔にしなくちゃならないの？」

ハアとため息をつくルイズ。顔が可愛く、体格も華奢だから一回の行動が日々絵になる。

そのため息を見て、才人は気がついた。さつきから自分以外誰も喋っていないことに。

普通あんな光景を見せられたら、自分のように腰を抜かすはずだろう。でも、誰も喋っていない。あまりの出来事に思考が追いついていないのだろうか。ここは自分が促して、ルイズをとっちめるべきだろう。幸い女の子や子供がいるとは言え、同じくらいの歳の男が4人もいるのだ。こんな小さな女の子なら、直ぐに捕まえられる。

「黒崎さんたちも何とか言ってくださいよ」

そう言って振り返った才人の目には、フワフワと宙に浮かぶ一護と夏梨の姿が。

「アレ？」

ばさりと羽音がする方へ、顔を向けると炎のような紅蓮の双翼を背中から生やしたシャナの姿が。

「ハイ？」

「よし、んじゃ、とりあえず右も左も分かんねーし、あいつら追うぞ」

「はい！」「了解」「分かりました」

一護の号令にフワフワと浮かぶ杖に乗ったネギとエドとアレンの姿。エドとアレンはネギの傍にあった荷物を天秤のように抱えている。

全員が先に飛び立った生徒達を追って学院を目指す。

「……………」

ルイズも才人も目が点になる。

とりあえず、二人は先に飛んでいった6人を追って、学院への道を走り出した。

「へえ、魔法世界ね」

ずずっと水を飲みながら、エドが喋り始める。

時刻は変わって夜。見たことのない二つの月が窓の向こうの空に

輝いていた。

ここは魔法学院の寮、ルイズの部屋である。

「今ひとつ、信じられねーけど、そういう事なんだろ」

どこからから調達してきたらしい、ハムを噛みながら一護がエドの話に乗る。更にシャナとアレンも、その会話に参加する。

「信じられません」

「魔法なんてあつたんだ…」

「俺はお前らの話も信じられねーけどな。AKUMAに人食いの徒”なんて」

ぱいっとアレンの方へ、籠に盛っていた林檎を投げて寄越す。片手でキャッチするアレンと、両手で掴むシャナ。会話に参加していないネギは自分の荷物の整理、夏梨はそれを手伝っている。

「それはこちらと同じですよ、死神なんて神話の話ですよ」

「そうそう、錬金術だって眉唾ものだと思ってた」

しかしお互いの自己紹介も兼ねて先に見せている。

背負った武器や、自分達しか持ち得ない技術や能力を。

現実を見せられた後では、疑いようがない。

「その通りだ。しかし、お主らも豪胆というか、呑気というか…」

不意にシャナの胸元、正確にはそこにある金の輪を二本、引っ掛けたペンダントから重く遠雷の様な声が響いた。シャナに異能の力を与えている、紅世の王「天壤の劫火」アラストールのものである。ルイズと才人よりも早く学院に戻ってきた6人は、近くにいたル

イズのクラスメイトらしい女生徒を適当に探し出し、この部屋を聞き出したのだ。無論、鍵はしっかりと掛かっていたが、エドが錬金術で強引に開けたのだ。

そこへ来て6人と3体、そして1匹で善後策を協議しているというわけだ。

どんだけ離れていたのかは知らないが、まだこの部屋の主は帰ってきていない。

「で、カモくんではないのかな？」

「おう、なんでい、アレンの兄貴？」

アレンのフードから金色の羽付きボール、ティムキャンピーとネギのペットである喋るオコジヨ、カモミール・アルベールがひよっこりと顔を出した。白い髪に保護色のように溶け込んでいる。

「ネギ君もその、魔法使いなんだよね？」

今、この場におらず荷物の整理に勤しむネギ・スプリングフィールドもまた魔法使いらしい。だが、どうもこの世界の魔法使い「メイジ」とは違う存在らしい。全部、カモから5人と1体は聞いた。

「ふう、ありがとうございました、夏梨さん」

「何、気にすんな。それと一兄」

「ん？」

「コレ」

荷物整理が終わったらしいネギと夏梨が戻ってくる。適当に空き部屋を探して、そこに荷物を放りこでいたのだ。流石に男4人と女2人が一緒の部屋にいるのは拙いという、至極常識的な見解からだ。夏梨が一護に黄色い何かを放り投げる。

握りつぶさんばかりの握力で、一護がそれをキヤツチする。

「おい、一護！ヤメテ、綿が出るから！」

そのライオンらしいぬいぐるみが喋りだしたときには流石に焦った。

「ぬいぐるみが喋ってる…」「どんな仕組みで…」「不思議だ」

「お前らが言えるかよ、喋るペンダントと義手にオコジョって…」

「うん、無理だと思う」

じとつと喋る生物と無機物を見る、一護と夏梨。

エドと一緒にこの世界へ転送された、彼の弟であるアルフォンスは鎧から、彼の右手の機械鎧に魂を移し、エドのオートメイルは世にも珍しい喋る機械鎧になっているのだ。この事態は本人達も驚いたという。だが、その結果として錬金術の実力が上がったという。あまり喜んだ様子ではないが。

そんな話を話していると、カツカツと石段が上がってくる足音が二つ、聞こえてきた。

「お、この部屋の主のお帰りのようだぜ」

## Our master is ZERO

善後策を協議していた6人と3体と1匹が占拠した部屋へ、この部屋の本来の主が帰ってきた。随分と急いでいたのか、それとも草原に放置して消えてしまった自分達に怒っているのか。間違いなく後者だろうと全員が当たりをつけた。

案の定、扉を蹴破り入ってきた、桃色の髪の毛の女の子は、

「あんだ達、使い魔の癖に、ご主人様を放っていくなんて、どんな見よ！」

開口一番、ガミガミと喋り始める。

とりあえず、聴いたのはそこまで。後は皆揃ってシャットアウト。自分達の話し合いに戻る。

シヤナとネギとエドは現実問題として、これからの生活をどうするか。こんな月が二つあるような異世界に紛れ込んでしまったのだ。元の帰れる方法を探すためにも資金や活動は必要だ。尤も、金について言えばエドが錬金術で、金でも銀でも大抵のものが作れるから、そんなに心配していない。

一護とアレンと夏梨は、モグモグと食堂から失敬してきた果物にかじりついている。特にアレンの食べる量は同年代のエドに比べて、異常なまでに多い。

「ちょっとあんだ達、無視しないでよ！」

「あー、すまん。えーと、誰だっけ？」

片手に赤い林檎を持ったまま、一護がルイズに話しかける。

それで気がついたが、こちらの名前は名乗ったが、先程から怒鳴り散らしていた、この女の子の事は何も聞いていない。どうも6人、

いや、正確には彼女の傍にいるうらぶれた黒髪の少年と、鎧とペンダントとぬいぐるみに、オコジョを足した10人は、この女の子に呼ばれたらしい。とりあえずは一番、重要な手がかりだ。

一護の態度が気に入らないのか、40センチ近い身長差のある一護をキツと睨む。

「はあ？さつき、名乗ったでしょ？」

だが、所詮は女の子の一睨み。数々の戦いを潜り抜けてきた戦士である一護には殺気の籠っていない睨みなど、普段と同じように見られているだけに過ぎない。そして、それは後ろにいるシャナやアレン達も同じ。くわっと大きな欠伸をしながら、遣り取りを見るでもなく見ている。

妹である夏梨は知っているが、一護は人の顔と名前が覚えられない。今でさえ、4人の名前を覚えるのにたっぷり1時間を掛けていた。

もやもやと一護は自分の記憶を揺り動かす。この世界へ遣って来てから、ここに来るまでの時間。

「えっと、ドン・パニーニだったけ？」

「違うよ、一兄。ドルトーニ」

「だー、本当に2人とも覚えられてねーのな、ドン・パニーニだろ？」

「「おお、エド。すげーな」」

意図的なのか、それとも天然なのか。三人揃って名前を間違える。でも、その一方的に剣呑な遣り取りを見ていられないのは、ネギだった。

「わわ、ダメですよ！黒崎さん！」



「一護でいい」  
「そうじゃなくてー！」

あぶぶと10歳らしい可愛い慌てぶりでネギが困り果てる。  
とりあえず、三人の前に立ち、改めてルイズに向き直る。

「えっと、取り敢えず、名乗っていただけないでしょうか？」

本場英国仕込みの紳士然とした対応で、ネギが喋り始める。

「ふん、いい心がけね。なら言うわよ」

「偉そうだな、オイ」「だね」「ああ」

ボソリと呟いたのは内緒だ。ルイズにも聞こえないくらいの音量で喋っている。

「私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ」

「名前、長え」

エドが兎に角、覚えるのが面倒だと言わんばかりの態度で悪態をつく。それに同感だという調子で他の4人が首を上下に振る。

「うるさいわね！平民の分際で、貴族に意見しないで！」

「はいはい、んで、そっちの黒い髪の奴は？」

エドと一護の心底、どうでもいいという調子にキーツとルイズが発狂する。その狂いつぶりや、まるで動物のようである。2人は無視、ネギとシヤナが両肩を持って、飛び掛るのを阻止している。

才人はそこで自分を見ている二人、そして奥にいる4人に目を留

めた。

(相変わらず、変な格好してるな…)

そう思いながらも自己紹介をする。

「えっと、平賀才人です」

そして再び、6人の自己紹介。

勿論、死神だ、フレイムヘイズだ、エクソシストだ、魔法使いだ、錬金術師だと言う事は伏せておいた。加えて異世界云々の話もルイズと才人にはしなかった。6人と魔神やオコジョはお互いを知っているが、二人は知らない。これは単純に余計な先入観を与えないという処置だ。なので、兎に角、アラストールにもカモミールにも、コンにも、アルにも口を開かないようにと念押ししておいた。

間違っても信じてもらえない。

この学院の寮を作りや材質を見ながら、明らかに科学技術が低いと指摘したエドの提言でもある。次元だ、異空間転送とか、そんな事を近代自然科学という概念のないだろう彼女達に説明しても面倒というのが理由だ。

このエドの直感は物の見事に的を得ていて、

「信じられないわ」

「俺だって信じられねえよ」

「別の世界って、どういうこと？」

「魔法使いがない。月は一つ」

と、ルイズと才人が口論している。心底、言わなくて良かったと思う。異世界から来た証明をしなければならぬが、生憎と凝り固まった価値観が簡単に変わるほど、人間は単純にできていない。

しかし、話を聞いているとこの平賀才人という少年も異世界からやってきたようだ。

「で、使い魔ってなにすんの？」

才人はルイズに尋ねた。

それについては6人も気になっていた。おそらく、昼間の出来事を考えると使い魔の召喚というのがあって、その使い魔に自分達はされたらしい。こちら辺はネギとカモが懇切丁寧に説明してくれた。才人は魔法使いが出てくる映画やアニメを知識を総動員して思い出す。髭と白髪の素敵な魔法使いの肩に乗っているワシとかフクロウが出てくるのは知っている。でもあいつらは大体肩に乗ってるだけで、具体的に何もしなかった記憶もあるのだ。

「まず、使い魔は主人の目となり、耳となる能力を与えられるわ。」  
「どういうこと？」

遠くの月を見ながら、夏梨が尋ねる。今さらながらこの異世界に興味が出てきたようだ。冷静になって考えると不思議が多い。好奇心たっぷりの猫のようにワクワクしているのが伝わる。

「簡単にいえば、使い魔が見たものは、主人も見ることができるよう。」  
「へえ、凄いですね！」

ネギは素直に感嘆のため息を漏らす。ネギの使い魔、というかペ

ットであるカモとは、そんな事が出来ない。自分の作戦立案を手伝ってくれたりはあるが、少なくとも感覚を共有はできない。

「で、どうなんだ？」

かなり面倒な様子で一護が尋ねた。随分と夜は更けている。どうも早く寝たいらしい。

そんな自分のいう事を聞く気が一切ない、一護をまた一睨みすると、ルイズはガツカリした様子で言った。

「でも、あんた達じゃ無理みたいね。わたし、何にも見えないもん！」

「ふ〜ん」

才人は眠くなってきたのか、ぼけっとした様子で言った。

「それから、使い魔は主人の望むものを見つけてくるのよ。例えば秘薬とかね。」

「秘薬って何ですか？」

アレンも興味深げに聞いてくる。薬というものにあまりいい思い出がないアレンであるが、不思議な効果のある薬を売れば、金が入ってくるかもしれない。師匠がたっぷり残していった迷惑な置き土産を処分するためにも、聞いておきたい。

「特定の魔法を使うときに使用する触媒よ。硫黄とか、コケとか……でもあんた達、そんなの見つけてこれないでしょ。秘薬の存在すら知らないのに」

「うん。それ無理」

「無理無理」

「硫黄を秘薬とか言ってる時点で、度が知れるな」

最後のはエド。錬金術師は同時に物理学者であり、化学者であり、植物学者であり、動物学者でもある。科学の粋を集めている錬金術師にしてみれば硫黄という、至極市中に溢れている品物を、秘薬などと呼称する時点で、かなり下に見ていた。

勿論、現代日本から来ている一護や夏梨、シャナの考えは押しつけて測るべしだ。

そして、ルイズは溜め息をついた後、言葉を続けた。

「そして、これが一番なんだけど……使い魔は、主人を守る存在であるのよ」

「ほう……」

ここでようやく、全員が興味を示した。

「その能力で、主人を敵から守るのが一番の役目！で、あんた達はどのなの？」

ルイズが尋ねる。

才人は、「無理。普通の人間だし」

一護と夏梨は、「断わる！」

アレンとシャナとエドは、「嫌」

ネギは、「ちょ、ちよつと、皆さん！」

「…何を言ってるの？」

5人の言い草にルイズが静かに怒り始める。

判ってやっているのか。それともただ神経を逆撫でただけなのか。

「言ったとおり」「ちよつと、一護さん！」

「黙ってる、ネギ。生憎と俺は見ず知らずの奴を守るうって言うほど、人間出来ちゃいねーんだ」

「ですね、僕も同じですよ。僕は自分の為に生きてます」

「私も自分の使命がある」

「私は一兄の背中を守るためにいる」

「俺も同じだな。俺の目的の為に全部、利用したり捨てたりしたんだ」

5人の若しかしたら悲壮な、若しかしたら利己的なそんな思いは、全ての人を救おうと思う立派な魔法使いを目指すネギには納得できない事だった。

でも、理解はしている。そういう生き方を選んだ人を知っているから。

「本当に平民の癖にナマイキね…。まあ、いいわ。喋ったら眠くなつたし」

ルイズは眠たそうにあくびをした。

「その内、絶対に私の為に働いてもらうから！」

「俺達はどこで寝ればいいんだよ」

ルイズの決意に才人が質問を挟む。その質問にルイズは無表情で床を指差した。

途端に額に汗を浮かべる才人。そしてルイズは勝ち誇った顔。

行く宛も無し。動く為の金も無し。頼れるのは自分だけ。ならば、

ここで大人しく使い魔をやるしか、このムカつく5人は方法がない。

(私が上だっただけを分かせてやるんだから…)

ルイズはそんな風に考えていたが、6人は涼しい顔。逆にハラハラしているのは才人だ。

「犬や猫じゃないんだけど」

「しかたないでしょ。ベッドは一つしかないんだから」

そう言っただけルイズは毛布を一枚ずつタンスから出すと7人へ投げつけた。

才人はおもむろに受け取る。受け取ったのを確認するとルイズは、ブラウスに手をかけた。

「ちょッ！なにやってんだよ！」

大慌てで才人と止める。あわあわと動転しているネギと違って、5人は興味ないと言った感じだ。

その様子にきょとんとした声で、ルイズが言った。

「寝るから着替えるのよ。なにかおかしいところでも？」

そう言っただけ再びブラウスに手をかけたルイズを見て才人は、

「ごめん、夏梨にシヤナ。任せた」

それだけ言い残して、急いで部屋を出て、ドアを閉めた。序でに欠伸をかましていた男3人と、慌てまくるネギの襟首を強引に掴む。部屋を出て、才人は襟首を掴んで引つ張り出してきた男4人に向き直る。

そして、ため息をついた。  
どうやらルイズは俺達が男とは思っていないらしい。

(にしても、何なんだ。この3人の悟りきつたような表情は…)

ネギが慌てるのはまだ10歳だからだろう。当然である。だが、自分と同じくらいこの3人は、ルイズが着替え始めても、「何かどうでもいいや」みたいな顔だった。

理由はあるのだが、まあ聞けば才人が羨むことは間違いない。

「本当に、どうなっちまうんだ…」

才人は心底、疲れた顔で呟いた。そして、独り言のような事を呟く。

「くそっ!!どうして俺はあんなモノをくぐつちまっただよ!!」

ドンドンと灯も何もない廊下の石壁を叩く。

叩いたところで何も変わらないが、それでも叩かずには入れなかった。

「くぐらなければ、何事も無く家に帰れたのに!!」

しばらく経ち、夏梨の声が響く。

「終わったよ」

夏梨に言われたので部屋に入ると、ルイズはベッドにくるまっている。



床には毛布が7枚、ちょうど才人たちの人数分散らばっている。どうもコレで寝るといふ事らしい。

才人はどこまでも勝ち誇った、傲岸不遜の笑顔を浮かべたルイズを見ていた。だが、一護もアレンもエドもその毛布を見向きもしない。デザインが気に入らないとかではなく、純粹に興味がないかのようだった。

「いくぞ、夏梨。シャナ」

「はい」「うん」

一護が外へと促す。2人ともまるで合鴨のヒナのようにオレンジ髪青年についていく。

「ちょ、ちよつと、どこへ行くのよ!」

自分の宛てが外れたルイズは慌てる。それはそうだろう。ルイズは自分しか頼れ無いという状況を作り出し、主人と認めさせようとしていたのだが。完全に宛てが外れ、困り果てる。

「どこつて、寝るんだよ」

「だから、ここにあるでしょ。早くしなさい」

「はいはい、ルイズちゃんは偉いですね」

かなり小ばかにした様子でエドが言う。これに更にルイズは青筋を深くする。

「んじゃ、アレン」

「はい、箱舟」

短く噛み切るような言い方でアレンが箱舟を起動させる。突き出

したアレンの右手の先、そこにはまるで白い巨大な水晶のようなものが浮かんでいた。

「ちよ、何よ、コレ？」

「何って、箱舟です」

「コレ、あんたの？」

「そうですね、それが何か？」

「寄越しなさい」

「何ですか？」

「私があんたのご主人様だからよ！」

ルイズの根拠薄弱な主張にアレンは露骨に嫌そうな顔をする。

「ま、いいや。皆さん、先に入ってください。あ、ネギ君は荷物を忘れないでね」

「あ、はい。シヤナさん、夏梨さん、エドさん、手伝ってもらえますか」

「あいよ」「うん」

そういうと三人で荷物を取りに行く。アレンとルイズは箱舟を譲る、譲らないの口論、といっても一方的にルイズが喋っているだけだが。

「ったく、付き合いきれねえ。先に休ませてもらうぜ」

「はい、直ぐに僕も休みますから」

そう言い残すと一護は水晶の中へ消えてしまった。

「え？」「はい？」

ルイズも才人もきよとんとする。きよとんとしている間に戻ってきた4人が次々と同じように消えていく。更に目が点になる。

「じゃ、僕も」

そう言っつてアレンも消える。

「ちょっと、待ちなさい！」

あれが入れるものだ判断したルイズは自分も入ろうと、特攻するが、ピタンとぶつかってしまった。先ほどまでは水のようになっていたのに、今は硬い壁だ。

見ればアレンが水晶体の上のほうで、嫌な笑顔を浮かべている。

「ふん！」

「はあ…」

ルイズは使い魔に馬鹿にされたのが、心底気に入らないらしく、ふてるようにベットに入った。

才人は用意された毛布全てを贅沢に使って、石の床に寝転ぶ。

固い感触が背中と後頭部を襲うが、意外にも、すんなりと眠気が襲い目を閉じた。

パチンとルイズが指を弾くと、ランプの灯りが消えて窓の外の二つの月の光がゆるっと入ってきた。

才人はあの二つの月を眺めた。

ここは日本ではない。地球ですら、ない。

魔法使いがいて、空を飛ぶ国があるなんて、俺の世界ではありえないことだ。

空に浮かんだあのでかい月はなんだ？

地球の夜空に浮かんだ月の、二倍は優にある。

でかいのはまだいい。  
もしかしたらどこかの国では、そういう夜もあるかもしれない。  
だけど、二つあるのはおかしい。  
才人が知らないうちに月は二つに増えたのだろうか。  
ここは本当に地球ではないようだ。  
否定したかったが、否定のしようも無かった。  
才人は今日ほど、己の好奇心を恨めしく思ったことはない。

「ドツキリだと言ってくれよ。なんで誰もボード持って来ないんだ  
よ」

夢だと信じたかったが、ルイズとキスした時の感触とそのあとの  
左手の痛みが夢ではないと物語っていた。

「母さん」

辞世の句でも詠まんばかりの勢いだ。

「どうやら才人は魔法使いがいる世界にやってきてしまいました」

まだ、死ぬ気はないが。

「しばらく学校にも行けません。勉強もできません。勘弁してくだ  
さい」

グスグスと恨み節を言うが、

「うるさい……」

「しめんなさい」

と怒られてしまった。

ハアとため息をついて、目を閉じるとあっという間に、夢の世界へ誘われた。

## Our master is ZERO (後書き)

本文中にあるエドの「硫黄が秘薬なんて時点です」というのは彼が錬金術師であることもありますが、やっぱり硫黄という基礎的な元素すら抽出できていないという、事実を重く受け止めているからです。今ひとつ、その裏にある「神学」の要素は測っていないですが、ルイズ達の世界観、つまり17世紀というのは自然科学の走り調節でした。ニュートンが万有引力を発見し、トスカネリが地球球体説を唱えた時代。しかし、それは現実の世界でもキリスト教に拠って潰されてきました。

単純に無自覚にルイズ達は深く神学に嵌っていますから、エド達の言葉が額面どおりにしか受け取れない。本来であれば、怒りよりも技術力の無さを嘆くべきだったのです。

もし原作の才人がこんな風に高校程度の自然科学を開陳できていたら、間違いなく打ち首獄門です。それくらいにキリスト教に対する自然科学へのある意味、冒瀆ともいえる迫害はすさまじいものでした。ガリレオやケプラー、メンデルなども悉く宗教裁判に掛けられていますから。

## Council In Cube (前書き)

このような拙作をお読みいただきありがとうございます。PV一万件を突破いたしました。

## Council In Cube

にゆつとアレンが白い水晶から首を出し、ルイズの部屋の明かりの消えた事を確認する。

そして再び、首を引っ込める。その姿はどこか白い色をしたカメラのようだった。

アレンの振り返った先には一護達にとって、中世ヨーロッパを彷彿とさせるような石造りの建物が際限なく奥へ奥へと続いていた。空は染み一つ無い白。太陽は無いが、まるで陽だまりのように明るい。

ここは箱舟。

アレンの行った事のある場所であるならば、その場所を物理的な距離を無視して自在に繋ぐ、アレンとそのゴーレムであるティムキヤンピーにしか扱うことの出来ない、秘室中の秘室である。

中の街並みは単純に興味の域であるが、アレンは気に入っていた。先ほど、ルイズが「寄越せ」と喚んでいたが、これを扱うことができるのは鞠に羽根の生えただけのティムキヤンピーを連れたアレンだけ。この不思議な空間に入れるも、はじき出すも全てはアレンの心意次第なのだ。ルイズは入れると間違いなく引っ掻き回すと思っただけの自衛の為に。才人の方は何となく。

「お待たせしました」

石畳を数分ほど歩くと、城下町にあるような大きな噴水が見えてきた。

噴水の縁には先に入った一護達が待っていた。ペコリと丁寧にお詫びする。

「にしても、すげーな、これ。アレンの行った場所ならどこへでも



行けるんだろ？」

「まあ、ある程度の制約はありますが」

夏梨は一護の後ろで、袴をたくし上げ、水遊びに興じている。エドとネギは探索でもしているのだろう、噴水の傍には居なかった。目標となる場所はここが一番なので、しばらくすれば戻るだろう。

逆にこれに入ったのが3度目となるシャナは、かなり機嫌が悪い。

「どうした、シャナ」

「うるさいうるさいうるさい！」

実はルイズと才人が帰って来るまでの間に、この部屋、正確には空間に一度、全員をアレンは招待しているのだ。皆、一様に呆けた顔をしていたが、一護だけは「こんなバカでかい空間があつたなんてー！」と大声で叫んでいたが。

その場所で各々の正体を明かし、序でに簡単な手合わせをしたのだ。先に相手に一撃入れたほうが勝ちという、かなりシンプルな勝負。勿論、全員が無手だ。

結果は一護が4勝1分、アレンも4勝1分け、ネギが3勝2敗、エドが2勝3敗、シャナと夏梨は4敗1分という、本人曰く恥ずかしい結果になってしまった事が、相当来ているらしい。

さっきの間も良く、爆発しなかったなとアレンは心の底から感心していた。まるで娘を見守る父親のようである。

で、その父親代わりでもある、アラストールはというと

「確かに気になっていたのだが、随分と素晴らしい身体能力なのだ  
な」

紅世の王と契約した人間は、”徒”を狩る異能の討ち手となる。

勿論、”徒”達は人間には到底、及ばない膂力や脚力を持っている。

だからこそ、それに呼応するように異能の討ち手、フレイムヘイズもまた、人外の臂力を持つのだが…、

「だって、アレンにはバックドロップを喰らって…」

白髪頭の少年に体を掴まれ、頭から石畳に落された。

「一護には空手チョップ…」

突進したらするりと避けられ、脳天に鋭い一撃。

「ネギには胸に一発…」

後でアワアワと右へ左への大騒動だった。

「エドには捕まえられ…」

思いつきりぶつかっていったら、その先は壁だった。

一応、武器は使っていないのでセーフらしい。

「ようやく、夏梨と引き分けじゃない！」

アレンと一護はボリボリと頭を掻いた。正直、やりすぎたかなと思っていたが、ここまで思いつきり臍を曲げられるとは思っていなかった。使命感が強くて、これから宿敵にして最愛の人との戦いを前にしていた、（ここらへんの話はアラストールから聞いている。尤も、5人とも興味は無かったが）フレイムヘイズの少女にとって、これは随分と重く押し掛かっているようだ。

「ま、いいじゃねえか」

「何がよ」

今まで見せたことのないはずの透明な液体が、今にもシャナの目からあふれ出そうだった。

「俺らだって、最初から強かった訳じゃねえ。必死になって戦って、必死になって鍛錬して、それで強くなったんだ。心配すんな。シャナの修行、俺達が手伝ってやる」

自分に親指を当てて、自信満々といった調子で一護が語る。  
それに乗って、

「はい、私も一兄に稽古つけてもらおう！」

「僕も彼女に協力しましょう」

「ふ、心遣い感謝する」

短く、紅蓮の少女が笑った事に気が付いたのは、その契約者だけだった。

「あ、皆さん。準備できましたよ」

話が纏まったとき、入ってきた方向とは逆の方向からネギとエドが杖に乗ってやってきた。この杖はネギの持ち物で、ネギの魔法詠唱の精度と、魔法の威力を増加する、早い話がブースターなんだそう。魔法に関して、一切の知識の無い側の4人は適当に掻い摘んで理解していた。

杖の下には大きな布で包まれた物体がぶら下がっている。

噴水の傍にゆっくりとホバリングしながら降りてくる。先に荷物を降ろすと、エドが飛び降りる。包を開くと現れたのは大きな台の付いた丸水晶だった。

「…なんです、コレ？」  
「あ、えっとですね…」

怪訝そうな顔をする4人にネギが説明を始める。

中を覗き込むと、綺麗な青いサンゴ礁と海、白い雲と砂浜が広がっている。そこから小高い丘を登っていくと、城らしき建物があつて、周りを南国植物が彩っている。

滅多にお目にかかれないだろう、かなり手の込んだミニチュアだ。

「こいつの名前はダライオマ魔法球！このミニチュアの中に入れて、1日を10日にすることができー！」

と思つたら、ネギの赤毛の陰から白い小動物が現れ、全部台詞を掻っ攫つた。

「どついついこと？」

「まあ、単純な話さ。浦島太郎って昔話があるだろ？アレの逆で、この中では経過時間が遅いんだ」

「あー、なるほどな」

一護が凡そ理解したらしく、その先の説明を引き継ぐ。

「こつちで1日24時間しか経ってなくてもでも、このダライ…魔法球の中に入れば10日の時間が流れているっていうことか」

「さすが、一護の兄貴！」

カモが話していることを理解してくれた人を見つけて喜ぶ。

このダライオマ魔法球の事を一回で覚えなかったのは、一護の持ち前のダメスキルの発露である。

「その通りでさ！しかも、今回は修行環境を自由に選べる、オプシヨンをつける！」

そうやってネギが魔法球を中心になるように、別の魔法球を接続していく。

こちらの魔法球の中をのぞくと、一面が白い銀世界、赤く燃え盛る火山地帯、木しかない密林、あちこち腐ったような沼、流れ飛ぶ砂しかない砂漠という、5つが繋がった。

「こつちの中も同じように時間が流れる。修行には打ってつけて訳さ」

どこからか取り出したタバコを銜えて微笑む。若干、黒いモノが見えた気がしたが、気にしないことにした。

「これは自由に使ってくれ。この位置に置いておく。いいっすよね、兄貴」

「うん、カモくん。皆さん、有効に活用してくださいね」

パンパンと話が完結したところで、エドが手を打つ。

「じゃ、一段落したところで、これからの動きだ」

「そうだね、兄さん。帰らないと皆、心配するし」

エドが頭を搔きながら、話し始める。

「とりあえず、何で俺達がこの世界へ呼ばれたのか。それを探るべきだろう。ならば、手がかりはあのピンク頭のクソガキにある」

実際のところ、エドとルイズは同じ年なのだが、平均身長よりも低いエドから見ても、ルイズはまだ頭一つ分、低い。年下と勘違いするのも無理からぬ話だった。

呼んだのが彼女なら、帰せるのも彼女。エドは状況証拠からそう結論付けた。

「若しかしたら、他の世界から紛れ込んだ品や人がいるかもしれませんが。それを探すためにも、箱舟の行動範囲は広げておきたいです」

アレンの行った場所なら何処へでも行ける。この箱舟の性能は有効に活用したい。

「じゃ、こうだな。アレンの兄貴を連れて、エドの兄貴と兄貴がこの世界の探索。あとの3人はあの子に付いて回ると…」

「序でに買い物をしてくれ。俺達の格好じゃ、目立つだろう」

そういう一護と夏梨の姿は上下黒の袴。シヤナはセーラー服だ。

どっちもこの世界の社会状況から考えると、着られていないだろう。目立つことは避けたかった。

「了解です。どんな服を所望で？」

「とりあえず、目立たなければ、エドみたいな感じで頼む。二人はどうすんだ？」

「私は…」

シヤナは詰まる。単純に服を機能性と必要性で選んできたため、今ひとつどんなものかいいの分からないのだ。それに気が付いたのか、

「じゃ、私達はこんな感じで」

パスツとアレンに紙を二枚渡す。そこには綺麗なデッサンで描かれた服のデザインがあった。生憎と男衆にはデザインの良さや来歴は全く分からなかったが、どちらも17世紀の西欧をイメージさせるものだった。

「それを二着ずつ。色の指定があるけど。ネギ、読める？」

「大丈夫です、夏梨さん」

今後の活動指針。

そして、指し当たったの当面の目標。

それらが決まった。

「じゃ、寝ましようか。異世界の一日目の夜ですよ。たっぷり休んでください」

そうネギが促すと、予め決めておいた家へと各々が散っていく。

ネギもまた、自分にあてがわれた家へと行く。既に荷解きも終わり、赴任先の学校である、麻帆良学園の寮と同じ感じになっていた。

白い空の下、動き回る影が二つ。

噴水の傍に近寄るのは、煤けたライオンの縫いぐるみである、コンとオコジョ妖精のカモミールだった。

「にしても、異世界か……。可愛い子いるのかね」

そんな愚痴をこぼすコン。間違いなく、主人が聞いたら中の綿を  
残らず取り出されそうだ。

「まま、気にしても仕方ねえ。一杯やろうぜ、コンさんよ」

へへへと下品な笑いを浮かべる力モ。

「お、気が利くじゃねーか。じゃ、俺からも…」

「ととと、じゃ、乾杯と行きますか」

「異世界で生まれた」「俺達の友情に」

「乾杯」「」



## Council In Cube (後書き)

まず、シャナフアンの皆様、真に申し訳ありません。

どうしてもあの4人と対峙した時に彼女が勝つシーンというのが思  
い浮かばなかったのです。

確かに技巧や体力面では圧倒的にシャナの方が圧倒的に上ですが、  
それを補って余りあるだけの一護には速力が、アレンには手数が、  
ネギには火力が、エドには発想力があると思います。

決して彼女は弱い訳ではないです。今回は無手なので、彼女は必殺  
の大太刀と呼ばれた「贄殿遮那」を使っていますし、使えばまだ  
強いかと。勿論、それは他の4人にも言えます。今回は無手という  
単純に体格差が明確に出る勝負だったので負けたということですよ。

ただ、原作を読んでいるとやっぱり速度に難がある点は否めません。  
高速移動術というのはフレームヘイズには無いのでしょうか。模し、  
身に付けることが出来れば、彼女の戦いもワンステージ上へ上がる  
と思います。

d-nakさんから質問を頂きました。

「作品の別キャラクターは出てきますか。特にグリードやリンは」  
ということですよ。

エドの機械鎧が破壊されるような事になれば、当然の事ながらウイ  
ンリイは必要になりますし、東方からの使者という事でリン主従の  
登場も意図できると思います。

一番、簡単なのはネギまのヘルマン男爵でしょうか。

彼にはネギの成長を確かめる役割があると思いますので。

## A W a k i n g r o m a n c e

朝、アレンは箱舟の中に拵えた自分の部屋の中でパチリと目を開けた。

いつ何時、AKUMAに襲われるか分からない生活を送っていた彼にとつて、この余計な存在を入れない空間は心地良いものだ。だが、太陽の日が在る訳でもなく、昼も夜もないので今ひとつ時間の経過が掴みにくい。どうもこの世界には時計というものが存在しないようなので、早々に6人とも計時は諦めていた。

「ん、ん」

軽く伸びをしてベットから飛び降りる。一番上の黒い法衣を外したシャツとスラックスという何ともラフな格好で部屋を出て、そのまま箱舟の出口に向かう。

にゅつと顔を出したのは、昨日勝手に使ったルイズの部屋。

ここの主人は随分と寝起きが悪いのか、まだ眠っている。額には昨日ぶつけた痕が赤く残っていた。才人はというと堅い石の床の上で毛布を7枚も使って眠っている。

2人とも随分と幸せそうな寝顔だ。この寝顔を邪魔するわけには行かないので、椅子を一脚コソツと失敬して部屋を出た。随分と広い学院なので、序でに箱舟のチェックポイントを増やしておくのも良いかもしれない。

「はっ！ふっ！」

「せい！やっ！」

適当に日が当たって、広い場所を探すとそこには既に先客がいた。その先客は椅子を持って、遣って来るアレンに目を留めると、

「おはようございます、アレンさん」

「おはよう、アレン」

シヤナとネギだった。2人とも昨日とは違う、汗をかいても心配しなくて良い運動着を着ている。ネギは拳法の型。シヤナはどこかで拾ってきたらしい棒きれを振り回していた。

「おはよう、2人とも。良く寝れた？」

居住区の提供者としてどこか危なっかしい子供を気遣う。こういつた心配りを忘れないのがアレンの基本的な流儀だ。

「大丈夫、問題ない」「うむ、真に不思議な空間であった」

「あ、ありがとうございます。所でなんですかそれ？」

ネギがアレンの持ってきた簡素な木の椅子に目を留める。

「これ？これはね、こう使うんだよ」

そう言うと、上半身はシャツ一枚になり、4本足の一本だけを接地させる。そして、その上に片手で逆立ちしてしまった。物凄いバランス感覚と腕の力である。オマケに一本の芯が通ったかのように、足まで真っ直ぐになっている。背筋力や足の力も相当なものだろう。これには二人にして3人も驚いた。

「すごいです、アレンさん！どんな鍛え方してるんですか！」

「何と言う体だ、シヤナが負けたのも頷ける」

「素直に驚いた」

腕の折り曲げ、片手逆立ちの状態で腕立て伏せを始めたアレンは、

「僕らは単純に剣術とか拳法とか学んでも生かせないんです。武器が武器ですから。ただ、武器を扱うために体力をつけているんです」

そう言いながらもカウントは欠かさない。僅かな時間だったが、既に30回も終わらせていた。普段彼が課しているノルマは300回なので、10分の1程度だが、この分だと直ぐに終わるだろう。

「えと、じゃあ手合わせしてくれませんか？」

「手合わせ？」

「私もお願いしたい」

物凄いスピードで回数を重ねるアレンを見て、小さな少年少女はお願いをしてきた。正直な話、アレンは子供に弱い。本人もまだ16に成り立てだが、それでも小さい子には優しいのだ。

「いいですよ」

ニコツと笑って2人のお願いを聞き入れた。

「ん、ん…」

箱舟の一室。一護は目を覚ました。特別にエドを拝み倒して作らせた、草を編んで作った畳が特徴だ。勿論、い草ではないので、あの特有の香りが無いのが少し残念だ。

もし、い草を見つけたら、もう一度錬成してもらおう。そう考え

て、もう一度朝の睡眠を享受すべく目を瞑る。ふと、何か胸元にサラサラと流れるような感触があった。

「ん？」

ペラツと捲ると妹がグースカ、鼾を掻いて寝ていた。母親が無くなって直ぐ位は自分のベットに潜り込んで来る事がよくあった。もう一人、ここには居ない一護にとつての妹、夏梨にとつての姉の遊子と二人で。最近というか、一護が高校に入ってからそんな事も無くなっていたが、異世界に吹っ飛ばされて、不安にならない方がおかしい。豪放磊落、よく言えばクール、悪く言えばぶっきらぼうな性格の妹はあるが、いきなりトンデモナイ現象と人にあつたので、疲れたのだろう。

「遊子の奴、大丈夫か……」

もう少しだけ妹を寝させてやろうと、一護は静かに部屋を出た。

一護が目覚めた頃、箱舟の外でも才人が起きた。

溜め息をつき、ベッドの方を見る。

ルイズは、ベッドの中で寝息を立てている。

とても自分と同じ年位とは思えない程、あどけない寝顔をしていた。どうにも気位が高くて、とてつもない暴力少女だと言うことが分かったが、それでもグツと来てしまう。

「やっぱり夢じゃないか……」

平賀才人。16歳の日本の高校生。

身長も体重も平均値。髪は染めているわけでもないのに、日本人の原色ギラギラな黒。

特別な趣味も無い。特技も無い。石を投げれば取り敢えずぶつかる、そんな少年だった。

だからこそ、不思議なモノに興味を持ったのだ。

パソコンを修理してもらった帰り。彼は出会い系サイトに登録したばかりだった。勿論、それなりにネットの知識もあるので、全てが女性だとは思っていない。ただ単純に人と合って、あわよくば女の子と知り合いに為れたらいいなと何となく思っていた程度だ。

はつきり言って、他の6人とは違って危機感が足りていなかった。

「顔、洗おう…」

水場を探しに階下へ降りていく才人は気分も落ち込んでいた。

やっぱり一晩寝たら自分の部屋でした、なんて展開を期待していたが、なんてことはなかった。

少しせつなくなる。

しかし、眩い朝日は差込み、空気は澄んでいる。すがすがしい朝である。

自分が生きてきた日本、東京でこんなになすがすがしい朝はあっただろうか。

いや、無かったような気がする。

鳥のさえずり声が外から聞こえる。

まるで、何かの物語の中に自分がいるように感じた。

そうだ。何事もネガティブじゃなくてポジティブにしよう。

ポジティブポジティブ。

どこかの漫画でもポジティブ少女がいたではないか。

そう考えると、明るい気持ちになれた。そして、少し考える余裕

もできた。

そうだよ。考えてみれば、ちょっととした観光ではないか。

この世界はどんな世界なんだろう。ちょっととした知的好奇心も沸いてくる。

ふかふかのベットのうえで、のんびりとぐーすか寝ている生意気魔法少女の使い魔というのが少し気に入らないが、人生で使い魔になるなんて一生に一回もないはずだ。

どうせなら楽しんでやろう。

そんな風に決意したのだ。

やっぱり、彼には危機感が全く無かった。

「ん、よう」

ふわふわと浮かぶ、白い水晶から浮かぶようにオレンジ頭の青年が出てきた。自分よりも頭一つ分高い。オマケに目つきが鋭く、ただ立っているだけなのに、かなり怖い。

「おはようございます…、えっと…」

「一護だ。黒崎一護」

「あ、俺、平賀才人っていいいます。宜しく願います、黒崎さん」

「一護でいいぜ、才人」

二人で連れ立って階段を降りていく。何となく不良っぽい感じがするが、今の感じを見ると結構いい人なのかもしれない。自分を放置して、「箱舟」なるモノの中に消えてしまったことは、燻っていたが怒っても仕方が無い。

暗い石段を降りて、外へ出るとそこでは既に一戦を終えた3人の姿があった。

「っ、っよ…」

「速いです…」

「もう、へばったんですか…」

朝から体力を使い果たしてしまっただけらしいネギとシヤナ。二人とも顔中、体中、汗だくで、長い髪が肌へばりついている。対してアレンは涼しい顔。汗だくになるところか、一筋も垂れていない。

「付いていくのでいっぱいはいっぱいでした…」

アレンから渡されたタオルでネギとシヤナは汗を拭う。二人の子供を相手に息を上げていないアレンを見て、一護が何か触発されたらしい。

「おし、アレン。次は俺だ」

「分かりました」

ずっと二人とも自然に構える。そして、両者同時に一步踏み込む。その速度は才人の目で終えないくらいに速かった。右手の拳で三発、左の蹴りで二撃、普通にできるだろう体術であるが、その速度は段違いである。

「え…、何アレ…?」

「速いけど、目で追えなくは無理。でも、体が付いていかない」

シヤナが二人の拳と蹴りの応酬に意見する。それにも才人は驚いた。3分ほどすると、お互い動きを止める。流石に二人とも汗が流れ、肩で息をしていた。

「強えな、アレン」

「一護さんこそ」



お互いを褒め称え、一礼する。

「うし、じゃ顔洗いに行くか」

一護が促し、その後ろに続いていく。ポカンとしていた才人も、正気に戻ると軽い手合わせを終えた4人を追って水場へと急いだ。

「あー、眠い…」

エドが目を覚ます。取り敢えず顔を洗ったりしななければならないと思い、箱舟の外へと出て行った。

ちょうどエドが箱舟を出たとき、ルイズが目を覚ました。

「お、起きたのか」

「あ、あんた…、どこ行ってたのよ!」

何気ない朝の挨拶をするエドワードに対して、朝からルイズはヒートアップしている。昨日、散々虚仮にされたのだ。大貴族の三女である自分が、しかも、平民ごときに。これで怒らない方がどうかしていると思い、兎に角、ぎゃあぎゃああと騒ぐ。

貴族だの、使い魔だの、魔法世界だの、そんなことに全く興味が無いエドは取り敢えず、朝からうるさいと思い、思いっきり肘を叩き込む。機械の右手の方を。

案の定、ちょうどいい位置にあったルイズの可愛らしい顔にクリンヒットし、気を失ってしまった。

そんなトンデモナイことをしながらも、エドの頭では、

(あー、水道設備がないのか…。作ってやるか…)

と、この世界のインフラ整備について考え始めていた。

「ルイズー？」

「よ、才人」

ちょうどエドと入れ違いで才人が戻ってきた。中でルイズが気絶しているのを見て、何があったのか聴こうと思ったが、どこか機嫌が悪そうなので、辞めておいた。

「あ、おはようございます。エドワードさん」

背は自分より低い、滑らかな金髪と輝く金目が綺麗で、意志の強さを表している。

「俺は顔洗ってくる、そこの馬鹿起しとけ」

かなりの上から目線で、才人に命令する。その言い方にカチンと来たが、追々自分の方が年上なのだとこのことを教え込んでいけばいい。そんなことを考えていた。

エドワードが部屋から出て行くと、ルイズを起こしてと言われたので、とりあえず寝ている、というか気絶しているルイズの肩を揺り動かした。

「な、なによ！なにごとー！」

「朝だよ。お嬢様」

「へ？そ、そう……って誰よあんた！！？」

ルイズは寝ぼけた声で怒鳴った。

朝に弱いのだろうか。ふにゃふにゃの顔が痛々しい。

とてもではないが、絶対に年頃の女の子が見せない顔である。

大丈夫かこいつは。

「ルイズ。それはないだろ！！」

「ああ、そういえば昨日召喚した使い魔の内の一人ね」

「そう。忘れないでくれ」

なんて言うるとルイズは来ていたネグリジエを脱いで、着替え始めた。昨日の調子で分かったが、この子は才人、使い魔のことを男としてみていない。ちょっとだけ才人はシヨックだった。

「下着」

「自分で取れよ」

顔を真っ赤にして、伏せる。そんな才人にルイズはもう一度、

「下着」

二度も言われては仕方が無い。しぶしぶ、クローゼットを開けてルイズの下着を取り出す。まあかなりガキっぱいものばかりだった。

「どれだ？」

「んー、一番右のやつー」

裸になっているかもしれないので、振り向かずに投げて寄越す。

「服」

単語一語で命令されるといっても、分かりにくい。取り敢えず、  
適当に釣り下がっていた服を一着、投げて寄越した。

「着せて」

「自分で着るよ」

ちよつと強い口調で才人が言い返すと、ルイズは振り返らないサ  
イトの背に向かって、

「あのね、高貴な人は下僕がいる場合は自分で着替えないの。着せ  
なさい、さもないとご飯抜き」

流石にご飯を抜かれては生きていけない。才人にも意地はあるが、  
意地では腹は膨れない。しぶしぶ引き受けることにした。

「あら、いい心がけね。とりあえず、あなたには朝食を上げるわ。  
他の6人には上げないけど」

勝ち誇った調子でルイズが喋る。才人は昨日の遣り取りの一部始  
終を見ていたので、ルイズがこんな風になるのも分かる。確実に6  
人はご飯が無いだろう。同情と伴に、箱舟に入れてくれなかったこ  
とや、エドに下に見られたことへ意趣返しを考えていた。

「丁度いいタイミングでしたね」

着せ終わったところで、タイミングよく戸が開いて、白髪頭の少  
年がひよっこり顔を出した。

「動いたら、お腹すきました。早く朝食にしましょう」

主導権を握られっぱなしのルイズと才人が部屋を出る。部屋の外には帰ってきた5人が全員いた。ちょうど出ようとしたタイミングで箱舟の中に残っていた夏梨も出てくる。

ルイズは恨み言の一言でも言っただろうかと思っただが、使い魔程度にそんな事をして、一々腹を立てていては話にならないと思いつつと堪えた。

未だにルイズは6人を下に見ている。

実際は6人が6人もこの世界を滅ぼしかねない程に危険な爆弾だということを知らずに。

踏み出そうとしたところで、ルイズの部屋から数えて三番目のドアが開き、中から燃えるような赤い髪と健康的な褐色の肌を持つ女の子が出てきた。

ルイズよりかなり背が高く、才人やエドと大して変わらない身長にムンムンと色気を放っている。

彫りが深い顔に、ルイズとは比べものにならない突き出たバストが艶かしい。まるでメロンが二つくっついていてるようだ才人は思った。

その彼女はルイズを見ると、にやっと笑った。

「おはよう。ルイズ」

ルイズは顔をしかめ、嫌そうに挨拶を返した。

「おはよう。キュルケ」

「あなたの使い魔ってそれ？」

才人を指差して、バカにした口調で言った。

すぐにルイズは顔をしかめる。才人もこのおっぱい星人に何か言  
ってやるうと思っただが、黙っておいた。ちらりと後ろを見ると、女  
の子二人は羨望と嫉妬の入り混じった射殺するような視線を向けてい  
るが、男4人は興味なさそうに談笑していた。

（こんなきれいな子に興味がないのか…！仙人みたいじゃないか…  
！）

才人が思っているのはまったく別の理由があるのだが、それを  
慮るほど、才人は人の機微にさといわけではなかった。かなりの欠  
点といえるだろう。

「そうよ」

「あっはっはっは！本当に人間なのね！しかも四人も！すごいじゃ  
ない！」

才人は少しムツときた。夏梨とシヤナはムカッときた。  
ルイズに至っては顔を真っ赤にしてぶるぶると震えていた。

『「サモン・サーヴァント」で、平民喚んじやうなんて、あなたら  
しいわ。さすがはゼロのルイズ」

「「「ゼロ??」「」「」

才人達はゼロという言葉に首をかしげた。

キュルケの言葉にルイズの白い頬が、薄く赤くなる。

「うるさいわね」

「あたしも昨日、使い魔を召喚したのよ。誰かさんと違って、一発  
で成功よ」

「あっそ」

「どうせ使い魔にするなら、こつこつのがいいわよねえ。フレイムー！」

キュルケは勝ち誇った声で使い魔を呼んだ。

すると、キュルケの部屋からゆっくりと、キュルケと同じ髪色で巨大なトカゲがのしのしと現れた。

むんとした熱気が、8人を襲う。しかし、何人かは涼しい顔のまま。

「うわあ！真つ赤な何か！」

才人は驚いた表情で慌てて後ずさるが、ネギはあまり驚かなかつた。これ以上の生物なら、色々と見飽きるほどに見ている。そしてそれはエドやシャナも同じだった。オマケにシャナの知っている生物は、人語を鶏も馬も虎も喋るのだ。今更、蜥蜴が喋りだしても驚きはしないだろう。

そして動物好きの夏梨が近寄る。

「何？これは？」

夏梨が目を輝かせながらキュルケに尋ねた。

「おっほっほ！もしかして、あなた、この火トカゲを見るのは初めて？」

「いろいろ動物見てきたけど、これは初めてかな？」

ワクワクと赤い鱗を撫でて回る夏梨に、キュルケは嬉しそうに微笑む。

「そばにいて、熱くないの？」

才人が尋ねる。まあ確かに、尻尾が燃えていて、口からもチロチロとほとばしる火炎が熱そうだ。

「あたしにとつては涼しいぐらいね」

「これって、サラマンダー？」

ルイズが悔しそうに尋ねる。それに大して、キュルケは大きい胸をプルンと揺らすとさらに張り上げてこう言った。

「そうよ。火トカゲよ。見てよ？この尻尾」

夏梨の触る手を優しく外して、尻尾の辺りを撫でる。

「ここまで鮮やかで大きい炎の尻尾は、間違いなく火竜山脈のサラマンダーよ！！ブランドもので好事家に見せたら値段なんかつけられないわよ？」

今にも腰に手を当てて、高笑いしそうな勢いで喋っている。アレが借金だの、返済だのぶつぶつと唱えている事は、自分の精神衛生上悪そうなので、そちらへ突っ込むのはキュルケは辞めておいた。

「素敵でしょ。あたしの属性ぴったり」

「あなた『火』属性だもんね」

「ええ。微熱のキュルケですもの。ささやかに燃える情熱は微熱」

それでチラリと才人も含めた男性陣に熱っぽい視線を向ける。

一護は興味なさそうな顔をしていたが。



「でも、男の子はそれでイチコロなのですわ」

くすつと流し目を送る。送り先は後ろにいる金、黒、白、赤、橙の色とりどりの髪色をした男達だ。序でに、

「あなたと違ってね？」

キュルケはその自慢の胸を得意げに張り上げる。

それをみてルイズも負けじと胸を張り返すが、正直、胸のポリウムが違いすぎて見ていて痛々しかった。後ろの10歳、どれだけ歳が行っていても、精々12、13といった位の体格であり、成長の余地のある後ろの二人と全く同じというのが、更に才人視点から痛かった。

才人は知らなかったが、フレイムヘイズは不老である。つまり、シヤナには成長の余地はない。

夏梨も死神である以上、肉体的な成長は遅い。

元々、歳を数える習慣のない彼らに「成長」と言うものは無用の物なのだが、自身の体格を気にしていない訳ではなかった。静かに二人とも奥歯を噛む。

ルイズはそれでもぐつとキュルケを睨みつける。どうやら相当の負けず嫌いのようだ。

最初から勝負にすらなっていない闘いではあるが、それでも負けたくないらしい。

「あんたみたいにいちいちと色気振りまくほど、暇じゃないのよ」

「あら？あなたに色気なんてあったかしら？」

キュルケの言い様にルイズの堪忍袋の緒が切れた。随分と簡単に切れる堪忍袋である。

「うがー！ーッ！！」

ルイズが才人に怒りをぶつけているのを見つめたあと、キュルケは余裕の態度でニッコリと笑い、後ろにいる明らかに毛色の違うの7人を見つめる。

「あなた達、お名前は？」

「アレン・ウォーカーです」「シヤナ」「僕はネギ・スプリングフィールドです」

「エドワード・エルリックだ」「さか…、すまん。黒崎一護だ」「その妻、黒崎夏梨」

最後にさり気に一護と夏梨がボケをシリアスな空気に咬ます。

勿論、「誰って言おうとした？」「妹だろ」とお互いに叩かれていたが。

最後に、

「平賀才人」

「みんな、独創的な名前ね……じゃあ、お先に失礼」

そう言うと、颯爽とキュルケは自慢をするだけして去っていった。それに四足歩行のサラマンダーがその凶体に合わない機敏な動きであとを追う。

キュルケがいなくなると、ルイズは拳を握り締めた。

「くやしー！！」

キーツとハンカチの端でも噛んでいるかのような怒り方だ。

それにしても随分と沸点の低い女の子だなと、今さらながら7人は思った。

「なんなのよあの女！！自分が火竜山脈のサラマンダーを召喚したからって！！ああもう！！」

地団太を踏んで悔しがる。相当に悔しいようだ。

「いいじゃねえかよ。召喚なんかなんだって」

のんびりとした調子で一護が諭す。

「よくないわよ！メイジの実力をはかるには使い魔を見るって言われているぐらいなのよ！！なんであのバカ女がサラマンダーで、私があんたらなのよ！」

「え、どう考え立って、あんな爬虫類なんかより人間の方が上だろ？」

才人が訳が分からないといった調子で尋ねる。尤も、この中にもともな人間は才人只一人なのだが、ルイズも才人もそれを知らない。何せ6人ともそれを秘匿しているのだから。

「あのね、貴族と平民じゃ犬と才オカミほどに違うの」

ルイズが下を向いて愕然とした様子で言う。

「犬っコ口を呼んでも嬉しくないわ」

（じゃ、俺は神様だな…）

（僕は天使でしょうか…？）

（俺は王様だな）

ルイズと才人の遣り取りの中、どうでもいい事を考えているのが

三人居た。

確かに貴族と平民で犬とオオカミなら、貴族、つまり魔法使いと死神の差は歴然としている。勿論、エクソシストや錬金術師も同じだ。技術の面で大きなアドバンテージがある。フレイムヘイズやネギが属する魔法体系とは、体力面・膂力面で抗いようの無い、埋めようの無い差がある。

「ほら行くわよ！」

そう言っつて8人は食堂へ向かった。

## A W a k i n g r o m a n c e (後書き)

死神という概念は単純に死を体系化したから生まれた概念的存在な  
のですが、どうも原作を読んでいる感じではそういった「死」に対  
するものへの意識が貴族にしても、平民にしても稀薄な感じがしま  
す。ある意味では創造神に次ぐ神格を持ち得るのは生命を司るもの  
だからなのに、そういった「死」、それに対する「生」という概念  
が確立していない。やっぱりハルゲギニアの住人は人の命を軽んじ  
ている、そう思えてなりません。

サラマンダーというのは火蜥蜴と和訳されます。

元々は魔法薬などを注いだ炎、それに宿る魔法生命となっていました。  
火というものはゾロアスター教などを始め、一定の聖性を持つ  
なんていることが多いです。日本でも神道や仏教に於ける護摩や送り火  
そういった火というのを軽く扱えるキュルケもそれなりに、実力の

ある魔法使いへと育つのかもしれません。

アレン達の修行と言うか鍛錬のシーンは原作そのままです。アレン  
は2巻冒頭のシーン、ネギやシャナは毎朝やっています。他の3人も  
色々修行してますが、どうしても進化の帰結の一つである一護に  
は修行の必要があるとは思えません。何せ完現術と死神、卍解、虚  
化という能力を持っていますから。

r u n n i n g t o b r e a k f a s t

トリステイン魔法学院の食堂は、学院の敷地内で一番背の高い、真ん中の本塔にある。

食堂の中は、やたらと長いテーブルが三つ並んでいる。軽く百人は座れるだろう。

今年で二年生のルイズたちのテーブルは、真ん中だった。

食堂の正面に向かって左隣のテーブルに並んだ、ちよつと大人びた感じのメイジたちは、みんな紫色のマントをつけている。

そして反対の右隣のテーブルのメイジたちは、茶色のマントを身につけている。

どうやら学年ごとでマントの色が違うらしい。茶色が一年生、紫が三年生だろう。そんな風に才人はあたりを付けていた。

朝食、昼食、夕食と、学院の中みんなが、先生や生徒も含めてここで食事を取るらしい。

食堂へ向かう傍ら、ルイズがそんな事を説明していた。

尤も、それを真面目に聞いていたのは才人、只一人だったが。

一階上にロフトの中階があり、虹のようにカラフルな色合いのマントをつけて、思い思いの服をその下に着込んだ、教師のメイジたちが、そこで歓談しているのが見えた。

食堂に所狭しと並んだテーブルの上には、いくつものロウソクが立てられ、花が飾られ、フルーツが盛られた籠がのっている。

すべてのテーブルにはそのような豪華な飾り付けがなされていた。それらをじっと眺めていると、得意げに指を立てたルイズがこう言った。

「トリステイン魔法学院で教えるのは、魔法だけじゃないのよ」「ふん」

食堂前に来た6人はルイズの説明を右から左へと流していた。アレンに到っては、ルイズの部屋から食堂への移動時間を短縮しようと、箱舟のポイントを置いていた。短いピアノの旋律が流れ、風に溶けていく。

「メイジはほぼ全員が貴族なの」

エドはほぼ、全員というところに引つ掛かる物言いを感じたが、全てがメイジ＝貴族という公式ではない。逆に貴族＝メイジという公式は成り立つのかと聴こうとしたが、このプライドだけ高い女の子に聞いてもムダだろうと思ったので、辞めておいた。

無駄な争いは少ない方がいい。それでなくても、彼らはこの国を崩壊させかねないのだから。余計な事をして軍に追われるような事にはなりたくない。

「『貴族は魔法をもってしてその精神となす』のモットーのもと、貴族たるべき教育を、存分に受けるのよ。だから食堂も、貴族の食卓にふさわしいものでなければならぬのよ」

「へ〜〜〜」

分かっているのか、分かっているのか。  
生返事で済ませる。

「わかった？ホントならあんた達みたいな平民はこの『アルヴィーズの食堂』には一生入れないのよ。感謝してよね」

「ああ、よくわかった。一般市民の働いた大切な金がここで消えることが」

一護が嫌味つたらしく、ルイズに言う。やたらと「一般市民」と「消える」ということを強調した言い方だった。彼ら死神の世界に

も「貴族」と言う存在はいる。だが、こんな感じにプライドだけ高い者は居なかった。死神の世界は実力主義、そして現場主義だ。貴族だからという、そんな矮小な理由で他人を下に見たりしない。尤も、これは死神同士の話で、死神とそうでない者との間の乖離は酷いのが現状だと知っている。

「アルヴィーズって何ですか？」

箱舟の設置を終えたアレンが訊いた。

「小人の名前よ。周りに像がたくさん並んでいるでしょう」

言葉通り、壁際に精巧にできた小人の像が並んでいる。

今にも踊りだしそうなくらいに精巧な出来栄である。だが、所々塗装が剥げていたり、サイズが一個一個違っていたり、大量生産ではなく、手工業に拠る物だという事をエドは一つ手にして確認する。

見入っているらしいエドから視線を外し、それから才人に顔を向ける。

「いいから、椅子を引いてちょうだい。気の利かない使い魔ね」

腕を組んでルイズがそう言った。

それを見て才人は「すみませんね。お嬢様」と業と仰々しく言って椅子をひいてやった。

ルイズは礼も言わずに腰掛ける。

才人も自分の椅子を引き出して座り、それを見た一護達も座った。

「へえ、随分と豪華だな。俺の知ってる奴の家でもこんなのは見たことねえや」



冷静で伶俐な兄と、ちょっとお調子者でお茶目な義妹の貴族を脳裏に思い浮かべながら、一護がため息を漏らす。単純に彼らが質素な食事の方がいいという理由なのだが、その事情は知らない。

「足りるかな？」

食事の量に不安を漏らすのはアレン。この豪華な料理で足りないかもしれないとは普段、どれだけ食べているのだろうか。ネギとシヤナ、夏梨の三人はアレンの食事が気になった。

エドは何も言わない。適当に自分が食べられる量というのを判断しているようだ。

朝から無駄に豪華な料理であった。

それぞれが、それぞれの感想を漏らす。才人も早く食べたくてうずうずしていた。

それを見てルイズがじっとこちらを睨んでいるのに、一番近くに居た才人が気づいた。

「何だ？どうした？」

才人が怪訝そうに訊く。それを見て6人も頭の上に、ハテナを浮かべて首を傾げている。

そんな7人にルイズは無表情で床を指差した。

その指の先に沿って、14の瞳が豪華なテーブルから床に視線を動かす。

そこには、1枚の皿が置いてあった。

その皿の上には、何やら得体の知れない物が浮かんだスープと硬そうパンが二切れずつ置いてあった。質素というか、残飯の残飯のような感じの食事だ。

「……は？」

7人共目が点になる。  
ルイズが頼杖をついて言った。

「あのね？ほんとは使い魔は、外。あんたは私の特別な計らいで、  
床」

「……………」

才人は絶句した。

その呆けた顔を見て、今度はニタニタと勝ち誇った顔で6人に言う。

「あんた達は何もしなかったから、ご飯抜き」

無情ともいえる宣告だが、才人は内心「ざまーみる」と思っていた。

この台詞に一番、カチンと来たのはアレンだった。普段から良く食べるアレン。そんな彼が食事を抜かれて頭に来ないはずがない。だからと言って、自分の態度を改めようとは思わなかったが。

「一護さん、僕、カチンと来ました」「奇遇だな俺もだ」

そんな6人を無視して、ルイズは手を合わせる。  
彼女の周り、食堂中の生徒が手を組む。

「偉大なる始祖ブリミルと女王陛下よ」

全員で目を瞑り、唱和を始める。

「今朝もささやかな糧を我に与えたもうたことを感謝いたします」

祈りの声が、唱和される。

ルイズも目をつむってそれに加わっている。

「おいおい、何がささやか糧だよ」

才人は納得がいかないと言った様子で、祈りを捧げるルイズに食って掛かる。しかし、完全に無視されてしまった。

「随分と豪華なくせしやがって！」

「……………」

「ささやかな糧はこっちだろうが。これじゃあ、ペット以下じゃねーか！」

兎に角、マシンガンのように才人が文句を言うが、ルイズの硬い壁には傷ひとつ付かなかった。

「ああ、うまい。うまい。泣けそうだ」

と呟きながら硬いパンをかじる才人。それでも食事に在り付けただけいいことだと思い、食事を抜かれた6人を勝ち誇った顔で見る。

「ヤベーな、コレ。美味しい」

「千草と同じくらいに美味しい」「ですね、ジェリーさんと互角かも」

「やべ、俺こんな美味しいモン、食ったことねえぞ！」「こんな豪華な食事なんて初めてです！」

「ココに来て良かったかも」

「……………」

まだこの異世界に来て2日目、最初の朝なのにもう驚くのは何度目だろう。

食事を抜かれたはずの6人が、自分よりも良い食事を食べているのだ。よくよく見れば、何枚もの白い皿が宙に浮いていて、その皿を白い帯みたいなのが吊り下げている。その帯の元はアレンの左腕に繋がっている。

浮いた皿から6人は好き勝手に取って食べている。凄く嬉しそうなお顔をしている。肉を頬張り、果物に齧りつき、野菜を口へと運ぶ。さっきまでテーブルに乗っていた料理の数々が今、アレンの手にあるのだという事が、才人は直感で分かった。

テーブルの方へ目を向けると、何も無い空間でルイズとその傍にいた生徒のフォークとナイフが行ったり来たりしている。何も口の中へ入っていないのだが、どうも気が付いていないらしい。

「え、えっと…」

「お、才人も食べるか？」

「あ、ありがとう…」

一護が優しく、林檎を差し出す。それに手を伸ばそうとすると一護の後ろで、仁王立ちしている悪鬼の姿があった。勿論、ピンクの髪の毛の悪鬼だ。怒りのオーラで体が何倍にも見える。

「あ、あんだ達…！」

「あ、やべ。バレた」

そう言っただけ料理と伴に6人は脱兎の如く、駆け出す。

ルイズも懸命に追うが、とてもじゃないが6人の速度には追いつけない。廊下に出たところで、6人は箱舟の中へと消え去り、ルイズは完全に見失ってしまった。

「キーイイ!!」

怒り狂ったルイズに才人は思いつきりぶたれた。

## THE Approaching Magic

箱舟の中に戻った6人は準備を各々準備を整え、昨日の夜決めた手はずどおりに動く。

「よし、行くぜ！」

朝の手合わせの前にアレンは箱舟のポイントを中庭に置いておいた。そのお陰でルイズどころか誰にも気づかれること無く、この朝日が差し込む中庭にもう一度遣って来ていた。

ふわりと浮いた杖の上に、運転手であるネギ、財布役であるエドとその腕に宿ったアル、箱舟の持ち主であるアレンが乗った。ネギはまだ10だが例外だとしても、そこそこの体格のあるアレンとエドを乗せても沈むことのない、この魔法の杖というのに感嘆していた。

空も飛べて、高速で移動できるこのネギの杖は、彼の魔力制御の精度を高める役割もある。

それだけの力を持つても、ネギはこの力が万能であるとは思っていない。ネギの見た感じでは、この世界の魔法使い、メイジ達は自分達の使える魔法を万能、始祖の御心と言っていた。修練次第では誰にでも扱えるネギたちの魔法使いの体系とは、どうやら根本から違っている。

ネギ達の魔法使いは、移動や通信にも魔法を使っている。

だが、どれだけ異能の力でも所詮は人の身で扱う程度の力。

遠くへ行けば行くだけ、その力は弱まるし、精度も落ちてくる。通信なら携帯電話を使うし、火を付けたいならライターを使う。その方が遥かに効率的で安定しているからだ。決して科学を否定しないし、受け入れられないわけでもない。

「では、行きましょう!」

そんなこの世界と自分の世界との魔法の乖離を思いながら、出発の合図を掛ける。

乗り切れなかった一護達3人は留守番である。

「行ってらっしゃい。頼んだぜ」

「はい、任せてください。一護さん、夏梨さん、シヤナさん」

そういつて三人は朝日に向かって飛び立っていった。

見送りも終わり、くるりと振り返った先には、腕を組んでこちらを睨んでいる女の子が居た。傍には頬を真っ赤にした才人も立っている。

「よ、えーと、ルフランだったけ?」

まさにたった今、気が付いたといった感じで、最早業となのか、素なのか分からない感じで一護が話しかける。

「ルイズよ!ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール!いい加減覚えなさい!」

「あー、悪い。で、何?」

この態度にルイズは完全に堪忍袋の緒が切れた。使い魔の癖に、主人を放置。使い魔の癖に、主人の食事を強奪。使い魔の癖に、主人の話を無視。僅かな期間であったが、これだけの事を高が平民にされたのだ。ルイズのプライドは痛く傷ついていた。

「本当にその態度、何?私は恐れ多くも公爵家の人間よ!」

「はいはい、公爵家の人間ってだけの奴だろ?お前、自身が公爵じ

「やねーんだろ？」

「うっ！」

ルイズは反論に困ってしまった。確かに、自分が公爵の位を持っているわけではない。持っているのは自分の父親だ。単純に自分は公爵の父の元に生まれただけ。一護の指摘は核心を突く。

尤もルイズ本人が公爵だった所で、一護の態度は変わらないだろう。それはシャナと夏梨も同じ。

「ふ、ふん！それを差し引いても、私は貴族よ！平民が口答えして良い存在じゃないんだからね！」

「はいはい、偉いですねー」

立ち直った気持ちも軽く流される。

正直、ルイズはココまで随分と本人は譲歩していたのだ。口で言うなど彼女にとって、序の序。物質的なモノで制裁を始めて漸く、序。だから、ここまで来てついに実力行使に出た。

「いい加減に言うこと聞きなさい！」

小さな拳を振り上げてやってきた女の子。一護は正直、扱いに困っていた。後ろでポケッとしている二人に任せてもいいのだが、こちら辺で彼我の実力差を見せておくのもいいかもしれない。

すつと右へ小さい動きでルイズの突撃を回避すると、首に左手を引っ掛ける。そして、そのまま

「ぐえっ！」

と、カエルが潰れたようなうめきを上げて、ルイズが気絶する。自分の進行方向に首を狙い打つ角度と高さで障害物があった。殆ど



自滅である。本気で一護がやったら、ルイズの首が胴体と永遠に離れ離れになってしまう。気絶ですんだのは、一護が何の力も入れていないからだ。

「うわ、容赦な！」

才人が思わず叫ぶが、一護も後ろの女の子二人も涼しい顔。それから女の子に有るまじき、白目を向いて不細工な顔になってしまった、ルイズの片足を引っつかんで、運び始めた。

「あ、あの大丈夫ですか…？」

一護の余りな扱いに思わず、才人が心配そうに声を掛ける。

「あー、大丈夫だろ。死んじやいないし。で、これからどうする？」  
「え、えーと、確か教室へ行くつて。その前に使い魔たちを探すつて」

「そう、それなら教室へ行かないとね」「魔法の授業か…、興味あるな」

ワクワクといった感じの夏梨とあくまでも事務的なシャナ。似たような二人だか、性格は鏡に映したように正反対である。

「教室は何処？」

ぶっきらぼうに聞くのは一護。そういえば才人も教室の場所を知らない事に気が付いた。

「ま、いいや。探してれば見つかるだろ」

意外にも教室は直ぐに見つかった。

途中で今朝、ルイズの部屋を出た所で逢った赤い髪の女の子、キルケが案内してくれたからだ。彼女も一護にまるで荷物のように引き摺られるルイズを見てポカンとしていたが、才人が「教室へ行きたい」というと話を悟ったようで、快く案内してくれた。

魔法学院の教室は、才人から見て、大学の講義室みたいだった。一番前に黒板があつて、そこから階段状に椅子と机が並んでいる。それが石でできていると思えばいい。

一護達と引き摺られたルイズが扉を開き中に入ると、先に教室にやってきていた生徒たちが一斉に振り向いた。

そしてくすくすと笑い始める。

先ほどのキルケは仕事は済んだとばかりに、4人とルイズを放置して、教室の中ほどへ。

その一挙手一投足を見惚れていた男子が、あつという間に周りを取り囲んでいた。

(なるほどな、男の子がイチコロというのは間違つてないな)

何となく自分の周りの女性の顔を思い浮かべながら、一護は胸の大きさを比べてみる。もし、心の中が見れたら、確実に妹に叩かれるだろうが、真顔で考えているので誰も気が付かない。

周りを囲んだ男子どもに、まるで女王のように祭り上げられている。

それだけ胸が大きいと、うようよと篝火に寄ってくる蟲の様に男がなるのはしょうがない。

一護はキルケを見てそんなことを考えながら、次に他の生徒をみた。

(……全部、実験対象にされそうだ)

真つ黒な仮面を付けたマッドサイエンティストを思い浮かべながら、どんな風に改造されるのか、ちょっとだけ見たい気もした。こちらへんは彼も「男の子」なのである。

才人は他の生徒が召喚したらしい使い魔を見てワクワクしている。漸く復活したらしい、ルイズに尋ねた。勿論、片足は一護に拘束。髪や服には草や廊下の埃が付いていて、汚らしい。

「あの目の玉のお化けはなに？」

「…バグベアー」

「あの、タコ人魚はなに？」

「…スキュア」

ルイズは不機嫌な声で答え、自分の足を持っている一護をキッと睨みつけた。

「ああ、気が付いたのか」

パツと手を離す。思いつきり足が落ちた、その先は固い石畳。自分の体とは言え、重力には逆らえない。しこたま足を打ちつける。

「つつつ…」

思わず涙目になるが、ココで怒っても授業前なので他の生徒に迷惑になる。痛む足を摩りながら、席の一つに腰掛けた。

それを見て一護達も隣に座った。才人、シヤナ、夏梨、一番通路側が一護である。

ルイズが席に座った才人達をジッと睨みつける。

「ここは、メイジの席。使い魔は座っちゃダメ」

一護は聞いていなかったが、才人たちは憮然として、床に座る。だが、窮屈だったのでまた椅子に座り直した。

ルイズはちらっと才人を見たが、これ以上はムダだと悟ったのか、授業前だから他の生徒に配慮したのか何も言わなかった。

しばらくして扉が開き、教師らしき婦人のメイジが入ってきた。

中年の女の人で、紫色のローブを身に纏い、帽子を被っている。

ふくよかな頬が、優しい雰囲気を醸し出している。彼女は教室を見回すと、満足そうに微笑んでこう言った。

「皆さん。春の使い魔召喚は無事に大成功のようですね」

ニコニコと微笑みながら、教室内を見回す。

「このシュヴルーズ、こうやって春の新学期に様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなのですよ」

ルイズは俯いた。

そしてシュヴルーズの目がルイズたちを捉える。

「おや？変わった使い魔たちを召喚したものですね。ミス・ヴァリエール」

シュヴルーズが、才人たちを見てとぼけた声で言う。

すると、教室中がどっと笑いに包まれた。

「ゼロのルイズ！召喚できないからって、その辺歩いてた平民を連れてくるなよ！」

ルイズは立ち上がった。長い、ブロンドの髪を揺らして、怒鳴る。

「違うわ！きちんと召喚したもの！コイツらでも使い魔よ！」

「嘘つくな！『サモン・サーヴァント』ができなかったんだろっ？」

ゲラゲラと教室中の生徒が笑う。

「ミセス・シユヴルーズ！侮辱されました！かぜっぴきのマリコン  
又が私を侮辱したわ！」

握り締めた拳で、ルイズは机を思いっきり叩いた。木の机が少し  
だけ音を立てる。

「かぜっぴきだと？俺は風上のマリコンだ！風邪なんか引いてな  
いぞー！」

「あんたのガラガラ声は、まるで風邪も引いてるみたいなのよ！」

マリコン又と呼ばれた男子生徒が立ち上がり、ルイズを睨みつけ  
る。まさに一触即発といった感じだ。そこへ水を差したのは、つい、  
ふんつと笑ってしまったシャナだった。

今までぶすつと、不機嫌そうな顔で居た彼女の笑い顔を見たのは、  
一護も夏梨も初めてだったので、正直、驚いた。それと同時に同じ  
だけの嬉しさも感じた。

すると、それに気づいて少年がこちらを睨んだ。

「おい、平民！！お前今笑っただろ！平民の分際でよくも僕を笑っ  
たな！！！」

少年がシャナに向かって叫ぶ。その声は教室の空気を冷たく、硬

直させている。

「シャナはそれを無視して言う。」

「ルイズ。お前のセンスは最高よ。よく相手の特徴を捉えてる」

「おい！無視するな！！」

「何？私はお前なんかと話たくはない」

カタツと腰を動かして、窮屈だったすわり心地を直す。

凜としたその姿は、威風堂々といった感じだ。

「なんだと？お前、貴族をバカにしてるだろう。平民がそんな態度とっていいと思ってるのか？」

「私は貴族をバカにしてない。失望しただけ」

そこまで言って、

「相手の立場を貶め、あざ笑う。高が知れるわよ」

そうして、シャナは先ほど笑っていた生徒たちを、その黒い瞳で見据える。

彼女の発言に憤っている者、自分のした行動を恥じている者がいる。自分のした愚かな行動を恥じれるのならまだ救いようがある。これから正していけばいいのだから。

「中には貴族らしい人間もいるけど、この教室の大半が貴様と似たような人間」

勿論、これからの言葉は恥じてもいなければ、尚も憤り、省みる事すらしない愚か者への警告だ。

「よくもそれで『貴族は魔法をもってしてその精神となす』と言えるわね」

「き、貴様！そこまで言うのなら」

「おやめなさい！！」

マリコル又がなにか言おうとしたとき、シュヴルーズがそれを止める。

マリコル又はまだなにかいいたそうにしていたが、黙って席に着いた。

「ミスタ・マリコル又。確かに今のあなたは貴族らしくありません。彼が言ったことを反省しなさい」

マリコル又は一度、憎しみを込めてこちらを睨んだがそのまま静かになった。

シュヴルーズは目を閉じ、やれやれといった様子で手に持った小ぶりな杖を振った。

そこでようやくルイズとマリコンヌの二人は席につく。

「ミス・ヴァリエール。ミスタ・マリコンヌ。みっともない口論はおやめなさい」

ふつつと肩を竦めて生徒の二人に、それから

「それにミス・ヴァリエールの使い魔もそういうことは言うてはいけません」

そうシュヴルーズが冷や汗を浮かべて、凜と腕を組んで佇むシャナにそう言った。

「シャナ、お前、案外喋るんだな。驚いたぞ」

「ホント、ホント。案外、毒舌なんだ」

「ふん、あいつが気に入らなかつただけよ」

「そっか」「にひー」

一護と夏梨が歯を見せて笑っていた。

ルイズはしよぼんとうなだれていたが、同時にシャナ達がちゃんと自分のことを思っていたことに嬉しさを隠せなかった。

「お友達をゼロだのかぜっぴきだの呼んではいけません。わかりましたか？」

「ミセス・シュヴルーズ。僕のかぜっぴきはただの中傷ですが、ルイズのゼロは事実です」

くすくすと笑いが漏れる。だが突然笑いがビクツと止まった。シュヴルーズから飛んできた赤い粘土が、笑った生徒の口に張り付いたからだ。

「では、授業を始めますよ」

静かになった教室の中、シュヴルーズが杖を振るうと机の上に、石ころがいくつか現れた。

「私の二つ名は『赤土』。赤土のシュヴルーズです」

授業の準備が整った所で、自己紹介を始める。

「『土』系統の魔法を、これから一年、皆さんに講義します。魔法の四大系統はご存知ですね？ミス・ヴァリエール」



先生から質問されたルイズが弾かれたように飛び上がって、答える。

「は、はい！『土』の系統の基本魔法は『錬金』です。金属を作り出したり建物を建てるのに必要な石を切り出したり、農作物を収穫したりするなどの生活に関係した魔法が『土』です」

「あとは、『火』『水』『風』です！」

最後までルイズが言い切らないうちに、後ろの方で薔薇をくわえた金髪の少年が手を挙げて答える。

「はい。今は失われた系統魔法の『虚無』を含めて、全部で五つの系統があることは、皆さんも知つてのとおりです」

カンカンと黒板に白い五角形を描きながら説明を続ける。そして、その頂点に何か文字を書き込んでいく。しかし、才人達にはそれは読めなかった。

（文字、知らないと）

（うむ、その通りだな。これでは読み書きができません。しかし、何故我々は言葉が通じるのだ？）

シャナとアラストールが二人にしか聞こえない方法で相談する。

今の文字が読めない状況では、経済的・法律的な問題が噴出する街へと三人が向かったが、問題はないのだろうか。てっきり会話が通じるものだから、失念していた。

シャナが考えている間にも授業は進む。

「その五つの中で『土』は最も重要なポジションを占めていると私は思います。それは、私が『土』系統だからという身びいきだから

ではありません」

シュヴルーズは重々しく咳をした。

「『土』系統の魔法は、万物の組成を司る重要な魔法であるのです。この魔法がなければ、重要な金属を作り出すことはできないし、加工することもできません大きな石を切り出して建物も建てることもできなければ、農作物の収穫も、うまくできなかったでしょう。このように、『土』系統の魔法は皆さんの生活に密接に関係しているのです」

才人は、なるほど、と感心した。どうやらこの世界では才人の科学技術に魔法が相当するらしい。

だが一護は話をまったく聞いていない。シャナと夏梨はじつと黒板を見つめている。

「今から皆さんには『土』系統の魔法の基本である、『錬金』を覚えてもらいます。一年生のときにできるようになった人もいます。ところが、基本は大事です。もう一度、おさらいをします」

そう言ってシュヴルーズは、石ころに向かって手に持った小ぶりの杖を振った。

すると石ころが光始める。

そして光がおさまると、ただの石ころがピカピカ光る金属に変わっていた。

それには、才人は驚いていた。しかし、隣の三人は冷静に事の成り行きを見ていて、動いたりしていない。何というか、この人たちは感動とかに無縁らしい。勝手に才人はそんな事を思ったが、実際は、

(エドの方がすげえよな…)

(何せ、黄金をトン単位で作り出したのだ。石ころを黄金に変えるなど造作も無かるう)

(つまらない)

(こつちも同じ事が出来るんだ…)

などと昨日エドが見せた錬金術と比較していた。

「ゴゴ、ゴールドですか？ミセス・シュヴルーズ！」

キュルケが身を乗り出して尋ねた。女性がキラキラと輝くものに弱いのは異世界でも同じらしい。そして、胸が揺れ、男子共がいやらしい目で見えるのも共通なのだろう。

「違います。ただの真鍮です。ゴールドを錬金できるのは『スクウエア』クラスのメイジだけです」

そこで少し、憂いに沈んだ表情で続けた。

「私はただの『トライアングル』ですから…」

シュヴルーズの言葉にキュルケは、「なぐんだ」と呟くと興味をなくしたように席についた。

そんな中、才人はルイズに小声で話しかける。

「ルイズ」

「なに」

「スクウエアとか、トライアングルってなに？」

「系統を足せる数のことよ。それでメイジのレベルが決まるのよ」

「はい？」

この世界の魔法の事が、まだ分かっていない才人にルイズは小さい声で説明した。

「『土』系統の魔法はそれ単体でも使えるの」

そこで一端、言葉を区切り説明を続ける。

「『火』の系統を足せば、さらに強力な呪文になるの  
「なるほど」

「『火』『土』のように、二系統を足せるのが、『ライン』『メイジ」

ルイズの説明を聞きながら、シヤナはとりあえず和訳した感じ  
点をつけ、線を引く。

その隣で、才人が頷く。

「シュヴルーズ先生みたいに、『土』『土』『火』、三つ足せるの  
が『トライアングル』『メイジ」

「同じの二つ足してどうするの？」

「その系統がより強力になるわ」

「ふ〜ん。じゃあルイズはいくつ足せるの？」

才人からの質問に、ルイズは黙ってしまった。

「ミス・ヴァリエール！」

「は、はい！」

授業中の私語はやはり学校では厳禁らしい。

「授業中の私語は慎みなさい」

「すみません……」

とうとう先生に注意されてしまった。

「おしゃべりをする暇があるのなら、あなたにやってもらいましょ  
う」

「わたし？」

「そうです。ここにある石ころを、望む金属に変えてもらいなさい」

シュヴルーズが促すが、ルイズはオロオロとして立ち上がる  
気配がない。

「どした？ルイズ」

才人が聞いた。

「ミス・ヴァリエール？どしたのですか？」

シュヴルーズが怪訝そうに再び呼びかけると、キュルケが困った  
声で言った。

「先生」

「なんです？」

ちらりと窓の外へ目を遣りながら、困ったような調子で、

「やめといた方がいいと思いますけど……」

「……………？どうしてですか？」

「危険です」

キュルケは、きつぱりと、はつきりと良く通る声で言った。それに教室の生徒たちのほとんどが頷く。

「危険？どうしてですか？」

先生はどんな意味でキュルケがこんな発言をして、周りが頷いているのか分からなかった。

「ルイズを教えるのは初めてですよね？」

「ええ。でも、彼女が努力家ということは聞いています」

にっこりと笑って、更にルイズを促す。

「ミス・ヴァリエール。気にしないでやってご覧なさい。失敗を恐れては、何もできませんよ？」

「ルイズ。やめて」

キュルケが青ざめた顔で言う。

だがルイズは立ち上がると、「やります」と緊張した声で言い、つかつかと教卓に歩いていった。

「ミス・ヴァリエール。錬金したい金属を、強く心に思い浮かべるのです」

隣に立ったシュヴルーズがにっこりとルイズに微笑んだ。

こくりと可愛らしく頷いて、手に持った杖を振り上げ呪文を唱える。

その姿は、とても愛らしく、その暴力的な性格を知っていても、才人はぐっときてしまう。

しかし、そんな愛らしい姿を見ようとせず、教室中の生徒たち

がみんな椅子の下に隠れた。

何となく、周りが避難を始めている状況を見て、夏梨は防御の準備を始める。

「縛道の八十一、『断空』！」

ルイズは目をつむり、短くルーンを唱えて、杖を振り下ろす。すると、石ころが七色に光輝いた。みんなが「おお！」と呟いた次の瞬間、石ころは爆発した。

カランカランと、石の破片が降り注ぐ。

爆風と爆発の衝撃が密閉された教室内で行き場をなくし、最も脆い場所、窓ガラスから逃げていった。轟音が響き、使い魔たちが暴れ回る。

爆風が治まった後、真つ黒焦げになった爆心地には、木片と化した教卓と伴に、気を失ったシュヴールズと煤けたルイズが立っていた。

「けほ、ちょっと失敗したみたいね」

何事も無かったかのように言うルイズに、周りから野次が飛ぶ。

「ちょっとじゃないだろ！窓ガラスが全部、無いじゃないか！」

「ああ、僕のスクイードが、食われた！」

「もう、ルイズは退学にしてくれよ！」

ここに到って、才人たちは何故、ルイズが「ゼロ」と呼ばれているか悟った。

（なるほど。魔法が使えない「ゼロ」って訳か…）

爆発を防いだ光の壁の後ろで、3人は思った。隣にいてギリギリ幅に入らなかつた才人はすっかり真っ黒になっていたが。



教室でルイズの魔法が爆発していた頃。

分かれて、街のほうへ行っていた三人は、漸くといった調子で辿り付いていた。

朝はルイズから食事を奪い、逃走することしか頭に無かったので、街の方向を聞きそびれていたのだ。確かに、強奪から逃走は計画性も何もない咄嗟の犯行だったから、そんなモノがある訳ないのだが、ここまで無計画に進めるのは三人とも初めてだった。

ネギの杖のスピードは最大時速150キロ。トリステインの魔法学院からトリステインの首都であるトリスタニアまでは馬で約2時間。馬の最大時速は40キロぐらいだから、その三分の一の時間でたどり着けた。ここを選んだのは単純にランドマークとなる大きな建物があつたからだが、まだその高い尖塔がある建物が、王宮だとは知らない。

街の入り口から少し離れた場所に留め、アレンは飛び降りて、早速アレンは箱舟のポイントをセットする。単純な作業なので、そんなに時間は掛からない。

「よっと」

「もう兄さんたら」

杖からエドが降りる。そして、そのまま両手を合わせ錬成の体勢を取る。途中でアルの批難する様な声が上がったが、エドは無視する。石畳でも何も無い剥き出しの土色の大地に手が触れると、触れた所から徐々に金色に変わっていく。金属の王である黄金の錬成である。

三人の目の前には、山のように積みあがった金の延べ棒が並んでいた。

概算で2トンくらいはあるだろう。

「こんなもんかな」

「わー！凄いです！」「便利な術だな、オレッチも覚えてーぜ」

「これだけあれば、師匠の借金も……」

何度も見ているが、元々あった元素を別の元素へと変貌させる。ネギもアレンもそんな事ははじめて見た。ネギは知的好奇心から、アレンはその身の都合で見ているが。

本来、エドとアルの世界、アメストリスでは金の錬成は違法である。

錬金術はハルゲギニアの魔法とは違い、修練次第では誰にでも体得できる。つまりは黄金を錬成できる人間はエドだけではない。そんな人間が好き勝手に金を錬成したらどうなるか。

一番、分かりやすい答えは経済の混乱である。金銀はそれだけで、経済的な取引の効果を持つ。金の市場に流通する量が増えれば、金の価値は下がる。金の価値が下がれば、物価が上がる。十分な経済の混乱を齎すのだ。これが禁止されている理由である。

「よし、じゃ運ぶぞ」

「でも、こんな量……」

「大丈夫、心配すんなって」

そうして、今度は台車を作る。大きな車輪がいくつも付いた台車が地面から金を押し上げる。ちょうど良い感じに運びやすくなった。この世界のメイジは人口の1%もない。そして、金を錬成できる「スクウェア」メイジの数は更に少ない。全体の人口比からすれば、多分、0.1%も居れば良い方だろう。その最上位に存在するメイジの力持つとしても、指先ほどの小石を金に変えれば気を失ってしまう。

だからこそ、この世界では金を錬成しても経済が混乱しない。小石程の金が産出量から増えても、誰も気にしないし、気にならない。エドの力は、この世界の社会体制や経済体制を根本から揺り動かさねない。

その事に一番気が付いているのは、他ならぬこの3人だった。

「やっぱりこれだけあると壮観で、重いですね」

「ほら、運ぼうぜ」

ガラガラと耳障りな音を立てながら、三人が運んでいく。

その姿ははつきり言って人目を引く。幅5メートル程もない通りだから、金2トンを運んでいる姿は、異様とも言えるものである。アルとカモは目立たないように口を噤む。

大抵は遠巻きにひそひそと話し合っているだけだが、中には気になって話しかけてくる人も居る。

「よお、兄ちゃん達」

勿論、その人達は金に目が眩んだ命知らず、身の程知らずである。

「そいつはあ、何だ？」

「あ、これは金ですよ」

ネギがニコニコと答える。どこまでも正直に答えるネギを見て、二人は頭に手を当てて、呆れた。

明かに相手は盗賊といったような容貌だ。外見で差別するような趣味はないが、周りにゾロゾロと集まってきた男達も、同じような薄汚れた服を着て、腰にナイフなどを指しているのだ。これが盗賊や強盗でなければ他に何に見えるというのだろうか。

「ネギ、行くぞ」

エドが促し、アレンが続く。その後ろでネギが困惑している。その姿を見て、男の頭だろうか、スキンヘッドに一本傷の入った一際大きな男がドスの聞いた声で呼び止める。

「待ちな！」

「何だ、おい」

今度はエドがイラ付いた調子で振り向きもせず尋ねるふりをする。盗賊や強盗と遣り合ってきた経験のあるエドは既に次の言葉に予想が付いていた。

「その金置いていきな」

(やっぱりな…)

じゅるりと良く研がれているナイフを舐める。

余りに予想通りの答えにエドは呆れる。その遣り取りを見ていたアレンは、また深いため息を付いて、ネギは訳が分からないといった調子で慌てふためいている。

周りからは「おい、早く渡しちまえ」とか、「命が惜しくないのか!」と言った声が聞こえてくる。勿論、エドの力を使えば金など幾らでも錬成できる。

だが、エドのプライドは譲ることを許さなかった。

「黙って働け、おっさん」

「んな!」

額に青筋を浮かべるエドと盗賊団の首領。エドのあからさまな挑発に街道に行く人達は戦々恐々と行った調子で遠巻きに眺めている。

娯楽の少ない中世の街ではこういつた喧嘩が、市井の人の楽しみと  
なっていた事も多い。だが、明かに頭数が違う。オマケに片方はモ  
ヤシのような細い体の子供が三人だ。下手をすれば、殺されてしま  
う。娯楽だからこそ、流石に人死には見たくないのだ。

だが、一番小さな赤毛の男の子は杖を背負っている。これに金に  
目が眩んだ盗賊たちは、全くネギの存在に気が付いていなかった。  
本当ならメイジに喧嘩を売ったりは絶対にしない。

どれ程、鍛え上げた屈強な剣士や弓兵でも、魔法には敵わないか  
らだ。だからこそ、それがこの世界でメイジが増長する原因にもな  
っているのだが。

「おい、俺が優しい顔をしてる間に大人しく渡しな、モヤシにチビ  
」！

カチン、ブチッ

アレンとエドが口を鎖す。相変わらずネギは右へ左へあたふたし  
ている。色々と冒険してきたとはいえ、こんな状況にはどうにも慣  
れていないようである。

「へへ、ビビッて声も出ねーってか」

「誰が…」「誰が…」

「あ？」「ん？」「あーあ」

アルは手が在ったら呆れたかった。

エドは自分の身長をかなり気にしている。同世代と比べると低い  
その背に、かなりのコンプレックスがあるのだ。それを指摘され  
たら、どうなるか。

アレンも自分の薄い胸板やひよろつとした体格に不満を持って  
いた。体格の悩みは年頃の男女にとって最も触れては行けないポイン  
トなのだ。

「誰がミジンコ豆粒ドチビじゃー！」

「誰がモヤシカー！」

堪忍袋の緒が切れた二人が、周りを囲んできた屈強な男達を次々と討ち果たしていく。武器は使っていない。錬成術も使っていない。拳と蹴りだけで囲んでいた10人余りの意識を刈り取っていく。後に残ったのは、白目を向いて気絶する盗賊たちと、その中で仁王立ちする金色と銀色の髪を持つ対照的な格好の二人の少年。

「うっし、終わり」

「終わりました」

「……………」「強ええな、兄貴達……」

口が塞がらないのはネギもカモ周りの通行人も同じ。鬼神の如き強さで撃退した二人は、何も無かったかのように再び歩き出した。その後をネギは少しだけ大股で付いていった。

途中で目を付けた商店主らしい男性に、エドが詰め寄る。鬼神の如く暴れた金色の髪の少年がチンピラの如く目を光らせてやってくる。大の大人が泣きそうな顔になる。

「なあ、おっさん。銀行と、服屋、えと、あと飯屋どこ？」

「え、ぎ、銀行ですか……。あれですけど」

指を指した先には、インゴットを模した鉄の看板が掛けられた店が。どうやら、あそこが銀行らしい。呉服店はその隣に生地を模した看板が、飯屋は分かりやすくナイフとフォークの看板が掛かっていた。この世界は分かりやすく記号で店を表しているらしい。

ハルゲギニアは貴族と平民の世界。7人の元居た世界と違って、平民は文盲、文字の読み書きができないのが当たり前だ。このよう

な看板は分かりやすいようにと平民に向けた処置でもある。

カランカランとインゴット型の看板が掛かっていた店の戸を開ける。

中にはマントを羽織った貴族らしき男性と、その連れらしき女性が居た。音に反応して、戸のほうをちらりと見たが、直ぐに窓口の店員との会話に戻ってしまった。

「いらっしゃいませ」

受付嬢らしい女性が3人の格好をまじまじと見つめる。こう言った好奇の視線に曝されるのは、朝食の時にも感じていたし、今までと同じような調子だったので今更という感じでもある。格好としては杖を持つネギはメイジで、持っていない二人は平民と言う扱いだ。

「どんな御用で？」

若干、慇懃な感じで女性は尋ねる。

「コレ」

ここまで持ってきた金塊を指差して、商談に入る。勿論、店の中に居た人は啞然とした顔をしている。少年三人が自分たちでも見たことのないような量の金塊を運んできたのだ。呆然としないほうがおかしい。

「これを金に換えてくれ」

エドはふんと胸を張って依頼した。この時までは経済体制も単純に自分達と同じ紙幣と硬貨が流通しているのだと勝手に想像していた。勿論、管理通貨制度になれていたアレンやネギも同じである。

だが、

「え、えっとこれをお預かりしますので、金貨に換えましょうか？」

「「は？」」「「え？」」

マヌケな声を出したのは3人。分からないといった調子なのは受付嬢のお姉さん。

3人は全く知らなかったのだが、この世界には紙幣が存在していないのだ。管理通貨どころか兌換紙幣もないのである。未だに金貨や銀貨を持ち歩いて、取引しているのである。紙幣と言うのは、こういった硬貨の「重さ」から開放される為に作られたのだが、どうもまだ流通していないようだ。

これには流石に参ってしまった。

頭を掻いて、やれやれという調子で、エドが妥協する。

「じゃ、それで、金貨1000枚くらいで。まあ、持ちきれない分は、ここに預けるよ」

「お願いします」「お願いします」

「わ、分かりました…」

戸惑いながら、店の奥からスタッフを呼び、金塊を引取り店の奥へと引つ込む。

半刻程して皮袋と1枚の羊皮紙を持って戻ってきた。

「では、これがお金になります。エキュー金貨1000枚です」「どうも」

そう言って今度はアレンが前に進み、金貨を一枚一枚丁寧に、真剣にカウントする。十枚ずつ重ね、十の束を作る。金に取り付かれたような感じになっているが、エドは気にした風でもない。



それよりも、

「……………」

シヤナが気が付いたことに直面していた。そう、文字が読めないのである。こちらの3人も言葉が通じるものだから、文字も読めるモノだと勝手に思っていた。

「ネギ……」

慌てて後ろでワクワクと好奇心をフルで活用していたネギを呼ぶ。その只ならぬ様子に、ネギは幾分緊張して近寄った。

「どうしたんですか？」

「いや、文字が読めなくて……」

聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥。年下であるネギに聞くのは、ちよつと躊躇いがあったが、ここで無駄な意地を張ってもいい事はない。エドもプライドは高いが、張り方くらいは知っていた。

「えっと……」

羊皮紙を渡されたネギも混乱する。勿論、肩に乗ってそれを見ていたカモも頭を悩ませた。そこに並んだのは文法も文字も知らない記号の羅列。単語が一つも分からないのである。見たことすらない。

「…僕も読めません」

「マジで？」 「はい……」

「…しかたねえ。すみません、これ読み上げてもらえますか？あと何も書いてない紙も一枚」

受付嬢は怪訝そうな顔をしたが、折角の上客だ。見逃す手はない  
と思い、素直に要求に従った。お姉さんが読む文字をネギが書き取  
っていく。さらりさらりと、ネイティブらしい綺麗なアルファベッ  
トが綴られる。

「はい、大丈夫です。エドワードさん。その空欄に名前をお願い  
します」

「ん、了解。あ、俺の名前はエドワード・エルリックです」

そう言つと自分の名前をハルゲギニア風に変えた文字が書き込ま  
れた。これで自分の名前を意味するらしい。いつもとは違う見慣れ  
たはずの名前が、異世界に来たことをまざまざと教えてくれた。

「じゃ、服だな。生地買つぞ」

「はい」「ええ」

それだけ言つと三人は銀行を後にした。最後の最後まで先に入っ  
ていた貴族の夫婦と商談をしていた行員は開いた口が塞がらなかつ  
た。

「結構、美味しいな」

生地を買い終えた三人は飯屋に入っていた。適当に選んだ店には  
昼食時には少し早いのか、あんまり人が入っていない。カップでお  
茶を楽しみながら、軽食を頂く人ばかりだ。

早速注文しようとしたが、ここでも文字が読めないことが邪魔を

する。誰か適当な人を見つけて教授してもらわないと、生活が難しい。誰かの奴隷や召使で生きていくなら、文字の読み書きは不要だが、生憎とそんな都合は3人にも、学院に残った3人にも無かった。だが、注文は面倒だったので、アレンが、

「このページに乗ってる料理全部」

と注文してしまった。朝もかなり食べていたが、昼もやっぱり大量に食べるらしい。それなのに体はうしゅっとしている。どんな体をしているのか、単純にエドは興味が出てきた。

「どうしたの、兄さん？」

三人の座った机には騎士を模したデフォルメされた人形が二足歩行で立っていた。その騎士のぬいぐるみが立ったり喋ったりしているのだが、周りは気にしていない。

これは先に寄った服屋で買った生地を利用して作ったエド特製の人形である。この中にはコンを参考にしてアルの魂が入っている。喋る音声も癖もアルフォンス・エルリックのそれそのものである。総身を鎧で固めるのは目立つと思いい、自分の機械鎧に移したが、それも壊れたときのリスクが大きい。

エドの機械鎧が壊れたときに備えて分離させたのだ。勿論、自立たずに動くと言う理由のほうが大きなウエイトを占めているが。

「いや、アレンのあの細い体にどんな圧縮率で入っているのかと思つて…」

「そうだね。何で入るんだろう」

「びっくりです…」 「ま、エドの兄貴も、アルの兄貴も気にせず食べよつぜ」

カチャカチャと食器の擦れ合う音と共に食事を再開する。モグモグと口を動かすアレンを後目にエドとネギ、カモとアルは先刻の遣り取りを纏めている。

そんな時、

「あ、ごめんなさい…。少し席外します」

「どうしたんです、ネギ君」

食事の最中に席を立とうとしたネギを、デザートらしいアイスをほづばっていたアレンが引きとめた。

「・・・トイレです」

「あ、ごめん。行ってらっしゃい」

そう言うと再び、アレンは食事に戻る。ネギは荷物を置いてトイレに行った。

「ごちそうさまでした」

「ふう、美味かった」「僕は食べられないけどね」

数分ほどして食べ終わる。いざ、会計しようと思ったが、ネギがまだ帰ってきていない。随分と長いと思う。

「まさか、迷子になったんじゃない…」

「いやいや、それはねーだろ。ほら、あそこの席で…」

カモがゆっくりと視線を動かした先へ、三人も視線を沿わせる。その先にはパンツ一丁になっていたネギが泣きそうな顔で、カードゲームをしていた。

「.....」

「何やってんの...?」

僅か10歳のあられもない姿に同情と、呆れが緋交ぜになった視線を向ける。ネギの向かい側には瓶底眼鏡を掛け、タバコを銜えた男と、その取り巻きらしい二人の男がカードを握っていた。

その傍にはネギが着ていた服が綺麗に畳んで置いてある。どうも賭けをして、取られてしまったらしい。ネギみたいな真面目な性格の少年が進んでやるとは思えない。美味しい具合に騙されたのだろう。

「いや、その少年とね、カードで遊んでただけど、この子弱くてさ。」

ヘラヘラと笑っている眼鏡男にアレンはどこかデジャブを感じた。でも、明かに「彼」ではない。もし彼なら自分を見つけた瞬間に、話しかけてくるはずだ。

「ふう、仕方ないですね...」

ネギを押しつけ、アレンが椅子に座る。ずいっと持っていた皮袋を差し出し、ベットする。

皮袋は6枚用意してもらい、それを6等分した。その内の一つ、アレンの財布である。一護達の財布は服の生地を買ったために、少し他よりも軽い。

「これ、金貨が200枚入っています。これで彼の服を賭けてもらいますよ」

ニコリと天使の微笑みで勝負を申し込む。

これに男達は「カモが来た」と目で打ち合わせる。3対1の上に

イカサマを仕掛けていれば、まず自分達が負けることは無い。この金貨200枚も取れると。

「ルールは？」

慎重にアレンが確認を取る。男達の説明を聞いてしていると殆ど、ポーカーと変わらなかった。男達はニヤニヤしている。金貨200枚、平民がしばらく生活に困らないだけの金額だ。十分である。今日はこれを取って終わろう。そう思っていた。

だが、

「コール」

ニコニコとアレンが自分の手札を公開する。その手役に男達は啞然とする。吸い込むことを忘れたタバコの煙が自然に流れ、灰がポトリと落ちる。

「また、僕の勝ちですね」

「だああ、ちくしょー！」

男達の姿は既に下着だけ。最初に2勝したと思ったら、そこからこの白髪頭の少年に全敗。その結果が三人揃ってパンツ一丁と言う情けない姿だ。勝ち続けていることに服を取り返して貰ったネギは、興味深そうな顔で覗き込んでいる。

その様子を怪訝そうに見ていたカモが、こそこそと尋ねる。

「アレンの兄貴、やたら強くねーか。何でそんな…」

「だって、イカサマしてますもん」

カモの疑問に一片の悔いも、迷いも無く答える。

「本気かよ！ばれたらどうなるか…」

「大丈夫ですよ。先に仕掛けてきたのはあっちですから」

「いや、だからって…」

カモの心配に、アレンは続ける。

「修行時代に師匠の借金を返すために、必死で業を磨きましたから…」

ちよつと暗く、それよりも黒い顔をして、

「ちよつとやそつとじゃバレませんよ」

ニタアと嫌な笑顔を浮かべる。その笑顔に気が付いているのは、後ろでアレンから発せられる嫌な空気を感じ取っていたエドとアルだけだった。

「博打なんて勝ってナンボ！さあ、搾り取ってやりますよ！フハハハハ！」

「兄貴…、黒いぜ・・・」

そうしている間に会計を終わらせる。

アレンの食べた量がかなり響いたが、十分すぎるくらいの余りが出来た。

店を出ようとした時に、優しくアレンは服を返した。正確には服と最低限のお金を返した。筆取りするが、結局、博打では冷酷になりきれないのがアレンの長所であり、欠点でもあった。

「ま、服無いと外歩けないでしょう？それにココの会計も必要です

し」

「ふ、すまねえな…。兄ちゃん」

そういつて瓶底眼鏡の男は服を着なおし、新しいタバコを銜えた。ふつつと白い煙を吐いて、一息つく。

「せめて、名前をおしえてくれねえか？」

「僕ですか、アレンです」

「そうか、覚えておくれ。俺はアーネストだ」

「はい。では、また」

さつきとは違い真っ白な笑顔を三人の男に向けて、アレンは店を後にした。

先に出て、店の先に待っていた二人と合流する。

帰りは杖で飛ぶ必要はない。道から少し外れた所にセットしておいた箱舟を使えば、あっと言う間に魔法学院まで帰ってこれる。ネギは飛べる機会が無くなって少し残念そうだったが。



## Magic World days (後書き)

3人のハルゲギニアの街の探訪でした。

よくよく読み返してみると、金貨や銀貨は出てきても、紙幣というのがハルゲギニアには出てきていないんですよ。

本来は紙幣と言うのは金や銀を持つよりも、紙を持つほうが軽くて良いという理由なのですが、羊皮紙を使っている、製紙技術のないハルゲギニアでは無理そうですね。こちらの世界では兌換紙幣というのも、製紙というのも中国で生まれたものです。製紙技術は後漢時代に、兌換紙幣は銀鉞山を大量に保有していたモンゴル帝国で、紙幣と言うのが生まれたのが12世紀ですから、貴金属硬貨で流通をやっているハルゲギニアの経済システムというのは、12世紀よりも下という事でしょうか。欧州諸国にはモンゴルの西征と伴に伝播していったから。若しかしたら、エルフがイスラーム諸国だとすると、その向こうの東方には中華・日系の人間が居るのかも知れません。

中世から近代に掛けて識字率が殆ど100%に近かった日本では発達しなかったのですが、40%程度しかなかったロンドンやパリでは、文字や絵で店や中身を伝えると言うことをしていました。これが鉄細工の発達を促しました。同時に文字が読めない、書けないという事がどれだけ怖ろしいのか。それが分かったと思います。会話だけで人間は繋がっていない。書面に書かれた事も伝える文章なのです。

今回はシエスタの登場とギーシュとの戦闘ですね。

才人は未だしも他の3人では相手にすら、なりそうにないのですが。

CRASH

「腹、減った…」

トリスタニアの飯屋でアレンがイカサマで金を巻き上げていた頃。  
才人は腹を減らしていた。

「ちくしょー、ルイズの奴・・・、俺の飯、食わなくても良いだろ・・・」

朝と同じように飯を抜かれた一護達三人は再び、ルイズ達の昼食を強奪。そして、そのまま逃走。生きることには食えることである彼らにとつて、至極当然のように振る舞っている彼らを見て、ルイズはまた腹を立てた。純銀のプレートの上に乗った豪華な奪い返そうと三人に襲い掛かるが、軽業師のように必殺の蹴りは避けられていた。

オマケに食べるモノが無くなった彼女は、才人の粗末な食事を強奪。

そのときの台詞が「使い魔のものは、主人のものよ」だ。  
たった一人で、ルイズの爆発させた教室の後片付けをやらされた彼に、食事抜きは辛い。それでなくても食べ盛りである彼にとつて、朝に食べた欠片程度の肉のスープと堅いパン二枚ではカロリーが足りなさ過ぎる。既に限界だった。

「腹、減った…」

とうとう才人は腹を抱えて、壁に手をついた。

「どうなさいました？」

鈴の鳴るような声に振り向くと、大きい銀のトレイを持ち、メイドの格好をした素朴な感じの少女が心配そうに才人を見つめている。カチューシャがとても似合っていて、纏めた黒髪とそばかすがマツチしていた。だが、今現在、絶賛空腹に困っている才人に、そんなことを考えている余裕などなかった。

「いや、食事抜かれて……………」

「大丈夫ですか？」

「いや、大丈夫じゃないかな。お腹と背中がくっつきそうだ」

「まあ大変！わかりました。どうぞこちらにいらしてくださいな」

彼女は才人の手を取って連れて歩き出した。

才人が連れていかれたのは、食堂の裏にある厨房だった。

大きな鍋には火が入られ、オーブンがいくつも並んでいて、コックたちが汗を流しながら、忙しそうに料理を作っている。

「ちょっと待つててくださいね」

才人を厨房の片隅に置かれた椅子に座らせると、彼女は小走りですぐ厨房の奥に消えた。

そして、お皿を抱えて戻ってきた。皿の中には、温かいシチューが入っていた。

「貴族の方々にお出しする料理の余りモノで作ったシチューですよ。よかったら食べてください」

「ほんとか！！！？」

シエスタの言葉に才人は目を輝かせた。

「ええ。賄い食ですけど………」  
「助かった！ほんとにありがとう！」

そう言っただけでガツガツとシチューをおいしいおいしいと食い始めた。あの一度しか食べられなかったとは言え、犬のエサのスープとは天と地の差で断然こちらのシチューがおいしい。ハマるかも。空腹に困っていた才人はあつと言う間に平らげてしまった。しかし、これだけではまだ足りない。

「おいしい！これ、おかわりあるかな？」  
「ふふ、そんな急がなくても大丈夫ですよ。はい。まあ、お代わりもありますから。ごゆっくり」

才人が夢中になっただけで周りの事を忘れてまでシチューをバクバクと食べた。

そばで見ていたメイドの少女も才人の食いつぶりに驚いていたが、ニコニコしながらそんな才人の様子を見つめていた。  
そこで、彼女が口を開いた。

「あなた、お名前は？」  
「才人。平賀才人」  
「変わったお名前ですね……」

単純にこの世界では発音できない音だったので、不思議だと言う顔を。小さく頭を振って、もう一度、笑顔に戻って、

「じゃあ才人さん。私はシエスタっていいいます」  
「ああ、よろしく！」

「あれ？才人さん、あなた、もしかしてミス・ヴァリエールの使い

魔になっただって……」

シエスタは左手に描かれたルーンに気づいたらしい。

「知ってるの？」

「ええ。なんでも、召喚の魔法で7人も平民を呼んでしまったって」

彼女は純粹に興味津津というような顔で聞いてくる。  
どの世界でも女性は噂が好きらしい。

「噂になってますよ。あなたもそうなんでしょう？」

シエスタはニツコリと笑った。

この世界に来て初めてみた屈託のない笑顔で。

「シエスタも魔法が使えるの？」

「いえ、私は違います。あなたと同じ平民です」

首を左右に振る。

「貴族の方々をお世話するために、ここでご奉公させていただいて  
るんです」

「ふん」

才人は再びシチューを頼張り始めた。

「ご飯、貰えなかったんですか？」

「ああ、他の使い魔にルイズが飯を取られてさ、それからお冠」

「やれやれといった調子で首を才人は竦める。」

「昨日の犬のエサしか食べてないんだ」

「その使い魔さんも凄いですね。貴族の食事を取ってしまったなんて」  
「ホントだよ、そのせいで俺の飯がなくなっただから!」

才人は積み重なった空の皿の上に、もう一枚乱暴に皿を重ねた。

あのオレンジ頭の青年のニヤ付いた顔を思い出すと、イラっとしてきた。

「普段じゃ絶対に食えない料理だった!おいしかった!ありがとう!」

「よかった。お腹が空いたら、いつでも来てくださいね」

尚も屈託無くシエスタは笑う。

「私たちが食べているものでよかったですから」

その言葉に才人は再び目を輝かせる。

このままでは確実にカロリー不足で死んでしまう。ちゃんとした食事が出てくる、食べられる場所があるというのは、この上なく大事なことだ。

「ほんと!?!」

「ええ。いいですよ」

「やった!!!」

ここは一護達には教えられない。教えてしまえば、ルイズに知られてしまう。あの犬のエサで使い魔の食事は十分と、才人からすれば、人でなしのような、だが、本人にとっては至極当然の考えで動いている彼女が知れば、何があるか分からない。尤も、そんな考え

で動いているから一護もアレンも反発しているのだが。

「お礼として、私に何か手伝わせてくれないか」

恩を受けたら、返すのが道理。ここで彼女の事を無視できるほどに、才人は人間は腐っていなかった。彼の申し出にシエスタも素直にお願いする。

「なら、デザートを運ぶのを手伝ってくださいな」

シエスタは微笑んで言った。

「任せてくれ」

才人は胸を張って言った。

大きな銀のトレイに、デザートのカッキーが並んでいる。

食堂の端でのんびりと食後の紅茶を飲む一護達があちよこちよこと走りながらケーキを配るメイド達を見るでもなく見ていた。ちなみに一護は珈琲派だ。だが、この世界にはコーヒー豆がなく、珈琲が淹れられない。淹れられたとしても、味覚が子供なシャナは飲めないのだが。

傍には体力を使い果たしてしまつたらしい、ルイズが倒れ付している。結局、食事は全て三人の胃袋へと消え去ってしまった。

「メイドね。俺、始めて見たわ」

「結構、可愛いよね」

それを横で聞いたシャナが割って入る。

「ヴィルヘルミナに比べたら、あの程度普通」

「メイドの事、普通ってお前、案外、いい所のお嬢ちゃんなの？」

ヴィルヘルミナ、詳しいことは知らないが彼女のメイドらしい。

あくまでも一般家庭にいた一護と夏梨にとつてメイドなどという存在は、精々童話か作り物の中にしかない。現物を見るのは初めてだ。それを普通などと言ってしまうのだから、一護の疑問は当然と言えた。

「いや、そういう訳ではない。ただ、この子の育ての親というだけだ」

重く遠雷のような声が解説を始める。昨日から身の上話などを聞いていたが、この魔神は随分と身内に甘い性格をしているらしい。シヤナの事もだが、知り合いの話をするときはやたらと饒舌になるのだ。

「この子を育てるときに最も適していた服が、あの服であったと言っただけの事。他意はない」

「いや、他意ありまくりだろ。何、そのヴィル…さんはそういう趣味？」

最後まで名前を覚えきれていない一護が最後の方を濁しながら聞く。

「ヴィルヘルミナ・カルメル。『万条の仕手』と呼ばれる戦記無双の使い手だ」

「うわ、逢ってみたい！」

メイドに反応したのか、アラストールの解説に反応したのか、夏



梨が目を輝かせる。

「にしても…」

そこで一護はメイドに混じって、ケーキを配っている青いパーカの良く目立つ少年に目を留めた。

そんなに息を吸わずに、思いつき呼び寄せる。

「おい、才人！」

「……………」

まあ、無視される。それも当然と考えていたので、自分でこつちまで連れて来た。

「え、え？」

テーブルの中ごろに居たのに、ちょっと瞬きをしたら、壁の側にやってきていた。突然の出来事に才人は頭が回っていない。トレイも落としていないし、ケーキの数も減っていない。

「何やってんだ、お前？」

「…いや、シエスタにご飯食わせてもらったんで…」

怪訝そうな顔で才人に尋ねるが、どうにも返事に要領を得ない。

「シエスタって誰？」

倒れ付していたルイズが顔だけ上げて尋ねる。

埃塗れて、汗でべとべとだが、どの道洗うのは才人の役目になるのだろう。

「シエスタはメイドさ。呼んで来るよ」

と言つて才人はシエスタを呼びに行つた。才人がいなくなり、一護達は何の気なく辺りを見回した。

夏梨は二年生のテールブルの中ごろに金色の巻き毛に、フリルのついたシャツを着た、いかにもキザなメイジがいた。薔薇をシャツのポケットに挿している。

(うわ、あんなん遊子の読む少女漫画だけかと思つた)

まさにファンタジー。あんな幻想の中にしかないような人間が本当にいるなんて思つていなかった。でも、乙女思考丸出しの姉でもあんな奴は好きにならないだろう。とういうか、好きになったら兄と自分がタコ殴りにしかねない。その自信があつた。

「なあ、ギーシュ！お前、今は誰とつきあっているんだよ！」

「誰が恋人なんだ？ギーシュ！」

取り巻きの二人がニヤニヤと笑つてそのメイジに尋ねる。

どうやらあの、キザなメイジはギーシュというらしい。

彼はすつと唇の前に指を立てた。

「つきあう？僕にそのような特定の女性はいないのだ」

そこで言葉を切つて、額に手を当てる。気障な仕草に、気障な台詞。シヤナはまるで天然記念物でも見たかのように目を爛々と輝かせているが、一護と夏梨は正直、イラつときていた。理由はない。

「薔薇は多くの人を楽しませるために咲くのだからね」

夏梨の持っていたカップの取っ手ががベキッ！と音を立て、物凄  
い力で折れた。

カップ部分が落っこちて派手な音を立てて粉と化す。

「一兄。ちよつとあの人、殴つてきていい？」

口をひくつかせながら刀を握りしめた夏梨を一護は慌てて止める。

「止せ、夏梨」

すつと夏梨の刀の柄に手を当てて制する。

むすつとむくれたが、学校の中で人死には不味い。素直に手を離  
し、従う。

そのとき、ギーシュとかいうメイジのポケットから何かが落ちた。  
これでも3人とも目はいい。オマケにそれに才人が、目を留めた。  
ちよつと才人と連れているメイドの女の子、彼女がシエスタだろ  
うと、適当に当たりを付けて、成り行きを見ていた。

才人は最初、ガラスでできた小瓶を不思議そうに見ていた。中に  
紫色の液体が揺れている。こんな場所にある位だから、毒ではない  
だろう。

それを才人が拾い上げ、本人が出来る範囲で丁寧な、

「おい、落としたぞ」

と言ってテーブルの上に置いた。

金髪の気障な少年は、ちらりと才人の方を見たが、それだけだっ  
た。

(む、丁寧さが足りなかったか？)

この2日間で随分と貴族と言うものに慣れてきた才人は、今度はもっと丁寧に、

「落とされましたよ、貴族様」

自分でも吐き気がするほど丁寧な口調で喋った才人。

しかし、ギーシュは苦々しげに、才人を見つめると、その小瓶を押しやった。

その行動に才人は首を傾げる。

「これは僕のじゃない。君は何を言っているんだね？」

「どうみても、貴方から落ちましたよ」

その小瓶の出所に気づいたギーシュの友人たちが、大声で騒ぎ始めた。

「おお？その小瓶は、もしや、モンモランシーの香水じゃないの？」

「そうだ！その鮮やかな紫色は、モンモランシーが自分のためだけに調合している香水だぞ！」

「そいつが、ギーシュ、お前のポケットから落ちてきたってことは……」

友人達が声を揃えて言う。

「つまりお前は今、モンモランシーとつきあっている。そうだな？」

友人三人の圧力に押されながらも、

「違う。いいかい？彼女の名誉のために言っておくが……………」

ギーシュが何か言いかけた。そのとき、後ろのテーブルに座っていた茶色のマントの少女が立ち上がり、ギーシュの席に向かって、コツコツ歩いてきた。少し、気分が沈んだような感じの歩き方だ。栗色の髪をした、なかなかの美少女だった。茶色のマントを付けているから、一年生だろうか。

「ギーシュさま……………」

そして、ボロボロと泣き始める。

「やはり、ミス・モンモランシーと……………」

「彼らは誤解しているんだ。ケティ。いいかい？僕の心の中に住んでいるのは、君だけ……………」

バチンッ！

ギーシュが言い終わるときに、ケティと呼ばれた少女は、思いつきりギーシュの頬をひっぱたいた。

「その香水があなたのポケットから出てきたのが、何よりの証拠ですわ！さようなら！」

そう言って走り去っていくケティ。その後ろ姿を見つめながらギーシュは、頬をさすった。

すると、遠くの席から一人の見事な巻き毛の女の子が立ち上がった。

かつかつと歩き方や表情に怒りが含まれているようである。そしてギーシュの席までやってきた。

「モンモランシー。誤解だ」

ギーシュがあたふたと手を振って弁明する。浮気がばれた時の男のみつともなさと言ったら半端ない。シャナは少し、自分が大好きな男の子と、その彼を取り合っている栗毛の女の子の顔を思い出していた。ギーシュとは全く性格も、外見も違うが、二人の女の子の間で揺れているという所に引っ掛かったらしい。

体中から怒りのオーラを出している。一番驚いたのは一護だ。

「彼女とはただ一緒に、ラ・ロシエールの森へ遠乗りをしただ……

……」

「やっぱり、あの一年生に、手を出していたのね？」

「お願いだよ。『香水』のモンモランシー」

ギーシュが幾ら話そうとしても、金の巻き毛の少女、モンモランシーといったか、彼女は一言たりとも耳に入れていない。多分、浮気がバレた時の妻や彼女というのはああいうのが正しい反応だろう。

（なるほど、女ってのはやっぱり怖えな……）

「咲き誇る薔薇のような顔を、そのような怒りで歪ませないでくれよ」

一護がぼんやりとそんな事を考えている間にも、必死の抵抗は続いている。しかし、それは最早圧倒的な戦力差で挑む戦争に等しい。勿論、劣勢なのはギーシュの方。

勝負は見えていた。

「僕まで悲しくなるじゃないか！」

（そのバラのような顔を歪ませたのは誰よ）

シヤナはムカムカと苛立っていた。

モンモランシーは、テーブルに置かれた高そうなワインの瓶を掴むと、中身をどぼどぼとギーシュの頭の上からかけた。ワインの良い芳醇な香りが辺りに漂う。

そして、モンモランシーはワインをかけ終わると、「うそつき！」と怒鳴って走り去っていった。

辺り一带にシーンとした空気が流れる。今の速すぎる状況の推移に誰も頭が付いていっていないのだ。ギーシュはハンカチを取り出すと、ゆっくりと顔を拭く。

そして、やれやれといった感じの芝居がかった仕草でこう言った。

「あのレディたちは薔薇の存在の意味を理解していないようだ」

この台詞には一護も呆れてしまった。夏梨はとっくの昔に諦めている。シヤナの怒りのビートは既に臨界点を記録しそうな位に膨れ上がっていた。

「一護、あいつ、殴っていい？」

「…お前もかい。だから、ダメだったの」

騒動は済んだとばかりに判断した才人は一護のもとへ、シエスタと一緒に再び歩き出す。

「待ちたまえ」

そこでギーシュが才人を呼びとめた。

「なんだよ…？」

モンモランシーが掛けたワインの赤い液体をハンカチで拭きなが

らギーシュが。

「君が軽率に、香水の瓶なんかを拾い上げたおかげで、二人のレディの名誉が傷ついた。どうしてくれるんだね？」

「何言つてんだ。悪いのは、二股してるお前だろ」

才人の正論にギーシュの友人たちが、どつと笑った。

「そのとおりだギーシュ！お前が悪い！」

「バレる二股なんか、最初から無理だろ」

ギーシュの顔に、さつと赤みが差した。

そこで、一護と夏梨とシヤナがそれぞれの感情と伴に来た。

才人が気づいたような声をあげる。

「あ、一護さん」

「おい、何事だよ？」

一護は今の状況を見て才人に尋ねる。尤も一部始終を見ていたので、随分と白々しい言い方だが、面倒事に首を突っ込みたくないの  
で、今まさに来ましたという空気を醸し出す。

「いいかい？メイド君。僕は君が香水の瓶をテーブルに置いたとき、  
知らないフリをしたじゃないか」

二人の女の子から振られたショックから立ち直つたらしいギーシ  
ユがやれやれと言つた調子で首を竦める。

「話を合わせるぐらいの機転があつてもいいだろっ？」



反論とばかりに才人がギーシュに言う。

「どつちにしろ、二股なんかそのうちバレるっつの」

「ふん……。ああ、君は………」

ギーシュは、才人たちを見ると、バカにしたように鼻を鳴らした。

「確か、君たちは、あのゼロのルイズが呼び出した平民だったな」

それなら納得と言った様子で、言葉を続ける。

「平民に貴族の機転を期待した僕が間違っていた。行きたまえ」

その言葉に四人はカチンときた。シャナが出来るだけ無表情を保ちながら言った。胸に掛かっているアラストールと一番傍に居る一護は気が付いていたが、今にも噴火しそうな火山のような調子であるのは間違いない。それに余計な刺激を加えたらどんな事になるか、昨日のフレームヘイズの力を見ていた一護はどうやって止め様か考えていた。

「お前みたいなのが、貴族なんて度が知れるわね」

今度はギーシュがカチンと来た。見たことのない服だが、マントを付けていないし、杖も持っていない。ならば相手は平民である。多少、灸を据えてやるのも良いかもしれない。

「君はどうやら貴族に対する礼儀を知らないようだな。ならば決闘だ！」

ギーシュはそう言って立ち上がった。

そして杖を構える。

「上等だ！」

才人は言い放った。ギーシュは、くるりと体を翻して言う。

「ヴェストリの広場で待っている。用が終わったら、来たまえ」

ギーシュの友人たちが、わくわくした顔で立ち上がり、ギーシュの後を追った。

シエスタが、ぶるぶる震えながら、才人達を見つめている。

「あ、あなたたち、殺されちゃう……………」

「ん？どうして？」

夏梨が尋ねた。

「貴族を本気で怒らせたら……………」

そう言っつてシエスタは、だーと走って逃げてしまった。

「なんなんだよ」

と才人は呟いた。見た感じ、後ろに控えている一護と違って筋骨隆々といった感じではない。刀どころかフォークとナイフを持ったら、それで終わりという位に細い体だ。正直、アレンよりも細い体をしている。

（大丈夫だろ、あんな奴に負けるわけが無い）

そこで、後ろからルイズが駆け寄ってきた。

「あなたたち！何してんのよ！見てたわよ！」

「あ、居たんだ。えーと、ルブラン」

まだ一護は名前を間違えている。勿論、これは彼の精一杯の嫌味を込めた嫌がらせだ。

「一兄、いい加減名前覚えないと。ルイズ・ヴァリエールだよ」  
「うん」

中の名前をすっぱり取った名前で呼ぶ夏梨と同意するシヤナ。

「分かってるよ、嫌がらせに決まってるんだろ」

しれっと悪びれもせず言う一護。

その態度にやっぱルイズは怒りたかったが、今はそんな事に怒っている場合ではない。

「なに勝手に決闘なんか約束してんのよ！」

「だって、あいつが、あんまりにもムカつくから……………」

才人はバツが悪そうに言った。

彼の言葉は本音である。いきなり見ず知らずの異世界に連れてこられて、使い魔になれと言われた。オマケに扱いは教科書で見たような奴隷以下の扱い。食事も碌なモノを出してもらっていないし、寝床は冷たく堅い石の上。これに納得できるほど、才人の度量は大きくなかった。凡そ、一般人と同じだけの感性を持つ、彼にとってそれは当然だった。

ルイズはため息をついて、やれやれと肩をすくめた。

「謝っちゃいなさいよ」

「は？なんで？」

「怪我したくなかったら、謝ってきなさい。今なら許してくれるかもしれないわ」

ルイズの言葉は才人には訳が分からなかった。

もう少し、彼が賢ければ、賢くなくても彼の世界の中世欧州の知識があれば、何故シエスタが逃げ去ったのか。そういった理由が分かったのだろつが、生憎とどちらも彼には欠けていた。

逆に、そういった知識が豊富な一護とシヤナは気が付いていた。

尤も気が付いたところで、彼らの力は貴族とは比べ物にならない。精一杯の悪意を持つてすれば、この世界を滅ぼすことなど造作もないだろつ。そんな気は微塵も無いのでしないが。

「まず、誰からやる？」

ルイズの言葉を見捨て、才人が後ろにいた一護達に尋ねる。

「俺は断わる」

きつぱりと一護は断わった。

大きな刀を背負って、筋骨隆々としたまさに武人と言う格好だが、その明かに情けない姿に、才人は腑抜けだと思っただが、口には出さない。

「二人と一緒に頑張ってくれ。シヤナも夏梨も随分とアイツに怒っているみたいだからな」

「はい」「いいわよ」

「ちよつと聞いてんの？」

とりあえず、ルイズの言葉は無視。

「ヴェストリの広場ってどこだ？」

近くにいたメイドに聞き、才人は歩き出した。

突然、異世界に連れてこられて使い魔にされた。その憂さ晴らしも彼の頭にはあった。

そのあとにシャナと夏梨が続く。

彼女達二人の頭には、二股を掛けたギーシュ♀女の敵という思考が回っていた。

「ああもう！ほんとに！使い魔のくせに勝手なことばかりするんだから！」

ルイズは、才人と夏梨、シャナの後を追いかけた。

## CRASH（後書き）

中世というのは領主制で非常に貴族というのが権力を持っていた。貴族と商人は貴族と商人の為にしか動かない。農民が飢えようが、死のうがどうでも良いという態度でした。貴族優勢で逆らえば、殺される。どんなに悪法を行っても、読み書きが出来なくては理解できない。平民の貴族に対する畏怖というのはそれだけ凄まじいものでした。シエスタの態度も至極当然と言えます。そんな貴族体制を革命と言う形で一番最初に打倒したのが、イギリスの清教徒革命でした。この革命軍の総司令官がイギリス国教司教だったオリヴァー・クロムウェルです。尤も彼も名誉革命で打破されるのですが。革命者が革命によって終われるというのは何とも皮肉な話です。

シヤナの男性に対する考えはやっぱり千草に由来するものだと思います。どこまでも一途に好きになった人を追いかける。これからもシヤナが一護を始め、4人に心を動かされることは無いと思います。懐きはしますが、アラストールやシロ、ヴィルヘルミナに対する態度と同じような調子です。その為、正直ネギとの仮契約もしないでおこうかと思っています。

さて、ギーシュとの戦闘ですか。

彼、死んじゃうんじやないだろうか…

## CRASH 2 [The little pride]

トリスティン魔法学院は魔法を教えるとはいえ、学校である。

つまりは資料室、どこの学校にでもある図書館と言つものが存在していた。場所は学院本塔の2階から5階までを貫いて造られた、吹き抜けのような構造をしている。

その光も届かない図書館の奥の奥、教員しか閲覧を許されていない、「フェニアのライブラリー」で今年度の2年生の「使い魔召喚儀式」の担当であった、ジャン・コルベールはあることを調べていた。

今年でトリスティン魔法学院に奉職して、実に30年近く。

色々苦勞があつたのか、頭と深く刻まれた顔の彫に、その苦勞の跡が窺える。それなりに実力を持つメイジではあるが、確りした後盾のない下級も下級の貴族である彼には、この国の最上級とも言える貴族の子弟が集まる事はストレスの原因にもなっていた。

本来であれば、教育と政治は切り離すべきなのであるが、そういったことが上手くいっていないというのが、この国の現状だった。

「この本にも無いか…」

ふよふよと「レビテーション」で宙に浮いて、目的の一節があるだろう本を探す。

手元を取った本には、また無かった。力なく閉じ、また新たな本を引っ張り出す。

そんな彼が目下、一番興味があるのは、ミス・ヴェリエールの使い魔の青年達、そして刻まれたルーンである。コルベールは彼らがどうしても気になり書物を読み漁っているのだ。

「さて、この本はあるかな…」

使い魔に刻まれるルーンについては、一定の規則と云うか、法則が存在する。

魔法使いの属性による幻獣が生まれ、そして魔法使いの徳性によるルーンが刻まれる。つまり、メイジの属性が「火」なら「火」に属する幻獣が召喚される。「微熱」のキュルケがサラマンダーを召喚したのは、この法則に則っている。刻まれたルーンも、彼女の徳性である「愛（caritas）」であった。

だが、ルイズの召喚した使い魔達は4属性のどれにも当てはまらない。

そして、本来なら彼女の徳性が刻まれるはずのルーンも7つの徳性のどれでもないものだった。

イレギュラー中のイレギュラー。周りの生徒達は平民と笑っていたが、何事にも付きまとう例外というのは、得てして問題を引き起こす。そういつた事を理解している、彼はそういつた意味ではメイジとしては珍しい学者と言われる存在だったのであった。

そんな彼は漸く、目的の本を見つけ出した。

「これは・・・」

ある書物に目を通すとコルベールの顔色が変わった。

彼はそのまま本を抱えたまま図書館から出ていった。

その図書館の上、本塔の最上階である7階にある学院長室にはトリスティン魔法学院の学院長オールド・オスマンが書類仕事に勤んでいるふりをしていた。

振りと言つのは、

「オールド・オスマン」

「なんじゃね、ミス・ロングビル？」



サワサワと秘書であるミス・ロングビルの尻を触っているからである。わざわざ、自分の近くに呼び寄せておいて、質問があるからと言っから来てみれば、堂々のセクハラである。

「質問は何ですか？」

「ほほ」

すつとボケる。

この白髪に床まで届くような長い白髪の老人は、国内でも屈指のメイジでありながら、こういったお茶目な点も持っていた。尤もお茶目で済まされない事も多く、

「いい加減にしてください！」

ミス・ロングビルに一喝される。これならまだ序の口だ。

それに対するオスマンの対策もしっかり用意されていて、今度は耳の遠いふりだ。

「ん〜、最近、耳が遠くての」

「……」

ロングビルの方はイライラとしながら、自分の机に戻った。戻った瞬間に足元から、小さな白い鼠がテテツとオスマンの方へ、机の脚の林を駆け抜けていった。

「おう、よしよし。モートソグニルや。ナッツをやるうの」

鼠に話しかける姿は傍から見れば、完全にボケてしまった老人の姿である。縁側でお茶でも啜りながら、日向ぼっこでもしているの

がお似合いの姿だ。

「じゃが、その前に戦果報告じゃ」

ぼそぼそと白いネズミに語りかける。

「そうか、ミス・ロングビルは白か。じゃが、ワシは黒の方が似合うとおもっくんじゃがの…」

「オールド・オスマン」

静かに怒ったのはロングビルだ。つかつかと近寄って、ドカッと一発脛にかます。弁慶の泣き所、ここを攻撃されては流石に歴戦の魔法使いでも痛い。

「何を、するのかね…」

痛む脛をさすりながら、涙目でオスマンはさも意味が分からないといった調子で聞く。

「理由なら、腐るほど思い当たるはずですが？」

「い、いた、痛いから！ちょっと辞めてくれんかの？」

ゲシゲシと脛を蹴り続ける。脛なのはセクハラをかまして来る上司への彼女のせめてもの慈悲だ。仮にも学院長であるのだから、人前に出ることは多い。それをボコボコにしては、学院の評判が下がってしまう。本当なら、髪を切り取って青あざだらけにしたかったのだが、流石に理性が咎めた。

「オールド・オスマン！」

ノックも何もなく、扉を蹴破るように突然入ってきたのは先ほどのコルベールである。

いつの間にか2人とも何事も無いように机について、普段のように振舞っているのはさすがだ。

「たた、大変です」

「大変なことなどあるものか、すべては小事だ。えっと、ミスタ…、誰だっけ？」

「コルベールです！お忘れですか！」

うっかり度忘れたオスマン。

「ミスタ・コルベール。君は何かに付けて大騒ぎするが、今まで大事であったことなぞないぞ」

ポリポリと頭を掻いて、机の引き出しから水キセルを取り出し、銜えた。

その姿にミス・ロングビルが咎めるような、鋭い視線を向けたが、オスマンは意に介さない。

「大騒ぎするくらいなら、授業料を徴収する方法を考えんかね。君らの給料も危ういのじゃぞ」

しれっと重大な事を言い始める。

だが、コルベールの持ってきた話は彼にとっては、生活の掛かった給料よりも重大な問題らしく、

「兎に角、これを見てください！」

バンと今までに無い位の勢いで、コルベールはオスマンに『始祖

ブリミルの使い魔たち』と書かれた書物を先に見せる。それは古ぼけて、今にもページが外れそうな位に痛んでいた。殆ど死蔵に近い形で乱雑に置かれていた本の塊からコルベールが取り出してきたのだ。

「『始祖ブリミルの使い魔たち』か。随分と古い本を持ってきたのよ。で、これがどうしたのじゃ？」

まだオスマンは話が分からないといった調子だ。

次にコルベールは「使い魔召喚儀式」の時に現れた7人。ルイズの召喚した使い魔の手に現われたルーンのスケッチを見せた。

それを見たオスマンの眼光は鋭くなり、秘書のロングビルに退出を促す。

「ミス。ロングビル。すまんがちと、席を外してくれんかね？」

そう言われたロングビルは素直に従う。彼女もそれなりに社会を知っている。自分が絶対に聞いてはいけないこともあるし、トリステイン政府からの圧力を受ける学院の長にでもなれば、機密情報を扱うことも多い。カツカツと足音を鳴らして、扉から出て行く。最後に礼を忘れないのは秘書の礼儀だ。

その礼が終わわり、扉がしっかり閉まったことを確認すると、オスマンはコルベールに向き直った。

「詳しく説明するんじゃ、ミスタ・コルベール」

ヴェストリ広場、そこは『火』と『風』の塔の間にある中庭である。普段、朝の短い時間にしか日も差さないことから人の行き来も

少なく、教師の目も届いていないことが多い。つまりは悪巧み、凡そ校則違反になるような事をする時には、うってつけの場所なのである。

この学校においては、決闘には最適の場所である。そんな場所で、一護は酷く後悔していた。

(まずった…。ここが決闘の場所になるとは…)

朝、軽くアレンと手合わせしたときには知らなかったが、鍛錬をしたこの場所がヴェストリ広場らしい。ここにはアレンの箱舟を設置している。

つまりは今この場にいない、3人がここから帰ってくる可能性がある。そうなれば、何も無い空間から人が現れたと大騒ぎになる。正直、自分たちの力をよっぽどのことが無い限り秘匿しておきたい6人として、非常に不味い状況になってしまった。

最初はギーシュが心配だなと思って付いてきたし、才人の通したい意地の為に譲ったが、こうなってしまうては、自分が出てさっさと片付けてしまった方が良かったかもしれない。

(何で断わったんだー、おれー！)

どこから噂を聞きつけたのかすでに広場は野次馬でいっぱいになっている。

この野次馬を抜けて、箱舟にたどり着くのは流石の死神にも至難の業だ。街に行ってしまった3人に連絡を取る手段が無い以上、ここから出てこないことを祈るしかなかった。

「諸君！決闘だ」

ギーシュは気障ったらしくバラの造花を掲げている。

ワアアツと周りからは歓声が巻き起こる。

普段から娯楽の少ないトリスティン魔法学院の生徒にとって決闘はある意味最大のシヨウかもしれない。昔の貴族は、わざわざ決闘をさせて賭け事に興じていたらしいから、徹底している。

「ギーシュが決闘するぞ、相手はルイズの平民だ」

才人は自分が見世物にされてるようで、やれやれと頭を搔く。後ろにいる黒い髪の女の子二人は、さつきから一言も喋っていない。じつと目の前にいるギーシュを見据えて、静かに構えている。

「女の子二人か……。まあいい、ちょうどいいハンデだ」

ギーシュは気障つたらしく、シヤナと夏梨を指して言う。3人を相手にすると言っているのだが、正直、才人は自分より背も小さい女の子に頼る気など毛頭なかった。この時点で二人とも、この女の子の実力を誤解していることを知らずに。

「とりあえず、逃げずに来たことは、ほめてやるうじやないか」

「逃げねーよ」

「逃げるか、金髪バカ」

「お前みたいなのに、逃げる方がおかしい」

ギーシュの芝居がかった台詞にいい加減、才人はうんざりとした声で答える。

後の二人は此れでもかと言う怒りを込めた声で。

「さてと、では始めるか」

「なあ、悪いけど、手を出さないでくれよ」

「え?」「へ?」

後ろの二人に声を掛け、とりあえず才人は先手必勝で行くことにした。

行動を制された二人はキョトンとしている。だが、しぶしぶと言った様子で従う。

相手がどんな魔法が使ってくるか分からない以上先に動いたほうが有利だし、事実、ギーシュのようなひよろつとした貴族なら、自分のパンチで一撃で熨せる。そう思っていた。

駆け出した才人を見て、ギーシュは余裕の笑みを浮かべ、バラを振る。

花びらの一枚が才人の前に舞ったかと思うと、それは甲冑を着た女戦士のゴーレムとなった。

「なっ、こいつが魔法ってやつか」

始めてみた「本物」の魔法に才人はぎょつとした。

「僕はメイジだ、だから魔法で戦う。文句をあるまいね」「くそっ！」

才人は自分の慢心を恥じた。流石に青銅は殴れない。

「言い忘れたが僕の二つ名は『青銅』。青銅のギーシュだ」

そう言って、一回一回ポーズを決める。

「従って、青銅のゴーレム、ワルキューレがお相手するよ」

まずは顔面を思いっきり右の拳で殴られた。そして次に腹に重いブローを入られた才人は地面に倒れる。青銅の重みと振りぬ

いた拳の重み、その両方が才人の体に襲い掛かる。

「なんだよ、もう終わりかい」

「へへ、終わるかよ。蚊が止まったのかと思っただぜ」

あきれのようなギーシュの言葉に才人は今だに軽口で答える。

再び、立ち上がって向かっていくが、それも軽く避けられ、また腹に一発、腰に一発、足と手に2発ずつ貰ってしまった。殴られるたびに、成り行きを見ていた女子生徒から短い悲鳴が上がる。

殴られた才人は口から血が出ている。

「ギーシュ！」

ギーシュを叫ぶように呼んだのはルイズだった。

「おおルイズ、悪いな君の使い魔をちょっとお借りしているよ」

「いい加減にして、大体ねえ、決闘は禁止じゃない」

「禁止されてるのは貴族同士の決闘だ。平民と貴族の決闘は誰も、禁止なんかされていない」

ギーシュのルールを都合のいいように解釈した発言に、ルイズは言葉に詰まった。

「そ、それは、そんなこと今まで一度も無かったから・・・」

「ルイズ、君はその平民が好きなのかい」

ギーシュの冷やかすような言葉にルイズは顔を真っ赤にする。

「誰がよ！やめてよね！自分の使い魔が怪我するのを黙ってみてられないだけよ！」



「ルイズ、心配してくれてるところに悪りいんだけどこいつは俺の決闘だ」

「だ！誰があんたの心配なんか・・・」

殴られても吐ける才人の軽口に、ルイズが更に顔を赤くする。その遣り取りを見ていた、夏梨とシャナは

「そうかい、お前意外に優しいなあとおもったんだけどよ」

「な！何いつてるの！！」

「なあ・・・」「ねえ・・・」

口を挟むが無視される。完全に二人だけの世界に入り込んでいる。ルイズはさらに顔を真っ赤にして怒る。シャナと夏梨は青筋を浮かべる。

「悪いけど、邪魔しないでくれ」

「サイト！」

「何だ、はじめて会った時以来だな、俺の名前を呼ぶの」

「なあ！」「ねえ！」

「ふ、やれやれだね。まだ、やる気かい？」

二発喰らっただけだが、才人は既にボロボロだ。生身を青銅の棍棒で殴られているのと同じような衝撃があるはずだ。下手をすれば、肋骨の一本でも折れているかもしれない。

それでも才人は諦めない。

「ねえ、分かったでしょ。平民じゃ、貴族に勝てないの！」

ルイズが才人に力説するが、それでも才人は折れない。立ち上がった才人にギーシュがやれやれと嘲笑うかのように挑発する。

そんなギーシュに才人は、ゆっくりと走り出す。だが、また再び重い拳が才人に突き刺さる。

「うほ！」

血の塊にも見える赤い水を吐く、それでも才人は踏鞴を踏んで耐える。

再び向かおうとする才人を、ルイズがその後を追いかけて肩を掴む。

「寝てなさいよ！バカ！どうして立つのよ！」

才人は肩に乗せられた手を振り払った。

「ムカつくから」

「ムカつく？メイジに負けたって恥でもなんでもないのよ！勝てないんだから！」

才人はよろよると歩きながら呟く。

「うるせえよ」

「え？」

何度も何度も殴られた。それでも、諦めない。

「うるせえ、うるせえ、うるせえ」

「な、なによ……」

「いい加減、ムカつくんだよね……」

才人は自分の力を持って、力強く立つ。

「メイジだか貴族だかしんねえけどよ…」

そこで、口から垂れた血を拭う。鼻血に骨折、切り傷、打撲、既に満身創痍である。立っているのがやっとと言う状況なのに、それでも、張らねばならない。

「お前ら揃いも揃って威張りやがって。魔法がそんなに偉いのかよ。アホが」

ギーシュが薄く笑みを浮かべながら、そんな才人の様子を見つめている。

ボロボロの才人は、ルイズに血まみれの顔で優しく語り掛ける。

「なあ、ルイズ。しかたねえ、使い魔やってやるよ。洗濯もするし、着替えも手伝ってやる」

才人の戦いに一護はいつ手を出そうか、考えあぐねていた。

ただ、単純に自分がバカにされただけなら、さっさと自分が終わらせてしまえばいい。だが、事此处に到って、この「決闘」と言う名の、一方的な「私刑」は才人の誇りを賭けた戦いになってきた。それを邪魔できるほど、無粋ではなかった。

結局、手を出せないまま、さり気に移動した箱舟の出口の前で、じっと才人を見ているのだ。

傍には今朝方、会ったキュルケと青い髪の小さな女の子がいる。

二人もルイズと、才人の状況にハラハラと言った様子で見ている。

（何だ…、喧嘩してるから仲悪いのかと思ったけど、俺と石田みたいなもんか）

キュルケの見つめる視線に混じる感情を読み取りながら、一護はそんな事を思った。

「飯も寝床も我慢する。だけど・・・」

「だけど…?」

「下げたくない頭は下げられねえ!」

もう一度、立つ。立てば立つただけ、傷と怪我が増えると知りながら。

それでも自分の誇りの為に、彼は立つ。自分のちっぽけだが、大切な誇りを守るために。

「やるだけ無駄だと思いがね」

ギーシュの言葉に、才人は持ち前の負けん気を發揮して言った。

「全然きいてねえよ。お前の銅像、弱すぎ」

遂に、怒りが沸点に達したギーシュの顔から笑みが消えた。ワルキューレの右手の拳を、頬にモロに食らい、才人は吹っ飛んだ。

次の左からの攻撃は鼻が折れ、鼻血が盛大に吹き出る。才人は痛み鼻を押さえながら、呆然と思う。

目の前には抜けるような青空が広がっている。もう見るのは何度目だろうか。

(参ったな……………)

これがメイジの力。

才人も多少のケンカはしたことがあるが、こんなパンチは食らっ

たことがなかった。

それでも、よろよると立ち上がる。

ギーシュのワルキューレは、容赦なくそんな才人を殴り飛ばそうとした。襲い掛かってくるだろう衝撃に才人は思わず目をつむる。しかし、

「はああ！」「だりやあ！」

やって来たのは後ろからの衝撃だった。

「げふ！」

盛大に才人は転がり、今のダブルの蹴りが止めになったのか、気を失ってしまった。

「全く…、手を出さないでくれって言うから、任せたのに…」

「そうね。頼りないにも程があるわ」

「『辛辣だー！』」

蹴りを入れた上に、気絶した才人へと鞭を打つような言葉を掛けるのは、さつきまで決闘に参加を止められていたシャナと夏梨だった。二人とも呆れたような顔をしている。

「ふん、選手交代かい？あまり僕は女の子を傷つけたくはないのだが…」

「二人も泣かせて、よく言えるわね」

「そうね、私も同感」

ギーシュの言葉は本当の気持ちであるが、そろそろ堪忍袋の緒が切れた二人には無用の挑発だった。

「さつさと終わらせてあげるわ。最大戦力で掛かってきなさい！」

見事なハモリで挑発する。

流石に、「女性に甘い」と称されるギーシュにも、これは許せなかった。

最初にゴーレムを出したときと同じようにバラを振って、今度は6体を追加する。ギーシュの造り、操れる最大戦力、7体の青銅製のゴーレムが二人の女の子の前に現れた。

「いいだろう！お望みならば、そうさせてもらおう！」

キュルケの隣に居た青い髪の少女、タバサはこの決闘を見るでもなく見ていた。

今この場にいるのも隣にいるキュルケに半ば無理やり連れてこられたからだ。

結果は分かりきっている、貴族には平民は勝てない。案の定、そう思ってきてみれば黒髪の男の子がギーシュのゴーレムにボコボコにされてしまった。

だが、次に現れたのは自分とそれ程、背丈の変わらない女の子が二人。

(流石に、まずい！)

ゴーレムと男の子なら、喧嘩の範囲で済むかもしれない。だが、女の子に手を上げてしまったのは、本人は気が付いていないが、ギーシュの評価は地に落ちる。女の子の命も危ない。

その両方の理由から、咄嗟に自分の節くれだった大きな杖を持ち、決闘を止めようとするが、それをキュルケの隣に居たオレンジ髪の

男に止められてしまった。

「二人とも死んでしまう」

二人と一緒に居た黒衣とオレンジ髪が特徴の男に、何故止めるのか聞く。

だが、返って来た答えは、彼女の予想を上回るものだった。

「何、心配いらねーよ。あの二人はこの奴らの1000倍は強え」

その彼の言葉が現実とかけ離れたモノだと、タバサは勝手に考えていた。だが気が付く。自分の考えが甘いものであったと言っことを。同じく戦いを潜り抜けたシユバリエであるタバサだけが分かった。

二人の赤く煌く目と、蒼く輝く目。

その二人の双眸は幾多の戦場を駆け抜けた歴戦の戦士の目であることを。

学院長室でコルベルは唾を飛ばして、オスマンに説明していた。春の使い魔召喚の際に、ルイズが平民の使い魔を7人も呼び出してしまったこと。

ルイズがその中の少年と『契約』した時したこと。

契約をしていない6人にも証明としてルーン文字が浮かび上がったこと。

そして、そのルーン文字が気になったこと。

どれもコレもイレギュラーな出来事ばかりだ。普通の使い魔との

契約ではありえない。

それから、そのルーンを調べていたら…、

「始祖ブリミルの使い魔『ガンダールヴ』に行き着いた、というわけじゃね？」

オスマンは、コルベールが描いた才人達の左手のルーン文字のスケッチをじっと見つめた。

今ひとつ、オスマンは信じられないといった調子である。

「そうです！」

バンと机を叩いて更に力説する。

「さらに使い魔を7人も召喚したということ！」

コルベールのボルテージは更に上がっていく。  
あまりの剣幕に、オスマンは若干引いていた。

「普通はメイジ一人に付き、一体であるはずの使い魔が7人もいるのです。それが同じルーン！」

コルベールはさらに興奮して言う。

「で、君の結論は？」

「あの少年たちは、『ガンダールヴ』です！」

下手をすれば、口と口がくっつきかねないほどに近くに寄ったコルベールを若干、嫌がりながらも説明を続けさせる。ここに到って、彼の言葉の信憑性が増してきたのだ。



「それも全員がです！これが大事じゃなくて、なんなんですか！オールド・オスマン！」

コルベールは、禿げ上がった頭を、ハンカチで拭きながらまくし立てた。

「ふむ…。確かに、ルーンが同じじゃ」

七枚、七人に刻まれたルーンを見比べるオールド・オスマン。そのルーンは一字一句変わっていない。全く持って同じルーンが7人に刻まれているのだ。

「その平民だったその少年達は、『ガンダールヴ』になった、ということになるんじゃないだろうか」

「どうでしょう」  
「しかし、それだけで決めつけるのは早計かもしれん」

そこでドアが控えめにノックされた。

「誰じゃ？」

扉の向こうから、退出を促したロングビルの声が聞こえてきた。

「私です。オールド・オスマン」

「なんじゃね？」

「ヴェストリの広場で、決闘をしている生徒がいるようで、大騒ぎになっています」

疲れたような声でロングビルが言葉を続ける。決闘沙汰は貴族が

集まるこの学園では決して珍しいことではない。だからこそ、「決闘禁止」などという校則があるのだ。

「止めに入った教師がいましたが、生徒たちに邪魔されて、止められないようです」

「まったく、暇をもてあました貴族ほど、性質の悪い生き物はおらんわい」

ふつと学費も払ってくれない、生徒たちの親の顔を思い出しながら、肩を竦める。

「で、誰が暴れておるんだね？」

「一人は、ギーシュ・ド・グラモン」

「…あの、グラモンとこのバカ息子が」

彼が原因の決闘は去年もそれなりに多かった。今更、何を言うでもない。

去年から彼を見ていたオスマンとコルベールは、顔に浮かぶ疲労の色を一層濃くする。

「オヤジも色の道では剛の者じゃったが、息子も輪をかけて女好きじゃ」

「おおかた女の子の取り合いでしょうな。相手は誰です」

「…それが、メイジではありません」

「メイジではない…？誰じゃ？」

それからロングビルは言いにくそうに、一瞬躊躇ってから、

「ミス・ヴァリエールの7人の使い魔の内の黒髪の少年と女の子二

人のようです」

オスマンとコルベールは顔を見合わせた。

「教師たちは、決闘を止めるために『眠りの鐘』の使用許可を求めております」

「アホか。たかが子供のケンカを止めるために、秘宝を使ってどうするんじゃ。放っておきなさい」  
「わかりました」

ドアの前から、ロングビルは去っていった。

コルベールは、唾を飲み込んで、オスマンを促した。

「オールド・オスマン！！」

「うむ」

オスマンは、杖を振る。

壁にかかった大きな鏡に、ヴェストリ広場の様子が映し出された。

大勢のギャラリーがいる前で、シャナはフレイムヘイズ『天壤の劫火』の契約者『炎髪灼眼の討ち手』としての能力、黒のコートにも見える外套『夜笠』を纏う。

そして、永久にも見える黒い虚空から一本の大太刀を取り出した。これが彼女の名の由来にもなった、必殺の大太刀、紅世に伝わる比類なき宝剣『贄殿遮那』である。

ここまで僅か数秒、その数秒の間に、彼女の目と髪は燃え盛るよ

うな紅蓮になった。

その紅蓮は太刀も覆う。燃え盛る炎の剣だ。

「な、なんだ！髪の色が変わったぞ！」

「それにあの剣に黒いコート、どっから出したんだ？」

「剣が燃えているぞ！メイジだったのか！」

ギャラリーに動揺の声が上がる。しかし、その動揺の声は更に大きくなる。

夏梨が腰に差していた刀を鞘から抜きさる。

正眼に構えた刀へ向かって、優しく、それでいて冷たく、声を掛ける。

「清めよ、『流月』！」

持っていた刀の周りに無数の水が流れ、夏梨の周りを満たす。これが夏梨の刀、水を纏いし静謐たる刃、『流月』である。シャナに對するかのように青い瞳に輝く。

「おいおい、こっちの子もメイジなのか…！」

ギャラリーは完全に引いていた。先ほど、ギーシュがボコボコにした黒髪の男はそんな素振も見せなかったが、後ろに控えていた二人は炎と水を纏い、操っている。

ギーシュの顔から余裕が消える。のんびりと逃げまわって、適当にやり過ぎそうとしていたら、いつの間にか追い詰められていた。彼も実力はそれなりである。向かい合った二人との実力差、それを痛いほどに肌を感じていた。

「はああ！」「だああ！」

二人が気合一閃。刀を振りぬく。飛沫が飛び、炎が舞う。後に残るのは燃え残った、砕ききれなかった青銅のワルキューレの欠片。7体の悉くが一瞬で消え去ってしまった。

「ひっ…！」

情けない声を上げて後ずさる。レベルが違いすぎる。

その様子を遠くから眺めていたのは、学院長室のオスマンとコルベールである。

「あの二人…、いくらなんでも…」

「まずいかもしれんの…、彼女らではなく、グラモンのバカ息子が」

二人の圧倒的な力を見ていた二人は、率直な感想を漏らした。言っている間に、一步、また一步と二人はギーシュに近づいていく。最大戦力をあつさり打ち破られたギーシュには、もう打つ手がない。

自分よりも小さな女の子に気圧されている。その事が何よりも情けなかった。

ピタリと首筋に冷たい感触が奔る。

「さあ、言い残すことはある？」

「まだ繋がっている間に、聞いてあげるわよ」

二人の刀が首筋に突きつけられた。少しでもこの刀が動けば、自分の首は永遠に胴体とは離れ離れだ。「命を惜しむな、名を惜しめ」とは軍人一家である彼の父の薫陶でもある。

だが、ギーシュはこの小さな二人の悪鬼に初めて、薫陶を破ることにした。何せ名も、誇りも、奪い去られ、自分に残っているのは

命のみ。ここで見栄を張って、命は失いたくない。

「待って、悪かった。侮辱は取り消そう…」

「そう、で？」

「で？って何でだい！」

侮辱の言葉は取り消した。しかし、首の冷たい感触は消えない。

「分からないの？」

夏梨があきれ果てる。

「分からないなら、仕方ないわね」

「二股を掛けるような・・・」「女の敵は・・・」「ぶっ倒す！」

二人が、刀を振った。何時来るかもしれない死の時間に、ギーシユは強く目を瞑った。

だが、待てども待てども、痛くならない。いつの間にか消えた冷たい感触が戻ってきていない。恐る恐る目を開けると、二つの切先が自分の目の前で、完全に停止していた。

「動くなよ、どっちも」

後ろから男の声が掛かる。バツと勢い良く振り向くと、そこには呑気に見物していたオレンジ頭の少年がしっかりと刀を止めていた。それも一本の手で一人を止めていた。

使い魔の徳性というのは「魔法先生ネギま！」など多くの魔法作品に代表される人の7つの徳性、ヨーロッパ七元徳の事です。即ち、知恵、勇氣、愛情、節制、正義、信仰、希望の7つの事です。「美德」とか「道徳」の「徳」では無く、人の有益性を表したもので、最も優れている点と言い換えてもいいと思います。

夏梨の刀、説明しませんでした。が斬魄刀です。

イメージ的にシャナの対局に性格とか、態度とか、考え方が位置している。で属性的にも反対にしてやろうという、かなり安直な考えで「水」にしてみました。使い方に関してはこれから戦闘があれば、書きたいと思います。

シャナの説明が長い。「『天壤』」シャナ」まで文字数ありすぎです。

「護の「あいつらは」は多分、仲間のことを信じている彼なら恐らくこんな事を言うのだと思います。現にルキア救出の時にも言っていましたから。

## NO REGRET RAIN

ヴェストリの広場に居たギャラリーは皆一様に呆けた顔をしていた。

何せ今まで同じようにギャラリーの中にいた、黒衣の平民がひゅつと飛び出したかと思うと、ギーシュに迫っていた二本の刃を片手で止めたのだ。刀はつい先ほど、紙の様に青銅製のゴーレムを切り裂いたばかりである。それを何も無く素手で止めているのだ。

この「ありえない」状況に頭が付いていけないのである。

「ふう、全くお前ら…」

「一護、離して…」

「一兄、手を退けて…」

尚もギーシュに向けて刀を動かそうとするが、がっちりと掴まれた切先は全く動かない。まるで万力で締められたような圧力だ。

「いい加減にしろ！」

「痛い！」「痛って！」

ゴチンと二人の脳天に重い拳が落ちる。頭の割れそうな衝撃に思わずうずくまる。

余りの痛さに涙目になる。

「ぐおお…」「うっ…」

「ったく、人死にはダメだっつてんだろ」

呆れたような調子で二人に言い聞かせる。尚も二人は睨んでいたが、一護の剣幕に圧されて黙ってしまふ。正直、女の敵であるギー



シュに天誅を加えたかったが、ここまで言われては仕方が無い。  
そして、一護は未だに腰を抜かしていたギーシュに向けて、

「お前もな！」

「ぐふ！」

思いつきり、女の子に落としたのとは比べ物に成らないほどの重い一撃を脳天にぶち込む。ギーシュはその重さに一撃で気絶してしまった。

「まったく、気が付いたら謝りに行っとけよ……」

気絶したギーシュを後にして、血塗れになった才人を担ぎ上げる。切り傷、打撲と余りにも傷の数は多いが出血量は少ない。いきなり死ぬようなことは無いはずだ。

「夏梨、エドとネギを呼んで来い！ シャナは俺と一緒に医務室だ」

「はい！」 「分かった！」

二人仲良く返事をする。少しこわばった声になったのは、一護の袂に黒だから目立たない、しかし、確実にある赤いシミがじわっと広がったからだ。

夏梨はしゅつと目に留まらない速さで消えてしまった。

「おい、その赤毛！ 医務室へ案内しろ！」

「は、はい……」

今朝見た赤毛の女生徒を見つけた、一護は取り敢えず命令する。その大きな声にビクツと反応して、正気に戻る。普段なら、キュルケも断わるのだが、只ならぬ様子に思わず返事をしてしまった。

ギャラリーと一緒に呆けていたルイズは、この声で漸く正気に戻った。

「ちょっと、何なの！あれ！」

シヤナの纏った炎。夏梨の流した水。そのどちらもルイズには理解の範囲外である。聞きたい事が山ほどあった。ワクワクと言った様子で一護に詰め寄る。

「ねえ、何なの？もしかしてメイジ？」

「やかましい！」

「ハウツ！」

ワクワクと聞いてくるのに腹が立ち、説明するのも面倒になったので、取り敢えず後頭部に空手チョップを食らわす。その衝撃にルイズの意識は地の底へと沈んだ。

その意識を失ったルイズも抱えて運ぶ。

急ぎ足でたどり着いた医務室は上を下への大騒ぎになった。取り敢えず、慌てふためく先生方にはアレンが丁重に退出願った。

才人は何せギーシュのゴーレムにしこたま殴られているのだ。金属の中では軟い青銅とは言え、生身で喰らって傷を負わないほうがおかしい。

一護が来るのを待っていたように、医務室の中で準備を整えた工ドが治療を指示する。

「この程度なら、直ぐに終わる。一護、円の真ん中に才人を置いてくれ」

「分かった」

指示されたとおり、医務室の床にチョークで書かれたなにやら複

雑な記号の書かれた円、錬金術師の方式と法則の体現である錬成陣の丁度中心に才人を横たえる。

「さて、死ぬんじゃないぞ！」

目の前で両の手を合わせる。パンと乾いた音が医務室の小さい部屋に響く。その次は手を書かれた錬成陣の上に重ねあわせる。エネルギーが陣に満ち、パリパリと眩い光が幾筋も煌く。

その光、練成光が治まったあと、陣の中にいたのは出血が塞がれ、骨折が直された才人の姿だった。服は血や泥に染まっているが、それもシヤナが、

「アラストール、『清めの炎』を」

「うむ」

ぽっと手のひらに灯した紅蓮の炎を投げつけると、シミが逆再生のように消えてしまった。

「処置完了だ。あとは体力が戻れば目も冷めるだろ」

遠見の鏡で決闘から医務室での一部始終を見ていたオスマンとコルベールは顔を見合わせた。

この世界の魔法使いのランクとしては一番低い、『ドット』とはいえ、女の子二人の平民がメイジに圧勝したのである。しかも、平民だと侮っていたら、刀から長い黒髪の方は炎を、短い黒髪の方は水をそれぞれ出したのだ。

「オールド・オスマン…」  
「…ううむ」

長い間、生きてきたつもりだったが、あのような技術や魔法は二人とも見た事がなかった。

しかも、二人はルーンを詠唱していない。

つまりはこの世界の魔法使いとは根本から違う存在。根拠は何も無いが、二人の直感がひしひしとそう告げていた。

更に追い討ちを掛けるかのように、オレンジ頭の黒衣の男は、その二人の刃を軽く止めてしまった。

「幾らなんでも強すぎるじゃろ…。まあ、黒髪の少年の方はそれ程でもなかったが…」

極めつけは医務室の出来事。

眩い光が『遠見の鏡』の視界を奪ったかと思うと、後に残ったのは傷が塞がれた少年の姿。本来なら高級な水の秘薬を使っても、全治1週間はありそうな大怪我を一瞬で直してしまったのだ。

床に書かれていたあの円に秘密があるのかもしれないが、その技術も見たことがなかった。

「オールド・オスマン。早速王室に報告して指示を仰がないことは…」

「それには及ばん」

オスマンはきっぱりと言った。

オスマンは、窓を開けて険しい表情で景色を眺めた。

「どうしてですか？これは世紀の大発見ですよ！現代に蘇った『ガ

ンダールヴ』！」

再び暑苦しい勢いで、オスマンに詰め寄る。

「それもそれが七人！七人も『ガンダールヴ』なのですぞッ！！！」

研究熱心なコルベールはワクワクせずには居られなかった。伝説と呼ばれていた存在。自分の短い人生では到底お目にかかれないだろう、御伽噺の向こうに消えた存在。それが目の前に立っているのだ。

非人道的なことをする気はないが、話くらいは聞いておきたかった。

「ミスタ・コルベール。『ガンダールヴ』はただの使い魔ではない」「そのとおりです。始祖ブリミルの用いた『ガンダールヴ』」

持ってきた『始祖ブリミルの使い魔たち』の一節を思い出しながら、コルベールは語る。

「その姿形は記述がありませんが、主人の呪文詠唱の時間を守るために特化した存在と伝え聞きます」

「そうじゃ。始祖ブリミルは、呪文を唱える時間が長かった……。その強力な呪文ゆえにの」

この世で貴族として君臨するメイジにも、唯一にして決定的な弱点がある。

ぶかっつと水キセルの煙を吐きながら、情けなさそうに話す。

「知ってのとおり、詠唱時間中のメイジは無力じゃ」

そう。魔法詠唱中はルーンを唱えることに集中せねばならない。ルーンを唱える事を妨害されれば、魔法は発動しない。妨害の方法は何でもあるが、兎に角集中を乱されると、どうしてもメイジは弱いのだ。だからこそ、その詠唱時間を確保する戦い方が確立されたり、使い魔に時間を稼がせたりするのだ。

「そんな無力な間、己の体を守るために始祖ブリミルが用いた使い魔が『ガンダールヴ』じゃ」

オスマンは勝手にブリミルの姿と、その傍らに立つガンダールヴの姿を思い浮かべる。

スケベな大人らしく、両方とも体のメリハリの利いた女性の姿だったが。

「その強さは……………」

その後を、コルベールが興奮した様子で言った。

「千人もの軍隊を一人で壊滅させるほどの力！」

コルベールの興奮の度合いは天井知らずに上がっていく。

「あまつさえ並のメイジではまったく歯が立たなかつたとか！」

「それが、七人もいるとなると……」

オスマンは唸った。コルベールは冷静になって考えてみた。

「危険以外の何物でもありません……」

「で、ミスタ・コルベール」

くるりとオスマンは、また髪の毛の薄くなったコルベールへ向き直る。

「はい。なんでしょうか？」

「その少年たちは、本当にただの人間だったのかね？」

「それが……………」

コルベールは少し言いよどんでから、

「さっきの少年はどこからどう見ても、ただの平民の少年でした。しかし、後の6人は……………」

「後の6人は？」

オスマンがコルベールの態度に怪訝そうに尋ねる。

「念のために『ディテクト・マジック』で確かめたところ…、正直、契約を辞めさせるべきでした」

「何故じゃ？」

「6人共に相当鍛えこまれていて、相当の実力者、いえ」

そこで言葉を切り、数秒置いて意を決したように続ける。

「恐らくこの国の全軍を持って、傷を一つ付けられれば御の字かと

…」

「…………それ程かね？」

「はい…」

消え入りそうだが、しっかりとした様子でコルベールは答える。

オスマンは天井を仰ぎ見る。正直、もうあと少ししかない自分の任期中に、厄介の種を抱え込みたくは無かった。彼らを排除すれば一番手っ取り早くていいのだが、自分が教師の中では、全幅の信頼

を置いているコルベールの話である。付き合いも長い自分に、そんな大仰な嘘をつくとは思えなかった。

トリステイン軍全滅で、戦果は傷一つ。これでは排除のしようがない。

「そんな6人を、現代の『ガンダールヴ』にしたのは、誰なんじゃね？」

話は終わりとばかりにもう一つ、気になっていた疑問を口にした。

「ミス・ヴァリエールですが…」

「彼女は、優秀なメイジなのかね？」

コルベールは教師である。確かに鼻屑して評価したいと言う親心もあるが、

「いえ、というか、むしろ無能というか…」

できるだけ正直に言った。

「さて、その二つが謎じゃ」

オスマンは再びキセルをふかした。

そして、それを見つめるコルベール。

「ですね」

「無能なメイジと契約した7人が、何故、『ガンダールヴ』になったのか。まったく謎じゃ」

「そうですね…」



コルベールは残り少ない、自分の頭の寿命を気にした。

こんな厄介ごとを抱え込んでしまったのだ。いつその事、カツコいいスキンヘッドにするのも手かもしれない。そんな事をぼんやり考えていた。

「とにかく、王室のボンクラどもに『ガンダールヴ』とその主人を渡すわけにはいくまい」

ポケポケと秘書にセクハラをする、スケベな大人の姿はそこには無かった。

そこにいたのは凜々しい学院長、魔法使いの戦争をいくつも潜り抜けてきた本物の魔法使いがいた。

「そんなオモチヤを与えてしまったては、またぞろ戦でも引き起こすじやろう」

水の国と謳われるトリステインの王宮。

見た目は澄み切っているが、本等の姿は魑魅魍魎が跋扈する魔窟である。得てして政治の世界はそういうものであると分かっているが、今の状況では、いや、今の状況だからこそ尚更、彼らの存在は秘匿しておかねばなるまい。

「宮廷で暇を持て余している連中は、戦好きばかりじゃからな」

「はあ、学院長の考えには恐れ入ります」

「この件は私が預かる。他言は無用じゃ。ミスタ・コルベール」

「は、はい！かしこまりました！」

コルベールは急いで部屋を出て行った。

オスマンは杖を振ると窓際へと向かった。

「さて、何者なのじゃろうな。願わくば、この世界に平穩を齎すものであってほしいの…」

オスマンの希望のような声は、強く吹いた風に乗って消えた。

白い白い空間。限りも無く広がる空間。

魔法が存在し、魔法を扱うメイジが貴族として君臨する世界。彼らは貴族にあらざるものを虐げ、時に笑い、時に喜ぶ。それを見た彼は、

「どうにかならないのか」

自分が向かっていったのは、決して憂さを晴らすためだけではない。

零れ落ちた問いに、誰かが答えた。

「どうにもならねえよ」

それはぶつきらぼうな男の子の声だった。白い空間に反響するごとなく、解けて消えた。

それに持ち前の負けん気を發揮して、答える。

「どうにかしたいんだ」

「無理よ、今の貴方では」

今度は透き通る鈴のような女の子の声だった。耳の両側から聞こ

えてくる。この声も反響することなく、消えていった。

「どうしてだ」

冷たく突き放すような声が聞こえる。今度は問うような声。耳に残って消えそうに無い。

そこで才人は目が覚めた。

真っ先に目に入ったのは、白一色で塗られた天井。ここはまだ夢の続きだと思つた才人だが、体の節々が痛んでいないのに気が付く。

（俺、死んだのか…。じゃ、ここは天国か…）

ここが天国ならそれもいいかもしれない。今まで痛かつたのが消えて、温かくすら感じている。敵わない戦いをギーシュに挑んだが、結局負けてしまった。その結果なら、まあいいかもしれない。

「あ、気が付きました？」

「目を覚ました…」

天国かと思つていたら、目の前には赤毛の男の子と青い髪の女の子が、仲良さそうに本を読んでいた。目を開けた自分に気が付いて、声を掛けてくる。

女の子の方は見たこと無いが、赤毛の男の子の方の名前は知っている。

「えっと、ネギ君だっけ…？」

「は、はい。そうですよ、才人さん」

キョトンとした様子でネギは才人の顔を見ている。

それから心配そうな声で聞いてくる。

「えっと、大丈夫ですか？二日も寝ていたんですよ」

「二日？えっと決闘騒ぎからか？」

「はい」

どうやら寝ている間に、太陽と月が二度も昇って沈んでしまっただけらしい。随分と寝すぎたのか、頭が痛い。自分の格好を確認するが、包帯でぐるぐる巻きで体はミイラ男のようだ。

だが、不思議と体は痛くない。正直数えるのもバカらしくなる位に殴られていたのだが、その傷が2日程度で塞がったりするものなのだろうか。

才人は首を傾げた。

「ネギ、私は皆を呼んでくる。戻ってきたら、さっきの続き」

「あ、お願いします。タバサさん」

そういうと青髪の女の子は傍に立ってかけてあった、自分の身長ほどもある杖を持って出て行った。それを見送ってから、才人はネギに向き直る。

「俺、死んだんじゃないの？」

「死んでないですよ、ちゃんと生きてます」

さっきの白い空間はどうやら夢らしい。流石に才人も16歳。まだ恋もしてないし、彼女もいないし、キスもしていない。そんな状況で死ぬのは嫌だった。

「そっか・・・、俺生きてるのか」

そう思うと不思議とため息が出てきた。

一つため息を付いた所で、さつき出て行ったタバサに一護、エド、アレンに夏梨とシヤナが半ば引き摺るような形でルイズを連れてきた。

9人も入ると流石に白い医務室は手狭になった。

「よ、目覚めたみたいだな」

一護を始めとして皆揃って、自分が目を覚ましたことを喜んでくれる。

だが、ルイズだけは、

「ふん、勝手な事して。洗濯物たまつたじゃない！」

とあくまでも主人としての威厳を崩さずにいた。その態度に夏梨とシヤナが持つていたルイズの腕を極める。ミシミシと離れていても聞こえてくる、骨の軋む音。

「いたい、いたい！」

「あれだけ、説教したのにまだ直らないのね……」

「貴族、貴族と振舞うのも、貴族たる実力と振る舞いがあつてこそ。お前の貴族は人を虐げること？」

才人は知らなかったが、ルイズはこの2日間。6人にこっぴどく叱られていたのだ。

発端は「掃除をしろ」といきなり命令したことに夏梨とシヤナが反攻したことだ。それから一護達が出てきて喧嘩を辞めさせたが、ルイズが一方的にボロボロになっていた。

そこでルイズが6人の態度に怒った。

「使い魔なら使い魔らしくしなさい」と。正直、マントも髪もぼ

さばさの状態で言うのも情けなかったが、自分が上なのだということをしつかり自覚させないと、そんな風に考えていた。

それに頭を掻きながら、代表して言ったのは一護だった。

「俺達は皆、命賭ける様な事やってきたんだよ」

一護はまた、この医務室で才人に同じ事を言う。

「その傍には仲間がいた。そいつらは俺の為に命張ってくれる頼もしい奴らだった。」

それぞれが伴に戦場を駆け抜けた仲間の顔を、また思い出す。

無口な巨人、黒い靴の姫、赤い炎の軍人、白い羽根の侍、白い弓引き、蓮の剣士・・・

皆それぞれが、心強い仲間だった。

今から問うのは、才人への覚悟。

「お前は俺たちの為に、命賭けてくれるか？」

確り見たことの無かった一護の茶色の目に、まるで鏡のように自分が映っているのが見えた。

「少なくとも俺達は俺たちの為に命張れない奴の為に戦わない」

「…勿論です」

少しだけ言いよんだ。才人は一護の言う事を正直、上辺しか理解していなかった。

確かに彼らは武器を持っているし、強そうだ。だが、見た目は自分とそんなに変わらない。オマケにそのうちの3人は、小学生と言っても差し支えないほどだ。

「おし。だが、まあ、弱い奴に戦えって言ってもそれは自殺の推奨だよな」

「うん。だって、こいつ弱いもん」

シャナを皮切りに次々と降り注ぐ、辛辣な言葉。腐っても才人も男の子である。余り弱い弱いと呼ばれるのは心外だった。無謀にも一番近くにいたアレンに掴みかかるが、くるりと天地が半回転する。そして、そのまま床へ叩きつけられた。腰と背に異様な痛みが広がる。

「わー、傷口開いちゃいますよ！アレンさん！」

「心配すんな、そんな柔な塞ぎ方はしてねーよ」

「それに今のは、受身も取れていない才人が悪い」

慌てるネギと、短く欠伸をかみ殺しながら、微塵も心配していない口調のエド。

追い討ちを掛けるのは夏梨だった。

その様子を見て、一護は話を続ける。

「RPGのゲームじゃねえんだ。武器換えて強くなるわけがねえ」

今までの気楽で、のんびりとした空気を一瞬にして消す。

「強くなりたいか？」

「え？」

「言っただろ、下げたくない頭は下げられないって」

「ええ…」

気絶する寸前、ルイズに向かって叫んだ言葉を思い出す。

「下げたくない頭は下げられない」と本人にとっては大声で誓ったのだ。

「えっと、僕の友達が言っていました」

白いローブで身を固めたネギが一護と才人の会話に口を挟む。

それは嘗て聞いた、天才から自分へと贈られた言葉。綺麗な言葉でも、含蓄のある言葉でもない。けれども、ネギの心の奥の奥を締め付け続ける言葉。

「『世界に幾百の正義があるとして、正義を通すのは力ある者のみ』  
って」

「『力ある者のみ』か…」

「強くなりましょう、才人さん」

ネギが才人の手を取って促す。

正直、ギーシュのことも甘く見ていた。貴族と言うのがどれだけの實力を持っているのか。それを知らずに突っ込んで行った。その結果が今のこの様だ。見た目がモヤシのように細くても侮ってはいけない。それを才人は痛いほど痛感していた。

「何か、失礼なこと考えてませんか？」

アレンが何事か言ったが、一護が無視して話を進める。

「ま、そういうことだ。本当に自分のその思いを通したいなら強くなれ」

「私達も、最初からこんなに強いわけじゃない」と自らの幼い時を思い出すシヤナ。

「そうです。必死になって体を鍛えてきました」と師匠と養父と自



分に立てた誓いを思い出すアレソ。

「幾度も死に掛けてきたんだ」と自分を支えてくれる幼馴染や上司の篤さを思い出すエド。

「皆、誰かに頼って強くなった、それは恥じゃない」と傍の兄の顔を見ながら思い出す夏梨。

「誰にも負けない思いがあるなら大丈夫ですよ」と記憶の向こうの父を思い出すネギ。

それぞれの想いの丈。想いの向き方もバラバラだが、共通するのは「心」だ。それが「善」か、「悪」かなどと言う単純な二元論ではない、自分の揺ぎ無い思いかどうか。

「お前らはどうなんだ？」

一護は黙っては話を聞いていたルイズとタバサにも振る。勿論、彼女達も黙って聞いているわけではない。二人にも通したい意地と願いがあった。

ぎゅつと結んだ二人の唇の形を見て、一護は首を縦に振る。

それは、3年前の事。まだ力の無い自分へ投げかけられた言葉。

今でも一護と夏梨、二人の力の源泉となり、行動理由となるその言葉。

「思う力は鉄より強い？半端な覚悟なら溝へ捨てよ」

そして背負った刀を抜き、切先を才人へと突きつける。

「10日間、俺たちと命の遣り取りできるか？」

大きな黒い切先が眼前にある。それでも、才人は引くことを良しとしなかった。

「強くなれるなら…、思いを通せるなら…」

口を結んで才人が言う。

「私も！『ゼロ』なんて言われたくない！」

ルイズが飛び跳ねるように言う。

「私にも通したい思いがある」

静かに自分の杖を強く握り締めてタバサが言う。

才人は、ルイズ、一護、アレン、エド、ネギ、夏梨、シャナの顔を見渡す。

8人の間が少しだけ縮まった気がした。

## NO REGRET RAIN (後書き)

前話を書いてから、多く質問を頂きました。

基本的には「才人が嫌いなんですか」というものでした。

私は決して彼が嫌いな訳ではないです。彼の軽薄さ、咄嗟の時の一途さ、そして、豪胆さ。どれも愛すべきものだと思います。

ですが、文中の通りハルゲギニアはRPGの世界ではありません。武器を持って強くなって、敵を倒すなんていう展開はどのようなのだろうかと思っただのが一つ目。

当初の段階ではギーシュを倒すのも才人の役目でした。ですが、ここでガンダールヴの能力を発現させて、ギーシュを倒してしまつては、他の6人が血反吐吐いて修行して、死に掛けるような戦いをして、そうやって積み上げてきた経験や強さと言うものを否定してしまつような気になりました。それは決して彼らの経験の否定だけではなく、その経験に携わってきた人たちの否定でもあるのではと思つたのが二つ目。

最後にここで勝たせてしまつと、彼は努力を怠るのではないかと思つたのです。

確かにガンダールヴの力は絶大です。しかし、それに頼つて努力を怠れば負けてしまう。現に二巻でもワールドに負けていますしね。

6人のルイズに対する扱いは正直、これで正解だつたと思います。石田もチャドも織姫も、アスナも刹那もこのかも、大佐も彼の部下も、神田もリナリーもラビも、ヴィルヘルミナもマージョリーも悠二も、彼らを守ろうと戦つて、また彼らも彼らを守るために戦つて

いました。

ルイズのように一方的に思いをぶつけて、要求を通すなんて事を認められるほど、彼らは器量が大きくありません。狭量ではという声もあるかもしれませんが、戦いの場を経験している彼らにとって、一方的な要求を通す存在と言うのは、切り捨てたいと思ってもおかしくないと思います。

これで一巻の半分が終了です。

才人の修行とフーケ討伐を中心に行きたいと思います。

第一章のEDはシュノーケルの「SOLAR WIND」をお願いします。

## フリアグネのなぜなに質問箱(前書き)

今回はお遊びです。

質問解答となると「RADIO・KON」とどっちにしようか迷ったのですが、彼に任せると間違いなく18禁になりそうだったので、フリアグネさんお願いします。

## フリアグネのなぜなに質問箱

背景は色紙をざっくりと切って張っただけの、平原と空。

そこへ線が細く、白い上下のスーツを着た美男子が。

ボタンと毛糸で作られた簡素な女の子の人形が現れる。

フリアグネ（以下、フ）「狩人”フリアグネ”の！」

マリアンヌ（以下、マ）「なぜなに質問箱！」

フ「いきなり登場して誰かって？私たちのことを知らないとは…」

マ「まあまあ、フリアグネ様。今回は私たちの自己紹介も兼ねていきますので…」

フ「何、そうなのかい？愛しいマリアンヌ」

マ「ハ、ハイ。そのようです」

フ「では、簡単な自己紹介を。私の名前は紅世の王”狩人”フリアグネだ。そしてこちらが…」

マ「フリアグネ様の隣子、マリアンヌです」

フ「機会があれば、我々も登場できるかもしれないね、マリア、ブツ！」

マ「フリアグネ様！」

コン（以下、コ）「オイ、コラ！何でお前らなんだよ！俺じゃねーのかよ！」

フ「君は本編に出ているだろう。これはせめてもの救済措置という奴さ」

コ「腹立つ！すかしゃがってよお！」

マ「ま、まあ、落ち着いてください。それでは早速質問に参りましたよー！」

Q1「作者は才人やルイズが嫌いなんですか？」

フ「…」

マ「あ、あのフリアグネ様？」

フ「これ、作者に対する質問じゃないか。僕らが答えることじゃないね…」

コ「おい、折角コーナー持たせてもらってんだからちゃんと処理しろよ」

フ「無粋なぬいぐるみだね。私の作ったマリアンヌ様とは大違いだ」

コ「だと、コラ！」

マ「フリアグネ様。そうおっしゃらずに…」

フ「まあ、いいだろう。前話のあとがきに書いたとおり、作者は決して嫌ってはいない」

コ「んじゃ、何でぼこぼこにしたんだよ？」

フ「取り敢えず、彼がどれだけ戦いというモノを誤解しているか」

マ「どういうことですか？」

フ「この世界は彼の生きていた現代日本とは違う。魔法と言う神秘がある」

コ「ま、一護は色々と遣ってきたからな…」

フ「いきなり異世界に飛ばされてその世界の戦い方に順応できるかい。私だって出来はしない。空手の選手がボクシングのルールでボクサーに試合を挑むようなものさ。勝てるわけが無い」

マ「ええっと、彼以外の皆さんが適合できたのは確かに強いからかもしれないが…」

フ「それに加え彼らは『学んでいた』というアドバンテージが大きい」

マ「あ、まさか！」

フ「そう。戦いの作法というか、技術は喧嘩もしたことの無い彼が身に着けているはずも無い。相手が魔法使いだと分かっているなら、尚更、武器を持っていくとか、そういった事に知恵を働かせないと」

本当ならあの時点で死んで物語が終わっていたかもしれない」

マ「怖い世界ですね…」

コ「大丈夫かよ、オレ…」

フ「どうも彼は歴史と体育が苦手のようなだね。そんな彼もちゃんと帰ったら励むようになるさ」

マ「彼へのアンチテーゼというよりもジユブナイルのような方が強いんでしょうか？」

フ「そうだね。この世界を知った彼がどんな風にガンダールヴとして生きるのか。帰りたくて仕方の無い6人と違って、彼はこの世界で目標を手に入れるから、成長が楽しみだね」

マ「なるほど。才人さん、頑張ってください！」

フ「桃髪のおちびちゃんも同じかな。『貴族』という特権で偉ぶっているような人間を、彼らは嫌っている。嫌っている理由は各々違うけどね。才人君は受け入れたようだけど、ほいほいと人間としての最低限のプライドまで売るほど、彼らは簡単にはできていない」

マ「だから、あそこまで反発、というか冷たくしてたんですね…」

コ「ま、当然だろ。あんな胸のねー女、つまんねーよ」

フ「…うるさい、ぬいぐるみだね。彼女には普通かもしれないけど、彼女はどうしたんだろうね。もし、彼らが名の有る有名人だったら。思い込みで判断しているのもいけないことだよ」

マ「才人さんとルイズさんの成長と恋愛、それを軸にまた他の6人の成長もあるといいですね」

Q2 ネギの強さはどれくらい？また、他の面々の強さも知りたいです

フ「これに関しては、ネギ君は闇の魔法を習得している状態だ。一撃の火力だけなら、多分6人の中では最高だろうと私の推察を述べ





650

シヤナ 夏梨

竜種 (魔法非使用系統)

700

ネギ (ラカンの修行後)

A

1100

ネギ (闇モード発動)

1500

イージス艦

2000

タカミチ (本気がどうか疑わしい)

2200

アレン (神の道化発動)  
クラウン・クラウン

ネギ (マギア・エベレア術式兵装装填状態)

一護 (始解『斬月』)

AA

2800

鬼神兵 (大戦中に利用されたもの)

AKUMA (Lv. 3程度)

3000

フェイト・アーウェルクス

3500

AKUMA (Lv. 4程度)  
クラウン・クラウン

アレン (神の道化臨界面突破状態)

SA

8000

リヨウメンスクナノカミ

エヴァンジェリン (吸血鬼の真祖として)  
ハイ・デイルイトウオーカー

一護 (卍解『天鎖斬月』状態)

黒の教団 エクソシスト元帥

12000

ジャック・ラカン (『赤き翼』アラルブラ所属の面々も同)

格)

15000

護廷十三隊長格

一護 (卍解『天鎖斬月』 + 虚化)  
ホロウ  
破面 (十刃ランク)  
アランカル エスパルダ

17500 藍染惣右助（崩玉を取り込んだ状態）

？ 一護（最終奥義『無月』発動）

ラ「こんな所だな」

フ「随分と頭の悪そうな図だね。これがレベルの差かい？」

コ「つか、一護強すぎるだろ！」

ラ「あいつは単純に生物としてのランクが違うからな。地獄行つてみたりして大丈夫なのかよ」

マ「ええと、これが直ぐに勝敗に直結するのでしょうか…？」

ラ「いや、そういうわけじゃねえ。単純にエドがこんなラインなのは水中、空中での戦闘手段がないからだ。もしあればグツと評価は上がる」

マ「なるほど。つまりは力量差をひっくり返すだけの戦術や戦略、あとは技術があるかですね」

ラ「そういうこつたな、ぬいぐるみの嬢ちゃん。如何に自分の有利な場に持ち込めるか。エドなんかは空飛ばれたら、打つ手ないし。

一護も虚化ホロウつー技あるけど、あれ体力すげえ使っらしいじゃん」

フ「これはあくまでも普通の時の状態だ。参考程度でお願いしたい。なお、作中ではAの1100を常にキープしていると思ってくれ」

コ「こっやって見るとあいつ、本当に強くなれんのか？」

フ「…っと、この表を書いてもらっている間に、時間が来てしまったようだ」

マ「ラストは駆け足で質問に答えます！」

Q3 名誉革命で打破されたのはジェームズでは？

A3 作者が不勉強で申し訳ない！私からきつく西洋史を学びなおすよっ言っておく！

Q4 同じ声の人が多いですが？

A4 同じ声？何のことかね？

Q5 今後の展開は？

A5 できるだけ、原作どおりに進めて行こうと考えている。

頑張るので、是非ともこれからも読んで欲しいとの事だ。

フ「それではこの辺で！」

マ「では、また！」

ラ「待つてるぜ！」

コ「…俺の出番がまるでねえ！」

フ「所でぬいぐるみ君。君を調べていいかい？マリアンヌを完璧な物とするために参考に…」

コ「いや、ちょっと待って…。何で来んの？ぎいやあああ！！」

こんな感じでコンのトラウマが増えていく算段です。

## LESSON START (前書き)

第二章の開始です。

OPテーマはBEST CRUSADERSの「TONIGHT  
TONIGHT TONIGHT」でお願いします。

## LESSON START

「はあ、はあ…」

既に何時から息は絶え絶えだったのか。それすらも判らないほどに奔り続けていた。目の前は鬱蒼と生い茂る熱帯の木や花、美味しそうな実もあるが、毒があるかもしれない。だが、今はそんなモノに目を奪われている暇はない。

足をいくつものシダ植物が絡めるが、それでも必死に動かす。

「くそ！何なんだアレ！」

後ろからは自分の身の丈程の巨大な剣を持った鎧が追って来るのだ。日本でいう武者鎧とは違って、板金の騎士の鎧だ。あれが自分に振り落とされたらと思うと、気が気でない。

何せ、こちらの武器はこのジャングルに入る前にエドから渡されたナイフが一本だけ。

これで、どうやって立ち向かえばいいのだろうか。

ガチャン、ガチャンと鳴り響く鎧の音が一層、恐怖を掻き立てる。

「にしても…」

才人は呟く。

「魔法世界に来てまでジャングルって…、ネギもアレンもすげえよ…」

鎧が奏でる死への独奏曲が小さくなっていく。どうやら見失ってしまったらしい。

ここへ来て既に3日。そろそろ、食事も碌なものを取っておらず、精神も肉体も限界に近かった。

何故、才人が一人でこんな熱帯のジャングルにいるのか。

話は3日前に遡る。

ギーシュとの決闘、という名の一方的な私刑制裁でボコボコにされてしまった才人は、しっかりと皆の前で宣言した。「強くなりたい」と。その意思を汲んでくれたのか、それとも自分たちの修行のついでなのかは知らないが、ここへルイズとタバサも加えた9人で修行が始まる運びになった。

その修行初日。

すっかり傷もエドの手によってふさがれ、体力も全快とまでは往かないが、それなりに動ける程度には回復した才人はアレンの案内で白い水晶のような物体の前に立たされていた。

場所はルイズの部屋。

才人とルイズ、そしてタバサと何処からそれを聞きつけたのか、キュルケまでがやって来ていた。

「ゼロのルイズ。何、あなた達こんなおもしろそうな事、やろうとしているの?」

ニタニタと精一杯のからかいを込めた笑顔でルイズを挑発する。勿論、ルイズとて遣られっぱなしではない。こちらも出来る限りの虚勢を張って答える。

「ふん、今に見てなさいよ。修行が終わったら、私を誰も『ゼロ』なんて呼ばなくなるわ」

何せ、キュルケの実家があるツエルプストーとルイズの実家があるラ・ヴァリエールはちょうど国境線を挟んでいる。つまりはトリステインとツエルプストー領がある隣国であるゲルマニアとは、開戦の口火が開かれる度に、真っ先に戦ってきた仇敵なのである。

尤もこのトリステインとゲルマニアの状態が比較的安定しているここ50年程は、お互いが殺しあうという事はないのだが、一度残された記憶と恨みは何よりも根深く、親から子へ受け継がれているのだ。

「ていうか、何でアンタがいるのよ!」

根本的な問題として、ルイズは疑問を呈した。

「私が誘った」

「はあ?」

ルイズの疑問に変わりに答えたのは、ぼんやりと本を読んでいた眼鏡の女の子だった。

「そうよ、ルイズ。私はタバサに呼ばれてきたの。あなたのことは関係ないわ」

「ぐぐぐ...」

何故、タバサが入ってきているのかは判らない。だが、基本的に独占欲の強いルイズは自分だけが受けられると思っていた修行が3人も増えたことが腹立たしいようだ。

「ま、まあ、そう言わずに...」

病み上がりの才人が寝めるが、ルイズとキュルケの睨み合いは終



わらない。

「はいはい、皆さん。そこまでにして下さい」

にゅっと白い水晶の中から出てきたのは、いつもの黒い法衣ではなく、漆黒のスーツに身を固めたアレンだった。その光景にキュルケとタバサは、目を点にしていたが、何度か見ていた才人とルイズは指して驚かなかった。

「皆さんを修行の場へと案内します。既に皆さん、始められていますので宜しくお願いします」

そう言うと踵を返して、再び中空に浮かぶ白水晶の中へと滴が水面に落ちるように消えていった。その様子にあっけに取られていたが、タバサが意を決して触れてみると、自分もすつとアレンと同じように消えていった。タバサを追う様に3人も続く。

才人とルイズは得体のしれないモノに入る恐怖があったので、少しでも目を強く瞑る。体がふわつと一瞬だけ軽くなると、また再び足元に固い感触が現れた。

ゆっくりと目を開けるとそこには、

「何だよ…、この空間…」

「凄い、なんてもんじゃないわ…」

広く広大な石造りの家が立ち並ぶ、大通りだった。しっかりと組み合わされた石は、同じ石製の建築物が多いトリスティンよりも圧倒的に技術のレベルが違う。いや、レベルと言うよりも根本から違うような気がした。

「あ、皆さん。来られましたね。こっちですよ」

この一週間ほどで見慣れた白髪頭の少年が先に立って案内する。通りの幅が7メートル程度の道はトリストインにはない。首都トリストニアの宮殿へと通じる大通りであるブルドンネ街でも5メートルも無いのだ。

ルイズはちよつとだけ悔しくなった。

少し歩くと、ちょうど街路の交差点なのか、噴水が設置された公園にたどり着いた。

そこでは何か大きな袋を担いだエドと、白いローブに身を固めたネギが何事か話し合っていた。

「ですから、僕の世界にはこういった理論で飛ばす物がありました  
…」

「待て待て、それだとおかしくないか？」

「いえ、実はその理論は否定されているんです」

「え、マジで？」

4人には全く理解できない小難しい単語が飛び交っている。議論に白熱しているので4人が到着した事に気が付いていないようだ。アレンが二人の肩を叩いて漸く、才人達のほうへ向いた。

「よ、元気になったみたいだな」

エドが軽い感じで才人に話しかける。良く目立つ赤いコートが実に彼らしいと思う。

「ええ、おかげさまで」

才人が頭を下げる。後で自分の怪我を治したのがエドだと聞いていた才人は退院したら、お礼を言おうと心に決めていた。礼を言わ

れたエドは頭を掻きながら、簡単に言う。

「何、ちょっとした気まぐれだ」

「それよりも…、ネギ君」

アレンに促されて、ネギが喋り始める。4人には話していないがこの10歳の少年、元の世界では中学の英語教師をしていた位に頭がいい。それも他人に解説したり、説明したりできる本当の頭の良さを持っている少年なのだ。

「えっと、皆さん。皆さんにはコレを使ってもらいます」

そういつて一歩右へ動き、後ろに隠していたものを見せる。

才人はそれを見て、精巧なミニチュアだと思った。勿論、科学技術に深くないルイズ達はポカンとしていた。高い尖塔を持った城のミニチュアが入った球が中心にあり、そこから6つの管が伸び、また球があるのだ。ここまで精巧で、それでいて互換性の有る代物はハルゲギニアでは作られていない。

「これは？」

タバサが尋ねる。

「これはですね…」

「これはドライオマ魔法球！1日が24日になるっていう代物だ！」

「あ、あのエドさん…」

ネギの説明をエドが強引に奪う。

ルイズたちは説明が適当すぎて付いていけない。

もう一度、ネギが一から説明を始める。錬金術師であるエドは、

基本的に自分の研究を秘匿するために暗号で研究書を執筆する。そのためか、他人に説明することが苦手なのだ。尤も、彼の説明というか自然科学分野に関する知識はレベルが違いすぎて、理解できる人は早々いないのであるが。

「これはこちらでの1日を24日として生活できるものなんです。ですから、この中で修行すれば、こちらでの短い時間で多くの経験を積むことが出来るんです」

「あ、なるほど」

才人だけは得心が行ったようである。時間の概念が今ひとつないルイズ達と違って、才人は現代日本の男子高校生である。常に一定の時間に追われている生活をしている。そんな彼だからこそ、一番に理解できたのだ。

「でも、どうやって入るんだ」

「簡単ですよ。これに手を当てて下さい」

そう言って4人を促す。

「どうということよ？」

ルイズは訳がわからないと言った様子で尋ねるが、その目の前でシュツ、シュツと6人が次々と消えていった。

「あ、あれ？何処行ったのよ」

アレンも、ネギも、エドも。

さっきまで言い合っていた才人も、キュルケも、タバサも。いきなり影も形も消えてしまった。

才人たちがダライオマ魔法球の中へと消えていた頃。

学院長室では、秘書のミス・ロングビルが書き物をしていた。

ある程度の仕事を終えて、彼女は手を止めると、学院長であるオスマンの方を見つめた。

そのオスマン氏はセコイア製の立派な造りの机に伏せて居眠りをしている。

ミス・ロングビルは薄く笑った。学院長だけではない、少なくともこの学院の誰にも見せたことのない黒い笑みであった。

「良い夢を、学院長…」

しっかりとオスマンが眠っていることを確認すると、ゆっくりと立ち上がり、呟くように消音のための『サイレント』の呪文を唱える。

オスマンを起こさないように自分の足音を消して、学院長室を出た。

ミス・ロングビルが向かった先は、学院長室の一階下にある宝物庫である。この中で管理されている物の管理や、盗賊などからの防衛というのも、学院長の仕事の一つである。

階段を下りて、鉄の巨大な扉を見上げる。扉には、梁に使われるようなぶっとい鉄製の門がかかっている。門はこれまた巨大な錠前で守られている。

「やっ、うっね…」

ここには、魔法学院成立以来の秘宝が収められているのだ。

ロングビルは、慎重に辺りを見回すと、杖を取り出した。鉛筆くらいの長さだが、彼女が軽く振るとするすると伸びて、オーケストラの指揮者が振るような指揮棒くらいの長さになった。

ロングビルは低く呪文を唱えた。

詠唱を終えると、杖を錠前に向けて振った。

しかし…、錠前からは何の音もしない。

「まあ、ここの錠前に『アン・ロック』が通用するとは思ってないけどね」

くすりと妖艶に笑うと、ロングビルは自分の得意な呪文を唱え始めた。

それは『錬金』の呪文であった。誰にも聞こえないように、しかし、朗々と呪文を唱え、分厚い鉄のドアに向かって杖を振る。魔法は扉に届いたはずだが、しばらく待っても変わった所は見られない。

「スクウェアクラスのメイジが『固定化』の呪文をかけているみたいね」

ロングビルは呟いた。『固定化』の呪文は、物質の酸化や腐敗を防ぐ呪文である。

これをかけられた物質は、あらゆる化学反応から保護され、そのままの姿を永遠に保ち続ける。

だが、酸素や窒素といった元素、元素化合物といった化学のないハルゲニアのメイジにとっては、物体が変わっているという程度の認識であるが、それでもその変化を防止できる『固定化』の呪文は思いの外、ポピュラーな呪文なのである。

『固定化』をかけられた物質にはロングビルの掛けた、物質の素材そのものを変化させる『錬金』の呪文も効力を失う。呪文をかけ

たメイジが、『固定化』をかけたメイジの実力を上回れば、その限りではないが。

「さつて、どうしましょうか？」

しかし、この鉄の扉に『固定化』の呪文をかけたメイジは、相当強力なメイジらしい。学院長つきの秘書とは言え、『土』系統のエキスパートであるロングビルの『鍊金』を受けつけないのだから。ロングビルは、ずれたメガネを直し、何事か思案して扉を見つめていた。

そのとき、階段を上ってくる足音に気づく。

その足音を警戒した彼女は杖を縮めてポケットにしまった。

現れたのは、コルベールだった。

「おや、ミス・ロングビル。ここでなにを？」

コルベールは間の抜けた声で尋ねた。ロングビルは愛想のいい笑みを浮かべた。

「ミスタ・コルベール。宝物庫の目録を作っているのですが……」

「はあ…、それは大変だ。一つ一つ見て回るだけで、一日がかりですよ」

ロングビルの任された仕事に、やれやれと言った様子でコルベールは肩を竦める。彼も学院に奉職して長い。オスマンに付き合い、この部屋の掃除を手伝ったこともある。

「何せここにはお宝ガラクタひっくるめて、所狭しと並んでいますからな」

「でしよっね」

くすりとほほえましく笑うロングビルに、優しくコルベールは言った。

「オールド・オスマンに鍵を借りればいいじゃないですか」

ミス・ロングビルは微笑んだ。

「それが……、ご就寝中なのです」

上の階でぐっすりと寝ている学院長の顔を思い出しながら、答える。

「まあ、目録作成は急ぎの仕事ではないし……」

「なるほど、ご就寝中ですか」

がっくりとさつきよりも大きく肩を落す。

「あのエロジジイ、じゃなかった、オールド・オスマンは寝るとなかなか起きませんからな」

学院長に用があつてここまで来たのに、寝ているのでは無駄足になつてしまう。コルベールは起きているタイミングでもう一度来ることにした。

「では、僕も後で伺うことにしましょう」

コルベールは歩き出した。それから、ふと立ち止まり、振り向いた。



「その……、ミス・ロングビル」  
「なんででしょう?」

照れくさそうに、コルベールは口を開いた。

「もし、よろしかったら、なんですが……。昼食をご一緒にいかがですか?」

ロングビルは、少し考えた後、にっこりと微笑んで、申し出を受けた。

「ええ、喜んで」

コルベールは内心、飛び上がって喜んだ。だが、それを一片たりとも顔には出さない。一応は彼も常識ある教師なのである。2人は並んで歩き出した。

「ねえ、ミスタ・コルベール」

ちよつとくだけた言葉遣いになって、ミス・ロングビルが話しかけた。

「は、はい? なんででしょう」

自分の誘いがあっさりを受け入れられたことに気をよくしたコルベールは、跳ねるような調子で答えた。

「宝物庫の中に、入ったことはありません?」

「ありますとも」

「では、『破壊の杖』をご存知?」

「ああ、あれは、奇妙な形をしておりましたなあ」

顎に手を当てながら、その杖の形を思い出す。コルベールの見た感じでは到底、杖とは言えない様な独特の形をしていた事を思い出す。

その答えにロングビルの目が光った。

「と、申されますと？」

「説明のしようがありません。奇妙としか。はい」

これは本当だった。

それよりもコルベールはしたいことがあった。

「それより、なにをお召し上がりになりますか？本日のメニューは、ヒラメの香草包みですが……。なに、僕はコック長のマルトー殿に顔が利きますから、僕が一言言えば、世界の珍味、美味を……」

コルベールと言えども男であり、美人の気を引きたいと言う欲望はあるのだ。

「ミスタ」

ミス・ロングビルはコルベールのおしゃべりを遮った。

「は、はい？」

「しかし、宝物庫は立派なつくりですわね」

梁のような門、手のひらには治まりきららないほどに巨大な錠前。どれも盗まれないための工夫だ。

「あれでは、どんなメイジを連れて来ても、開けるのは不可能でしょうね」

「そうですね。メイジには、開けるのは不可能かと思えます」

この学院の創立からこの宝物庫はあつたらしい。

大事な品をいくつも締まっているのだ。それを誰にも奪われないための工夫がなされている。

「なんでも、スクウェアクラスが何人も集まって、万事に對抗できるように設計したそうですね」

「ほんとに感心しますわ。ミスタ・コルベールは物知りでいらっしやる」

ロングビルは、コルベールを頼もしげに見つめた。

「え？いや……。はは、暇にあかせて書物に目を通すことが多いもので……」

さっきの発言も『トリステイン魔法学院沿革史』という本を読んだ時に見つけた記述だ。真偽の程は流石のコルベールにも確かめようが無い。

「研究一筋と申しましょうか。はは、おかげでこの年になっても独身でして……、はい」

自嘲気味に言うコルベールに、

「ミスタ・コルベールのおそばにいられる女性は幸せでしょうね」

ロングビルは優しく囁く。

「だって、誰も知らないようなことを、たくさん教えてくださるんですから……」

更にうつとりとした目でコルベールを見つめた。

「いや！もう！からかってはいけませんよ！はい！」

コルベールはかちこちに緊張しながら、禿げ上がった額の汗を拭いた。それから、真剣な顔で、ロングビルの顔を覗き込んだ。

「ミス・ロングビル。次のユルの曜日に開かれる『フリッグの舞踏会』はご存知ですか？」

「なんですか？それは」

舞踏会と言うからには、舞踏をする会なのであるが、それが唐突に出てくる意味がロングビルにはわからなかった。

「ははあ、貴方はここに来てまだ二ヶ月ほどでしたな」

それなら仕方ないと言う風にコルベールは笑う。

「その、なんてことはない、ただのパーティーです」

やたらと「ただ」のを強調して言うコルベール。

「ただ、ここで一緒に踊ったカップルは、結ばれるとかなんとか！そんな伝説がありましたよ！」

「それで？」

「コルベールの慌てながら喋る調子にロングビルはにっこりと笑って促した。」

「その……、もしよろしければ、僕と踊りませんかと、そういうことで。はい」

「喜んで。ですが……」

そこで少しだけ憂いに沈んだ表情を作る。美人がするとそれはもう破壊力抜群である。

「舞踏会も素敵ですが、それより、もっと宝物庫について知りたいわ。私、魔法の品々にとっても興味がありますの」

コルベールはミス・ロングビルの気を引きたい一心で、頭の中を探った。宝物庫、宝物庫と……。

やっと、ロングビルの興味を引けそうな話を見つけたコルベールは、もったいぶって話し始めた。

「では、ちょっとご披露いたしましょう。たいした話ではないのですが……」

「ぜひとも伺いたいわ」

興味津々といった様子でロングビルが、コルベールに迫る。

「宝物庫は確かに魔法に関しては無敵ですが、一つだけ弱点があると思うのですよ」

人差し指を立てて、まるで言い聞かせるような調子で喋りはじめた。

「はあ……………、興味深いお話ですわ」

「それは……………、物理的な力です」

「……………物理的な力？」

問題解決の糸口を見つけたロングビルは、更にコルベールに近づく。

「どんどん近づいていくのだが、美人と一緒に居られることよりも、美人に自説が語れる喜びのあるコルベールはその事に気が付いていない。」

「そうですね！例えば、まあ、そんなことはありませんのですが、巨大なゴーレムが……………」

「巨大なゴーレムが……………？」

コルベールは得意げに、ミス・ロングビルに自説を語った。聞き終わった後、ミス・ロングビルは満足げに微笑んだ。

「そうですね……………」

コルベールの話を聞いたロングビルは、妖艶な笑みを再び浮かべた。それは学院の秘書と言うには似つかわしくない笑みであったが、一緒に食事が出る事にすっかり舞い上がっているコルベールは気が付かなかった。

舞台は戻り、今度はネギの魔法球の中。

「…みんなっ！」

シユタツとルイズが降り立つ。傍に居たのは憎き仇敵のキュルケだけだった。

「やっと来たわね、ルイズ」

「ちよつと、アンタだけ？他の皆は？」

自分を待っていたのがキュルケだけだとは随分な扱いである。

心の中ではまだ、7人を下に見ているルイズはこの扱いに怒っていた。

「…私に怒るよりも、周りを見て御覧なさいな」

キュルケに言われて気が付く。

「な、何よ！コレ！」

周りは断崖絶壁。ただ、それも切り立った自然物というよりは見事に整地されたつかみ所の無い塔の頂上だった。手すりも無く、自分の顔と桃色の髪を吹き抜ける風が弄る。

奥には見たことの無い植物が鬱蒼と生い茂る森、そしてその緑に囲まれるように、白く高い尖塔が聳え立つ城があった。

「全く、何よコレ！私なんかよりもずっと立派じゃない」

この魔法球の持ち主、ネギ・スプリングフィールドの立派さに、ルイズは自分の身の小ささを嘆いていた。だが、そんな落ち込みをチャラにする以上の面白いネタが目の前に転がっていた。

「所でキュルケ、あんた足が震えてるわよ」

「…ふ、ふん！『ゼロ』のアンタに心配されたくないわよ。これは武者震い！」

精一杯強がっているが、明かに足が震えている。勿論、それはルイズも同じだったのだが。

「にしても、ルイズ。あなた随分と遅かったわね」

やれやれと言った様子で、肩を竦める。

「あたし、待ちくたびれたわよ。他は先に行っちゃうし」

その様子にルイズは怪訝そうな顔をする。

「え、そんなに待ったの？私、そんなに居たような気がしないんだけど・・・」

「ようこそ、いらっしやいました」

言い争う二人の下へ何処からとも無く、メイド服を着た長身の少女が現れた。

「えっと、貴方は？」

唐突に現れたメイドにキュルケは名前を尋ねる。

名前を聞かれたメイドは恭しく一礼し、

「私はこのレーベンスシユルト城の管理人、チャチャでございます。本来この城は、我が主のモノなのですが、今回は期限付きでネギ様に貸し出されておりますので、よろしくお願いいたします」



「これはご丁寧に」

ペコリとキュルケが頭を下げる。こちらもしっかりと筋の通った綺麗な一礼だった。

「あたしはキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルト・ツエルプストー」

「私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ」

良く教育が行き届いて、礼儀の出来たチャチャの対応に、ルイズもキュルケも思わず、礼を返してしまった。本来なら貴族である彼女達はこんな事をしないのだが。

「では、こちらの魔法陣にお乗りください。何せ城までは歩くと500メートルありますので」

そう無表情にチャチャは言った。

ルイズ達が転移魔法陣に乗って行った先では、既に戦闘が始まっていた。

「どうした、お前ら！遅いぞ！」

一護の怒号が響く。背には刀は無く、素手だけで戦っているのに、刀を振り回しているシャナと夏梨を圧倒しているのだ。その光景にタバサは息を飲む。二人で戦ったとは言え、ギーシュを完膚なきまでに叩きのめした二人、その二人をまた、オレンジの少年は完封している。

それに唇を噛んで睨み返すのはシャナと夏梨だ。

「くそ！やっぱり速い！」

「うぬ、全く持って捕らえ切れておらん」

「いつも稽古つけて貰ってたから、気が付かなかったけど、やっぱ一兄は強いや」

投げ飛ばされ、空中で体勢を立て直す。本来ならここで追撃が来て、倒れ付しているだろう。それをしないのは単純に修行であって、戦闘ではないからだ。

「ならば、息を合わせて行くぞ」

遠雷のようなアラストールの声に二人は顔を見合わせる。一撃も与えていないが、一撃も与えられていない。完全に無力化されている。それだけの実力差があるということだった。

(私が『流月』<sup>りゅうげつ</sup>で攪乱するから、そのうちに)

(OK。その間に私が決める！)

「はああ！」「だりやあ！」

二人で飛び出す。夏梨は水を、シヤナは炎を纏って。

夏梨の打ち出す水の塊が砲弾のように一護を襲う。だが、その無数の塊を全て拳だけで打ち落とす。

だが、ここまでは二人とも予想通り。弾けた水の塊が生んだ飛沫に隠れて、一護の視界は無くなった。

この攪乱作戦で距離を詰めたシヤナは刀を思いっきり振りかぶる。

(一撃で決める！)

力を注ぎ込む感覚、構成することで感じられる距離、威力と『殺し』の範囲、

その全てが一致する。

（強いからこそ、全力で行く！）

大太刀を飛沫の向こう、大上段に構える。

（一撃で、決めろ！）

足を重く地に打ち、背中に隠した形になった右腕に、思いつきり練り上げた力の源”存在の力”を込める。これを利用して鍛錬して、更に強く得た感覚と感触が、実践の中で繋がる。強く握った『贄殿遮那』に自身の中に入ったアラストールのイメージを重ねて、強く放つ。

「っだあー！」

大太刀の剣尖から恐るべき密度と確たる存在を持った紅蓮の炎が迸る。

その光景に危機感を感じたアレンは、傍で見ていたタバサの襟首を引っつかんで庇う。

必殺の一撃にも見えるが、これはまだ序の口。

（本命は…）

（これに紛れた…）

「追撃だろうな」

紅蓮の炎の向こう、オレンジ頭の少年が意に介した風も無く立っていた。追撃のために、肉薄していたシャナと夏梨は届く寸前だった刀の柄を、自分たちの手の上から、更に大きな手に握られていた。じたばたしても握りこまれた手は解けない。打つ手無しだ。

「…むう、降参」

「…降参」

少女二人が白旗を上げる。それを確認した一護は手を離さずに、先に二人を地面に立たせてから、手を優しく離した。

「しかし、強いな。一護」

シヤナにとって父親であり、兄であり、友であり、師でもある、この炎の魔神は普段は簡単に人を褒めたりしない。そんな彼が素直に一護の実力を認めたのだ。シヤナも嫌々ではあるが、認めていた。「強いつていうか速いんだ。お前も速く動けるようになったら、変わると思っぜ」

にっとなんて笑って、シヤナの頭を乱暴に撫でる。

少し痛くて、手を離された後の頭をシヤナは自分でも撫でた。

「一兄、私は？」

「あー、夏梨はもつと『瞬歩しゅんぽ』頑張れ。鬼道は全くわかんねえから、自分で頑張れ」

乱暴な言い方だが、これは事実なのである。一護は死神としての基本戦術の内、鬼道による戦闘がまるで出来ていない。最早、才能と言い換えてもいい位に才能がない。だからこそ、剣術と拳闘、そして歩法で戦っているのだ。逆に夏梨は鬼道の出来がいい。その分、他の要素はまだ発展途上なのである。

発展しきった所で、一護を超えられるかといえば、無理な話であるが。

「お、来たか。お前ら」

「遅い！」

「どう、ここ？すごいでしょ」

3人にとっては久しぶりに見る4人の顔。その顔を見た対応はまた違っていた。

全員を揃ったことを確認して、ネギが整列させる。

「皆さん、並んで下さい」

その若干泣きそうな声に、圧されたのか9人は整列する。キュルケとルイズがどつちが、一番の方へ並ぶかと喧嘩し始めたので、ネギの涙の度合いが酷くなり、エドが二人を殴って辞めさせた。

「先に説明したとおり、ここでは1時間が1日になります。それを利用して皆さんにはしっかりと修行してもらいます。勿論、僕もですが」

「はい！」

ネギの言葉に強い返事が返ってくる。

返事を返さないのは修行のしようがない一護とアレンだ。彼らには別メニューが用意されている。意思のしっかり入った全員の返事にネギは、一護とアレン、エドの4人でこの魔法球の中、2日寝ずに考えたメニューを発表する。

「まず、才人さん」

「おう！」

「才人さんには、まず基礎体力を付けてもらいます」

「きそ、たいりよく…？」

才人の疑問に、エドが答える。

「いきなり、剣振り回したり、体術学んで生かせると思ってんのか？」

エドの小ばかにしたような言い方にカチンとくるがぐっと堪えた。

「詳しいことは、エドさんが付きますので、聞いてください。次にシヤナさんと夏梨さん」

「はい!」「おう!」

正直、彼女達も自分より年下のネギに仕切られるのは面白くなかったが、実力差を考えると致し方ない。そういった意味では理性より合理性を取るのには彼女らだった。

「お二人は、先ほど同様、一護さんに稽古をつけて貰って下さい。

一護さん、お願いします」

「任せとけ」

面倒に頭を搔く一護の傍、二人は嬉しそうに歯を見せて笑った。

「僕は3人の魔法を見ます。その代わりといっては何ですか…」

そこで一瞬だけ言葉を切る。それから、

「タバサさんには、引き続き文字を教えて欲しいんです」

「文字…?」

ルイズが怪訝そうな顔で隣に立つタバサと、目の前のネギの顔を

見比べる。

睨み付けるルイズをネギは「まあまあ」と抑えるが、タバサは彼女を一瞥しただけだった。

「あなたには関係ない」

「なあっ!？」

一言で会話は断ち切られ、ルイズは二の句が繋げなかった。そして続け様、さらに愕然とさせられた。

「ネギ」

「は、はい」

「よ、呼び捨てえ!？」

あんぐりと口を開けたルイズを余所に、二人の話は続く。

「大丈夫、それくらいならお安い御用」

二人の様子を見て才人はなるほどと思った。

自分が目覚めた時の二人。仲良さげに本を読んでいたが、そういうことだったらしい。

「そうですね。ありがとうございます」

「ん……」

「ちょっと! 字の練習って何よ!」

礼を言うネギに、さらに返すタバサ。

そのあまりに親密な二人に、ルイズは間に割って入った。

「いや、あの、ルイズさん。僕、こっちの文字がまだ上手く読み書

きできないんです」

随分とバツの悪そうな顔でネギが話し始める。

「それでタバサさんに教えてもらっているんです」

「そういうことは早く言いなさいよ！もう、何でご主人様の私に黙って」

バシン！とシャナとキュルケの手が飛んでくる。

「痛いわね、何をするのよ！」

「お前は学習しないの？」

冷たいシャナの言葉。

「空気読みなさいよ、ラ・ヴァリエール」

呆れた調子のキュルケ。

二人の言葉にルイズはぐっと押し黙る。

「あ、あのー、皆さん宜しいですか？」

一頻り騒動が終わったのを、ネギがおずおずと確認する。

「では、皆さん。お願いします」

そう言って一同は解散する。

一護はシャナと夏梨を連れ立って、別の場所へと向かう。

一通りの修行が終わる10時間後までアレンは城を出る。その間、アレンは別の事を行う。



ネギが奥の城へと女の子三人と伴に向かう。  
才人は一人、残されてしまった。

「あ、えっと…」

目の前には慥然とした感じの金髪と赤コートの少年。肩にはどうやって止めているのか、小さな騎士のような人形が乗っかっている。

「エドワード・エルリックだ。んで、こっちが…」

「弟のアルフォンス・エルリックです」

エドが指さした所から声が聞こえる。だが、そこには誰も居ない。

「どっから、声が…」

「目の前に決まってるんだろ！」

イライラという調子でエドが喋る。ルイズもだが、この少年も随分と血の気が多い。直ぐにカツと頭に血が上る性質たぐなのだ。ぐいっと才人の襟首を引き寄せ、人形の前に持つてくる。

「僕がアルフォンスです」

兄とは違ったおどけた調子で人形が喋っている。その光景には流石の才人も驚いた。

「人形が…、人形が、喋ってる！」

「あ、それくらいで驚くんじゃねーよ。あいつらなんかオコジヨが達者にべらべら喋ってたぞ」

その上、喋るオコジヨまで居るらしい。

本当の意味で、この人達はレベルが違う。腕っ節もだが、何よりも心が違う。

(何せ、人間以外が喋ることに驚いてないんだから…)

才人の考え方は凡その外れであるが、エドもアルもこれ以上の問答は無駄だと思い、早速始めることにした。

「んじゃ、早速始めるぞ。ちょっとこっちに来て」

そう言つて魔法陣へと案内する。

再び、レーベンスシユルト城から移動する。

移動先は木々が鬱蒼と生い茂るジャングルだった。才人の目には見たことも無いような草や木が写っている。毒があるかもしれない、派手派手しい実や花も、遠くに見えていた。

「うわ…、なんだよ、コレ…」

「これが才人君の修行場だよ」

人形なので表情が読みにくいだが、きつと喜んでいるのだろう。嬉しそうな声でアルが喋る。

「ここで修行…？」

困惑する才人にエドは鞘に入ったナイフを投げて寄越した。

若干、乱暴な投げ方だったので才人は取り損なつて、地面に落とすってしまった。

「これは…？」

更に才人は困惑の表情を強くする。

「取り敢えず、10日間。ここで生きるだけの基礎体力が、修行の最低条件だ」

エドが厳しい調子で言う。

「ここは取り敢えず、凍死の心配はない。食べられる動植物もあるし、海も近いから魚も取れる」

「凄く過ごしやすい所だよ」

「ナイフはせめてもの饞別だ。上手く使ってくれ」

「切れ味の良いのを用意しました」

エドとアルが交互に説明をする。

つまりは自給自足で生活しろと言うことだ。最も気候はそれなりに整えられ、暑いが我慢できないほどではない。一応は屋内なので雨は降らない。

「んじゃ、頑張れ」

そういうとエドが自分を困うように檻を錬成した。一見するとエドが閉じ込められたように見えるが、実際は逆だ。エドの足元には主城へ赴くための魔法陣がある。この密林へ来るための唯一の手段。それを防がれたということは、才人は戻る事が出来なくなってしまう。

それに気が付いた才人が嘔み付く。

「ちょっと、何してんだよ！」

「強くなりたいんだろ？」

鉄格子を挟んで真剣な顔が向かい合う。

「……」

「どうしても無理だって言うなら、コレを鳴らせ」

鉄格子に一箇所だけ用意された大きく湾曲した場所。そこから掌大のハンドベルを差し出した。

「これは…？」

「これを鳴らせば、助け出してやる。但し、その時点で修行は無しだ」

エドの真剣そのものの口調に才人は押し黙った。

自分より背も低く、歳も若いくせに、その金色の双眸には深く重いものがあつた。真っ直ぐに才人の黒瞳を見つめている。

「お前の世界に戻る手段も考えてやるから、大人しくルイズお嬢様の召使でもやってみろ」

嫌に『お嬢様』の部分を強調して言う。

基本的にまだエドもアルも、ルイズを信用した訳ではない。6人の資本力の源であるエドはルイズに頼らなくても生きていける筆頭格である。彼は召使になる気は毛頭ない。

「何なら今鳴らせ。ま、お前の負けん気なら鳴らす気はないだろうけどな」

ふつとエドは鼻を鳴らす。その様子にくすくすと肩の騎士人形が笑った。

それだけ言うと、エドは再び魔法陣で消えていった。だが、消え

る寸前に、

「ああ、ちなみに俺ら兄弟は二人だったけど、同じ状況で1ヶ月生きてきたぞ」

輪郭も判別できなくなった所で、更に追い討ちを掛ける一言を告げる。

「ちなみに、10歳のときだけだな」

「な…！」

こうして才人は密林に取り残された。

「…見てろよ。絶対に生き残<sup>ぜって</sup>つてやるからな！」

最後に腹の立つ一言を言い残したエドに対抗心をむき出しにする才人。

こうして才人達の修行が始まった。

だが、才人の腹は容赦なく食べ物要求する。

「その前に食べ物だな…。南の島だし、食い物くらいあるだろう」

## l e s s o n f o r d e f e n d i n g a b e i n g

このドライブオマ魔法球の中で、既に3日。

最初ネギに誰が文字を教えるかで揉めに揉め、沫や取っ組み合いの喧嘩にまで成りかけたが、結局タバサが教える事になり、3人の魔法の修行をネギが見ることとなった。

キュルケは一護とアレンに教えようとしていたが、二人にはにべも無く断わられた。

「まず、この世界の魔法に関する本を読んで気が付いた事があります」

難しい顔で、黒板に何事が書き連ねていくのは、魔法先生のネギである。

才人の決闘から、事態が事此処に到ったことで、一応はこの世界の身元引受人であるルイズとその一番近い学友である二人には6人も存在を明かしたのだ。

勿論、誰にもバラさないという条件付で。

二人がトリステインとは違う外国、キュルケは軍事大国ゲルマニアから、そして、タバサはハルゲギニア最大の国家であるガリア王国からの留学生であると言うのも大きかった。

嫌らしい言い方ではあるが、彼女らとパイプを作っておけば後々、有利に働くことは間違いない。ここらへんは「軍」と言う円滑に情報伝達を運ぶ組織で動いてきたエドとアルの発言が正しかったし、他の面々もそれに同意した。

「信じられないわね…」

「そんな存在が居るなんて…」

「でも、この目で見た」

三人の感想はこんな感じである。  
自分たちの存在の証拠として武器や技術を見せるよりも、実演してみせた。

それを見れば、既に見ているシャナと夏梨の二人は於いておいても、他の三人の力、メイジではないがメイジと互角、いや、それ以上の力を持つ圧倒的な存在である事は容易に予想が付いた。

「…」

ルイズとキュルケが感嘆のため息を漏らす中、タバサだけは全く別の事を考えていたが。

その中に置いて最年少であるネギ・スプリングフィールド。  
彼は魔法使いである。つまりはメイジ。三人を教えるのには打つてつけの存在だった。

修行の当初は、魔法理論、実践ではなく使い方とか、魔法が起きる現象や理屈について説明していた。理論を教えてもらうという事で、三人ともかなり不満そうだったが、理論を侮ってはいけなさと言うネギの言葉に圧されて、グツと我慢した。

「それは魔法使いが限定的であるということですよ」  
「どうということ？」

そんな彼が唐突に話した。

覚えてたての文字を黒板に書きながら、説明していくネギ。

タバサが教えたのは簡単な文法と文字だけである。しかし、そこは天才と謳われてきた少年である。簡単な取っ掛かりだけ掴むと、あつと言う間にハルゲギニアの公用語であるガリア語をマスターしてしまったのだ。修行開始から3日たった今では、殆どルイズ達と筆談で会話できるようになっていた。

「つまりこういう事です」

図と図解を入れながら、ネギは自分の魔法体系と、ハルゲギニアの魔法体系の違いについて大雑把に説明した。

相次いで聞こえてくる剣尖がぶつかり、擦れ合う音のほかには何も聞こえてこない。

一護達のほうも上々の仕上がりのものである。

「つまりは使えるのが血、つまりは遺伝子によって左右されると言う事です」

「?」「?」「?」

三つのハテナが並ぶ。遺伝学など兎に角、自然科学については遅れに遅れている世界だ。

一から説明し出すと、それだけで日が暮れてしまう。現に今既に日が暮れている。

「腹、減ったな」

「飯にしようぜ」

そんな事を言いながら散っていた一護が戻ってくる。

肩にはぐつたりと疲れきったシャナと夏梨の姿。これもこの数日で見慣れた光景になった。

それから直ぐに食事、和気藹々と言った風でもなく、坦々と食べて、坦々と夫々が皿を洗う。

その後は、各員伴に個室が与えられているので、そこに備え付けられたベットに横になる。

エドだけは、毎夜のように図書館へと消えていくのだが、それを誰も追う気にはならなかった。



これが3日間の8人の生活リズムであった。

その夜のこと。

「うわあああああ！！」

ネギはベッドから跳ね起きた。

びっしょりと全身は冷たい汗に濡れ、息は運動の後以上に荒かった。

「はあはあ……あ、あつ……？」

「うわあ、何だ何だ、兄貴！」

余りの大声だったのか、カモまでもが彼専用に使えられた、小さなベットから跳ね起きる。

キヨロキヨロと見回すと、そこはレーベンスシュルト城に備えられた自分の部屋。家具や調度も、自分好みの安くて丈夫なアンティークを揃えた苦心の部屋である。

ネギは今の自分の状況を思い出し、安堵の溜息を吐いた。

魔法球の中で修行したのはこれが始めてではない。

頻繁に出入りを繰り返して、休息をとることも多かったネギには専用の部屋が与えられている。他にも彼と一緒に修行した面々の部屋もあるのだが、これには管理人であるチャチャが鍵を掛けていた。

自分の部屋だという事が、ネギの安心感を更に大きくする。

「夢、か……よかった」

「兄貴どうしたんだ……？」

傍で寝ていたカモが薄目を開けて、心配する。

「うっん、大丈夫」

その不安げなオコジョの顔に、汗だくの顔で笑顔を作る。腕を見る。何ともなっていない。

身体を見る。五体満足の体がそこにはあった。

窓から漏れる月明かり。怖い師匠との修行中に何度も見てきた空と月だ。

「はあ……」

ネギは部屋の扉近くにあるポールスタンド型のハンガーまで寄ると、掛けてある自分のローブの内ポケットから何枚かのカードを取り出した。

綺麗な文字や模様が印字されているタロット程の大きさのカードには、それぞれ別の女の子が居る。

これはネギのパートナー、世のため人のために動く事の出来る、立派な魔法使い《マギステル・マギ》を目指す上で余りにも未熟である彼を、心から支えてくれる頼もしい仲間であった。

その内の一枚を額に当てた。

空港で別れたきりの自分の姉貴分であり、叔母であるアスナがカードの中にはいた。

「テレパティア念話、アスナさん……」

応答は無い。

このカードには対象者と念話を結ぶ機能がある。だが、その念話機能は簡単に妨害ができる程度の性能しかなく、同様に召喚機能も5〜10Km圏内という制限がある。

異世界であるハルケギニアにいるのだから、仲間のへの連絡手段が一切なかった。

「兄貴……」

そんな彼の様子を、使い魔であるカモミールは見ていられなかった。

しかし、もしかしたらということもある。

ネギは万に一つもないはずの僅かな可能性を期待し、時折こうしてカードを使っていた。魔法球の中でも、それを起点にした半径内なら通じる。

実時間で一時間おきに、こういして念話を送っているのだが、芳しい成果は上がっていない。

この結果にはネギだけでなく、カモも愕然とした。

外に出て飛び回って探知しようかとも思ったが、一日酷使した頭と体は睡眠を欲している。

「心配してるだろうな……」

「そうっすよね……、特に姉さん達は……」

カードを仕舞い、ベッドに戻ったネギは呟く。

「はぁ……」

「はぁ……」

半ば諦めにも似た溜息をつき、ベッドに横になるネギとカモ。ネギにはある不安感があった。

自分の中の別の自分が揺り動かされるような、そんな漠然とした感覚が体の中を駆け巡っているのだ。ここ最近は安定していたのだが、この世界に来てから異常なまでに大きく膨れ上がっている。

「おやすみ、カモくん」

「おやすみだぜ、兄貴」

気にしていても仕方が無い。

明日も早い。この空間だけで通じる目覚まし時計をもう一度セツトし直すと横になって目を瞑る。

ベッドから見上げる光景もいつもと一緒なのに違和感が拭えず、安心して眠れるようになるにはいつまで掛かるか、それはネギには分からない事だった。

「腹、減った…」

同じ頃、才人はジャングルの地面に大の字で倒れていた。

澄んだ夜空に浮かぶ月が、優しく才人を照らしている。だが、その優しい光も才人を全く癒してはくれない。寧ろ、余計に傷ついたような気がする。

ジャングルに来てから早3日。才人はこの鬱蒼と熱帯植物が生い茂るジャングルに放り出されてから碌な食事を取っていない。水だけは小川を見つけたので、困っていない。

「くそ、あの鎧…」

森に入って、木の実を取ろうとすれば鎧に追いかけられ。

海に入って、魚を取ろうとすれば魚には逃げられ。

漸く取れた魚も、火が熾せなくては食べる事ができない。生で食べる事もしてみたが、とても食べられるような味では無かった。不味いだの、味が無いだのを通り超えている。

再び、水以外何もない腹が音を立てて、自己主張する。

傍には木の枝と、葉っぱで拵えた寝床がある。最初に浜にたどり着いた時、造ったのがコレだった。

とても簡素な作りではあるが、月光くらいなら遮断できる。

「寝よ…」

起きていても体力を使うだけである。空腹の状態で何時までも起きているのは得策ではなかった。素直に目を瞑ると、今日も鎧に追いかけられ、木の実が取れなかったことが悔やまれた。

翌日、才人が目覚めてみると、体が動かなかった。

食事を取らず、水だけで生活してきた彼の精神と体力は限界だった。

「…なんで俺、こんな事してるんだろ…」

才人の疑問は当然と言えた。

何故、自分はこんなバカみたいな事をしているんだろう。

正直な話、エドは逃げ道を用意してくれていた。それがどんな道になるかは才人は知らないが、これを選んだのは自分である。誰かを恨んだりはしていない。恨むとすれば、安易にこちらの道を選んではまった自分を恨んでいた。

「はあ…」

動かない指先をアリが這うのを虚ろな瞳で見ている。泥だらけ、砂だらけの指は痛みがあるが、誰も才人の脳の声には応えてくれない。

そんな時、ガチャン、ガチャンと鉄の擦れ合う音がしてきた。

この3日で何度も聞いてきた断末魔の音。

燦燦と降り注ぐ、太陽を見つめる虚ろな視線を棘を生やした鎧が遮った。手には相変わらず、大きな剣が握られている。

「…殺せよ」

才人はどうでも良くなった。

どの道、元の世界に変える手段など無い。かといって彼らと轡を並べて戦える訳が無い。彼の言葉は選択肢を防がれた末に出た、消極的な自殺だった。

短く言つと、再び目を瞑る。何時来るかも判らない剣が自分に目掛けて振り下ろされる時を待つて。

だが、幾ら待てども痛みもしなければ、風を切る音すらしない。

「……？」

代わりに香ってきたのは、たんぱく質が良く焼けた香ばしい匂い。幾度もかいた焼き魚のおいだ。

動かない体の中で、首の筋肉に鞭を打つて、匂いのする方を向く。そこでは大きな鎧が、火を熾して魚を焼いていた。大男の鎧が、細やかな作業をしているのは見ていてコミカルだった。思わずくすくすと笑ってしまう。

その音に反応したのか、鎧がガチャンと音を立てて振り返り、才人と目が合う。その目には虚ろな差人の目にも心配が浮かんでいる事が、しっかりと判った。

「これは…？」

振り返る序でに、鎧は焼けた魚を才人に差し出す。香ばしい香りが才人の鼻腔をくすぐる。

「食べていいのか？」

鎧はまたガチャンと音を立てて頷いた。頷き終わらない内に、才人は魚に被りついた。塩もしていなければ、醤油も無い。無い無いづくしの魚ではあったが、3日ぶりの食事は才人の腹を刺激した。

「う、うう…」

思わず泣いてしまう。その才人の顔を鎧は嬉しそうに眺めていたが、やがて森の中へ消えた。

「あいつ、何なんだ…？」

自分を追つてみたり、食事を振舞つてみたり。そんな鎧の行動を才人は怪訝そうな顔で、消えていった森の闇を見つめていた。食事が取れたことでいくらか精神が安定した。

「そっか、そっだよな…」

もう一度、寝転がる。確りとした視線の先には、またしつかりとした太陽があった。

そして己の行動を恥じる。

木の実が取れない？

魚が取れない？

その程度の事は諦める理由にはならず、寧ろ、自分は取るうともしていなかったのだという事を。

思わず口をついて出た言葉だったが、鎧に向かっていった言葉を撤回したかった。

鎧の残した魚を付いていた串は尖っていた。勿論、最初から先端

が尖っている木など存在しない。傍に散らばった削りカス。ナイフで研いだのだという事は容易に予想が付いた。

渡されたナイフは魚を捌いたり、あの鎧と戦う為のものなのだろう。というか、10日も生きなくてはいけないのに、果物が取れない訳がない。

魚を手づかみで取る理由はない。木を削いで槍を作ってもいいし、そうすれば火だつて熾せるかも知れない。何の工夫もせずに、何の行動も起こさずに、死のうとしていたのが恥ずかしかった。

「よし、あの鎧をどければいいんだな…」

そうすれば取り敢えず、果物が取れるかもしれない。

鎧なら自分の腕力でも突き抜く事はない。だが、体勢を崩して動けなくする事くらいならできるだろう。出来なくても、出し抜ければ十分、木の実は取れる。

ナイフの柄を強く握った才人の左手の甲が、淡く煌いた。

その頃、外も夜であった。

ルイズ達の授業が終わり、夕食の時間が終わってから始めたのだから、仕方ないと言えば仕方が無い。アレン達の食事は勿論、食堂からルイズたちが代わりに頂いてきた。

「ん、いい月ですね」

アレンが外に居るのは、単純に修行の相手がいないという事と、



彼の食事量が半端ないことが原因だ。ドライオマ魔法球の中でも、時間が流れれば腹は減るし、眠たくもなる。彼を置いたままにしておけば、一日が24日になるあの中では、72食も食べる事になってしまふ。アレンの一回一回の食事の量を考えると仕方無い事だった。

「仲間はずれには去れましたけど、鍛えておきましょうか」

そういつと諸肌を晒し、ルイズの部屋の中、一本足立ちの椅子の上で逆立ちで腕立て伏せを始めた。しかし、直ぐに飽きてしまい、外に出る事にした。面倒なので、窓を大きく開け放つて、飛び降りた。小さな月のように煌く金色のティムキャンピーが、アレンの後を追って飛び出した。

巨大な二つの月が、魔法学院の本塔の外壁を照らしている。

「そういえば、景色を楽しんだことなんて何時以来だろ……」

夜の学院はまた変わっていて、幻想的だとアレンは思った。

黒の教団に入ってから、碌に景色を楽しむ事もしていなかった彼にとって、こうやって落ち着ける場所と言うのは何物にも替え難い価値がある。これで好きな女の子の一人でも居れば、盛り上がるのかもしれない。

そんな幻想的な二つの月の光が、壁に当たり、人影をくつきりと浮かび上がらせていた。

最近、ちまたの貴族たちを騒がしている『土くれ』のフーケであった。

「ちい！」

フーケは足から伝わってくる、壁の手触りに舌打ちをした。

「さすがは魔法学院本塔の壁ね……」

彼女が立っているのは魔法学校本塔の5階。

学院長室の直ぐ下で、図書館の上。昼間、コルベールとロングピルが話し合っていた学院の宝物庫がある、ちょうど外壁だった。そこに彼女は魔法で地面と平行に立っているのである。

「物理衝撃が弱点？こんなに厚かったら、そこらの魔法じゃどうしようもないじゃないの！」

足の裏で、壁の厚さを測ることは『土』系統のエキスパートであるフーケにとって、造作もないことである。だが、感じて測った石壁の厚さはかなりのモノがある。

「確かに、『固定化』の魔法以外はかかってないみたいだけど……」

更に少し歩いて適切な位置を探す。

フーケは苦い表情を含ませ、それでもなお薄い部分はないか調べる。少なくとも薄い方が宝物庫を破る労力と時間が短縮できる。誰にも見られない事がポリシーであるフーケにとっては大事な問題だった。

「これじゃ私のゴーレムの力でも、壊せそうにないね……くそっ！！」

やはりというべきか魔法学院の宝物庫の壁はどこもブ厚かった。付け入る隙が全く持って見つからない。

「やっとここまで来たつてのに……ちっ！！あのハゲ、役に立たないわね」

フーケは歯噛みをした。

目的のお宝は手の届く所まで来ている。ここで諦めては盗賊の名折れだった。

「かといって、『破壊の杖』を諦めるわけにやあ、いかないね……」

フーケの目がきらりと光り、そして腕組みをしたまま、じっと考え始めた。何事か良い手は無いかと思案するが、全く持って見つからない。

「仕方ないね、ここはもう少し情報を集めるかね」

今後の活動方針を決めたフーケは魔法を解除し、地面に降り立つ。そこでフーケは、ふいに誰かが近づく気配を感じた。

「ん？誰か来たみたいね。ったく良い子はお寝んねの時間だったのに」

フーケはそう呟くと、身軽な動きですぐに中庭の植え込みに消えた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3148x/>

---

LEGEND OF THE SEVEN

2011年10月24日02時07分発行